

令和元年度

NIE実践報告書

30周年記念特集号

第31号

Newspaper in Education

教育に新聞を

宮城県NIE委員会

宮城県N I E委員会実践報告書

宮城県NIE委員会発足30周年記念特集号

<第31号>

==== 目 次 =====

I あいさつ

宮城県N I E委員会	会 長 鈴木 一史	1
宮城県N I E推進委員会	委員長 門脇 恒明	2

II 寄稿

30年の重み	宮城県N I E委員会副会長 鈴木 淳	3
N I Eは何故広がらないのか	前小学校部会長 仙台市立七北田小学校長 相澤 経利	4
新しい時代のN I Eへ	現小学校部会長 仙台市立高砂小学校長 中辻 正樹	5

III 宮城県NIE研究大会の報告

1 日程と内容	6	
2 実践発表報告		
(1) 新聞に親しむ児童の育成を目指して	仙台市立館小学校 教諭 山内 崇寛	7
(2) 未来の創造～N I Eで育む強い心と高い志～	大崎市立岩出山中学校 教諭 齋藤 美佳	11
(3) 協働を促す教育活動としてのNIE活動例・2学年修学旅行と連携して	宮城県宮城広瀬高等学校 教諭 穀田 長彦	15
3 パネルディスカッション	19	
4 講演	東北大学加齢医学研究所 教授 瀧 靖之先生	26

IV 実践報告

(1) 南三陸町立戸倉小学校	30
(2) 聖ウルスラ学院英智小・中学校	36
(3) 仙台三桜高等学校	42
(4) 仙台城南高等学校	44
(5) 仙台市立泉松陵小学校	46
(6) 仙台市立長命ヶ丘小学校	48
(7) 宮城県多賀城高等学校	50
(8) 宮城県名取高等学校	52

V	宮城県N I E委員会30周年記念座談会「ともに歩む あすのために」	54
VI	部会活動実践報告	
	(1) 小学校部会報告	仙台市立高砂小学校 教諭 青木 茂・・・60
	(2) 中学校部会報告	仙台市立長町中学校 教諭 進藤 千枝・・・61
	(3) 高等学校部会報告	仙台城南高等学校 教諭 鈴木 理恵・・・62
		宮城県宮城第一高等学校 教諭 三嶋 廣人・・・63
VII	研修会報告	
	1 宮城県NIE推進委員会総会の概要	宮城県N I E委員会事務局・・・64
	2 地区研修会（大崎市立岩出山中学校開催）の概要	宮城県N I E委員会事務局・・・65
	3 N I E全国大会宇都宮大会参加報告	・・・66
VIII	研究組織	
	1 宮城県N I E委員会会則	・・・74
	2 宮城県N I E推進委員会会則	・・・75
	3 宮城県N I E委員会及び宮城県N I E推進委員会の構成	・・・76
IX	宮城県N I Eの歩み	・・・78
X	編集後記	・・・82

I あいさつ



N I E 活動の発展を願って

宮城県N I E委員会

会長 鈴木 一 史

(名取市立増田中学校)

私は、小学生のころから、毎日朝起きて最初にするのは、新聞を読むことです。そのため新聞休刊日には、朝何をすればいいのか困るほどです。新聞から多くのことを学び、社会科の教員になり、新聞を活用して様々な授業を行いました。

しかし、現在は新聞を購読している家庭が少なくなり、スマホなどのインターネットを通して、簡単な見出しのみで、中身をしっかりと把握することなく、自分の興味のある出来事しかわからない児童生徒が増えています。

そんな今だからこそ新聞紙面を読むことを通して、社会で起こっている出来事を丁寧に知ることや、時間をかけて考えるという環境が大切になってくると考えています。そしてそのことが新学習指導要領でも大切にするものとして「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につながってくるものと考えています。

さて、宮城県のN I Eの活動は、本年度で30周年という節目の時を迎えています。この間、学校教育現場と地元新聞社・全国紙、そして通信社等が一体となって「教育に新聞を」の共通理解の下、新聞教材の開発と活用の研究、そしてその普及を通じて、授業改善や情報活用能力の伸長を目指した提案等、大きな成果を上げて今日を迎えています。改めて、これまでご尽力いただいた関係者の皆様に心から感謝を申し上げます。

本年度の宮城県N I E研究大会は、12月20日、河北新報社1階ホールを会場に開催されました。はじめに県内の小学校・中学校・高校から一校ずつ実践発表がありました。

「新聞に親しむ児童の育成を目指して」と

いうテーマで発表した館小学校の実践は、学年ごとに同じ新聞を使っての指導の試みがなされ、様々な新聞活用の可能性を探ることができました。「未来の創造～N I Eで育む強い心と高い志～」をテーマとして取り組んだ岩出山中学校の実践は、志教育の推進の手立てとして新聞バックづくりなどとおしてN I E活動を実践しており、新たな可能性を提案していただきました。「協働を促す教育活動としてのN I E活動例・修学旅行と連携して」をテーマとして取り組んだ宮城広瀬高校の実践は、修学旅行先の新聞を読ませることによって一過性に終わらない体験学習につなげようという試みでした。

実践発表の後、仙台城南高校の中川西校長先生をコーディネーターとしてパネルディスカッションが行われましたが、パネリストからの提案のほか、会場の参加者からも活発な意見が寄せられました。

東北大学の瀧先生の講演も懇切丁寧にエビデンスに基づいたご説明をいただき、いい時間を過ごさせていただきました。その後、先生から講演の時アドバイスいただいた視点で、新聞を改めて読んでみたら自分の視野が広がったように思いました。

以上述べた研究大会のそれぞれの内容が大変素晴らしかったからこそ来年のこの大会にはより多くの方に参加していただき、普段の指導の一助にさせていただきたいと考えます。

結びになりますが、本県N I Eの充実した活動と今後の更なる発展を祈念いたしますとともに、これまでの活動に対する関係各位の皆様のご協力とご支援、そしてご指導に改めて感謝を申し上げます。



読む 聴く 反応する

宮城県NIE推進委員会

委員長 門 脇 恒 明

(仙台市立連坊小路小学校長)

最近、「反応する力」の育成に興味を持ち始めています。数年前から毎年のように訪れ学んでいる新潟大付属新潟小学校の授業に魅せられたことが大きな理由です。

附属新潟小の公開では、どの教科の授業においても友達の発言に気持ちよく、そして激しく反応する子供たちの姿が見られます。その反応の特長は、発表した友達の考えを受け止めた上で口に出して反応するという点にあります。「なるほど!」と受け入れながら同調して考えを述べる子供、「それはわかるけど」と一度受け入れはするが、違う考えで相手を説得し始める子供、「～さんの言いたいことは～ということですよ」と、友達の考えを代弁する子供等々、口で反応した後に連続して話し出す子供たちの姿に圧倒されてしまうのです。自分の考えをいつ発表するかで精一杯になって、他の話なんて聞いていられない子供たちの授業とは全く違うレベルの授業を見せつけられるのです。単純に、そして心から「こんな授業をしてみたい」「こんな子供たちを育ててみたい」と思うようになりました。

附属新潟小は数年間、全校挙げて「対話するスキルの育成」に取り組んできました。反応スキルを学年の発達段階に合わせて設定し、型として教えていくことと、実際の授業で他の考えに反応した子供を丁寧に褒め、価値付けていくことを繰り返し行うことでその定着を図ってきました。そして何よりも特筆すべきことは、「対話するスキル」を、「友達の考えをわかろうとして聴く話の聴き方」と定義し、最も重要なポイントとして掲げている点にあります。わかろうとして聴く行為を大切にすることが、反応する行為を生む重要なポイント

になるということです。アウトプットにこだわりを持ち、表現力の育成だけに力を尽くしてきた自分の指導方針を見つめ直す大きなきっかけとなりました。友達の考えをわかろうとして聴き、反応する風土が集団の中に醸成されれば、安心感を持って自己表現できる子供が増えるはずです。

学校教育の中で、このようなインプットの仕方を学ばせる機会は数多く存在します。その中でもとりわけ、「読むことによるインプット」、「聴くことによるインプット」は今までも大切にされてきた教育活動です。この読む、聴くという行為に、「相手の考えをわかろうとする」という視点を持たせることで、今までとは質の違うインプットがなされることでしょうか。例えば書籍や新聞記事、著者や記者がどんな思いを伝えたくて文章を綴ったのかを推し量ることは、目の前に相手のいない状況を考えると非常に難しいことだと思います。しかし、相手がいないからこそ、様々な想像を巡らせることができる深い学びにつながる機会になるはずです。例えば同じ新聞記事を読んでも人によって捉え方が異なることがあります。その違いの面白さを皆で共有し合いながら自分の考えを持つことは、非常に大きな意義を持つ教育活動になると考えています。今後は、集団での話合いの中で友達の考えを聴き、相手の考えをわかろうとする教育活動だけではなく、文章を読み、筆者の考えをわかろうとする教育活動も積極的に取り入れ、「読む」「聴く」の両面からインプットの仕方を学ばせていきたいと思っています。現場のニーズに即したNIEの活動が今後益々展開されることを願っています。

II 寄稿



30年の重み

宮城県N I E委員会

副会長 鈴木 淳

(河北新報社 防災・教育室長)

宮城県N I E委員会は1989年7月7日に設立されました。教育界と新聞社が一緒になった全国最初のN I E推進組織でした。11日には、実践する教員の団体、県N I E推進委員会もできました。令和に時代が改まった2019年度は、宮城のN I Eにとっても活動開始30周年の節目です。

年明け早々、20年1月9日に30周年記念座談会を催しました。これまでの歩みを振り返り、活動の課題を浮かび上がらせるとともに、より良い活動の方向性を探る目的でした。メンバーはN I E委員会会長で名取市増田中の鈴木一史校長、仙台市教委の野中映里指導主事ら6人。自分が司会をしました。議論は大いに盛り上がり、予定の2時間を30分以上オーバーしました。

一番印象的だったのは、メンバーからN I Eや新聞に寄せる愛情が強く感じられたことです。設立当初から活動している仙台市岡田小の阿部謙校長は「久しぶりに熱く語ることができた」と、終了後に振り返りました。若い世代の代表として参加してもらった小野ひよりさんは、教員志望の東北福祉大3年生。小野さんは、小学校6年生の時につくった17枚もの手書き新聞のつづりを持ってきてくれました。その新聞の台紙は、この日のメンバーでN I E委コーディネーターの畠山厚子さんが作ったものでした。小学校の教員だった畠山さんは30年前、児童が書きやすいようにとデザインしたそうです。素晴らしい偶然にメンバーはわき、伝統の重みを実感させられました。

31年前の熱気は続いているのでしょうか？「実践指定校の実践はすごいと思った

よ」と話したのは鈴木会長でした。19年末にあった宮城県N I E研究大会で、11校の実践校のうち小中高各1校に実践発表をお願いしました。その内容が充実しているという趣旨でした。野中さんは「設立当初、できることから取り組んだ精神は生きている。後継の先生も育てている」と指摘しました。現場の方々にはスタート時の余熱が今も感じられるようでした。

活動の障害になっているのは、新聞を読んでいない家庭、先生が増えていることでしょう。研究大会でも実践校の発表で触れられました。購読者減を踏まえ「学校が、子どもと新聞との出会いの場にならなくてはならない」という決意表明は、教育関係者に熱い共感を持って受け止められました。メンバー6人も研究会に出席しています。

座談会では学校図書館の役割の重要性が語られました。「新聞を読み慣れていない生徒が多い」と嘆いた実践校、名取高の小林治教諭は「記事を壁に貼って生徒の目に付くようにしている。司書の方も各紙の社説を貼ってくれている」と情報提供。出会いの場とするための工夫でしょう。野中さんも「図書館を学校の情報センターとして充実させることが必要」と同調しました。

文部科学省は17年度から21年度の5ヵ年、学校図書館の整備費として2350億円を予算化しています。このうち150億円は新聞配備費です。図書館との協働は、数年来の懸案でした。新聞の積極活用をうたう新学習指導要領が導入される20年度。懸案に道をつけて、次の10年に向けた新たな展開を始める年にできればと思います。

N I Eは何故広がらないのか

宮城県N I E推進委員会
前小学校部会長 相澤 経利
(仙台市立七北田小学校長)

NIEに携わり30年。こんなにすばらしい、こんなに教育的価値がある活動が、何故広がらないのか。

「NIEの目標は、良き市民を育てることである」。妹尾彰初代NIEコーディネーターの言葉である。NIEの目指すところは、まさにここにある。その実現のために、低学年では写真の切り抜き。中学年では新聞クイズ。高学年では投書などの実践を重ねてきた。実践の中で忘れられないのが、「自衛隊は必要か否か」のディベートである。新卒3年目で、まだNIEという言葉もない時代である。憲法記念日の朝日新聞と産経新聞の記事を元に6年生が真剣に話し合い、家族にインタビューし、さらには現役自衛隊員の方の話を聞く等、小学生がこんなに深く真剣に考えることができるのかと感じた授業であった。しかし、後で教頭先生から「政治的中立性という言葉を知っていますか」「小学校教育に政治教育は禁物です」と指導をいただいた。

時代は進み、「18歳選挙権」改正となり、主権者教育の重要性が増しているが、若者の投票率は低迷している。真の主権者教育とは、ニュースを通じて社会に興味・関心を持たせることではないだろうか。関心を持てば、世の中の様々な問題点が見えてくる。そして政治に無関心でいられなくなる。そうすれば、「世の中おかしいよね」では済ませることができず、「どうすれば世の中がよくなるんだろう」と考えるようになる。それこそが「良き市民」を育てる教育ではないだろうか。

しかし、現代社会に山積する「環境問題」「難民問題」「憲法問題」「食糧問題」「電力問題」「人権問題」等々の課題を授業で扱うことは、とても難しい。ここで問題となるのが、政治的中立性である。

教育基本法第14条(政治教育)

第十四条 良識ある公民として必要な政治的教養は、教育上尊重されなければならない。
2 法律に定める学校は、特定の政党を支持し、又はこれに反対するための政治教育その他政治的活動をしてはならない。

政治的中立性について、神奈川県教育委員会は以下のように解説している。

神奈川県教育委員会の小・中学校における「政治的教養を育む教育」では、「政治的教養」を『政治そのものの仕組みや政策について学ぶだけではなく、児童・生徒の発達の段階に応じて、自分の身の周りや住んでいるまち等の身近な問題から現実社会における社会的な諸問題まで、それらを自分のこととしてとらえ、話し合いながら、相手を尊重し、様々な意見を調整しつつ、合意形成のかたちを考え、意思決定に至る過程を取り上げて、社会参画につなげること』としてとらえています。小・中学校においても、「政治的教養を育む教育」を実践するにあたり、政策や論争等、対立する見解がある現実社会の諸問題を取り扱うことは有効であると考えます。(後略)

大いなる反省を込めて、NIEが広がらないのは、本丸を突けないからである。本丸を突く授業が当たり前にできる環境整備が必要である。政治的中立性という言葉は欧米諸国にはなく、教室で子どもたちが、新聞を広げ、自分たちで課題を見付け、ディベートが活発に行われている。「あなた方は、自分の子どもたちを愛していると言いながら、その目の前で子どもたちの未来を奪っています」。環境活動家グレタさんの言葉は、日本の教育に向けられた言葉でもあると感じる。

新しい時代のN I Eへ

宮城県N I E推進委員会

小学校部会長 中 辻 正 樹

(仙台市立高砂小学校長)

新しい時代となりました。令和2年度より小学校における新しい学習指導要領の完全実施を迎え、忙しい日々が続いていると思います。

ここでは、私のNIE活動の始まりの頃のことと、これからのNIEについてのひとことを述べさせていただきたいと思います。

さて、自分がNIEに、意識して初めて取り組んだのは、まだ平成の始めの頃でした。上杉山通小学校に勤務していた時のことです。現在（令和元年度）七北田小学校にいらっしゃる今藤正彦先生とともに、NIEパイロット校としての実践校を引き受けたのが最初です。

当時、NIEの意味の深さをとらえきれずに今藤先生と議論を重ねたり、先進校（旭丘小学校）に教えを請うたりしていました。「新聞づくりはNIEなのか？」ということ、一生懸命に考えていた当時が懐かしいです。

様々な議論の成果もありましたが、課題も抱えていました。学校全体で、子供を新聞に親しませるために、どのような手立てをとろうかという視点と、NIEで授業をどう深めるかという視点で試行錯誤をしたことを覚えています。

平成8年1月、上杉山通小学校でNIE授業公開をしました。今藤先生は生活科、私は家庭科の授業を公開しました。

私の授業では、「生活環境を見つめ直す」という視点で、新聞記事を活用しました。まだ家庭での一般紙の購読率も高かった時代でした。子供たちは、様々な新聞記事を根拠や参考にしなが、生活環境に関わるそれぞれの考えを発表することができたことを覚えています。

まだまだNIEの本質（？）が分からないまま授業提案をし、参会者から貴重なご意見を

いただき、成果と課題につなげられたことが、とても良い経験でした。

今、私たちが子供たちと学びを組み立てる現実、新聞にとって厳しいものです。家庭での購読率の減少、子供が新聞そのものに親しんでいない、教師が忙しい・・・など越えなければならないハードルは高いです。

これからのNIEを実践していくにあたって、このような時代に私たちは新聞をどのように活用していけばよいのでしょうか？

情報発信が多様化した現代、新聞が情報発信源である重みは減りつつあります。しかし、新聞には大きな力があります。一つ目は「確かな記事」です。しっかりと取材を背景に、事実に基づく記事が掲載されます。二つ目は「新しい目をひらく記事」です。WebやTVを経由してくる情報は、受け手の興味・関心の方向性によって、その種類には偏りがでる場合があります。しかし新聞では、情報は受け手の必要感にかかわらず、様々なジャンルの情報が常に提供されます。それは受け手を新しい世界に導く大きなきっかけとなります。

このような特徴を持った新聞の存在を生かすには、できるだけ子供たちを新聞に触れさせることが必要です。特定の教科・領域や単元にとどまらず、様々な場面での教師の働き掛けや、活用が大切になってくると思います。

今、NIEに必要なのは、「子供たちに幅広く新聞に親しませること」と「情報源としての新聞を深く活用すること」だと思います。そう考えると、昔も今も同じ課題が浮かんでいるような気がします。

まず教師が興味を持って、子供たちと共に新聞を使ってみることが大切だと、改めて感じる今日この頃です。

Ⅲ 宮城県NIE研究大会の報告

1 日程と内容

令和元年度 宮城県 NIE 研究大会

令和元年 12 月 20 日（金） 13：30～16：50

河北新報社 1階ホール

1 開会行事 13：30～13：40

・開会の挨拶 宮城県 NIE 委員会会長 名取市立増田中学校 鈴木 一史校長

2 実践発表 13：40～14：50

① 「新聞に親しむ児童の育成を目指して」
仙台市立館小学校 山内 崇寛教諭

② 「未来の創造 ～NIE で育む強い心と高い志～」
大崎市立岩出山中学校 齋藤 美佳教諭

③ 「協働を促す教育活動例としての NIE 活動例・2 学年修学旅行と連携して」
宮城県宮城広瀬高等学校 穀田 長彦教諭

3 パネルディスカッション 14：50～15：30

<テーマ>

新聞を活用した主体的・対話的な深い学びの授業とは？
今、子供たちに身に付けさせたい力と NIE の役割とは？

コーディネーター 仙台城南高等学校長 中川西 剛先生
パネラー 宮城県教育庁高校教育課 主幹（指導主事） 櫻井 知大先生
発表者 山内 崇寛先生・齋藤 美佳先生・穀田 長彦先生

4 講演 15：40～16：40

「子どもたちの健やかな脳発達のために」

東北大学加齢医学研究所教授 瀧 靖之先生

5 閉会行事 16：40～16：50

御礼のことば・閉会の挨拶
宮城県 NIE 推進委員会副委員長 仙台市立七郷中学校 工藤 哲校長

2 実践発表報告

実践発表(1)

平成30・令和元年度実践指定校

新聞に親しむ児童の育成を目指して

仙台市立館小学校 教諭 山内 崇寛

1 はじめに

本校は、昨年度からN I E実践指定校となり、今年度2年目を迎えた。新聞が子供たちにとって親しみのあるものであり、情報収集の手段として学習や生活に活用できることを目指して取組を進めてきた。

今年度は昨年度の取組を踏まえて、継続するもの、新たに取組むものを検討し、実践に当たった。

2 実践の概要

(1) 同じ新聞を使っでの指導の試み

昨年度は、新聞の構成を理解する授業を全学年で行った。低・中学年の担当教員から、学年に応じた指導を考えるべきとの反省が多く挙がったため、今年度は、学年に応じて指導を考えるという方針が定まった。

新聞のための学習を行うのではなく、普段の学習の中に新聞をどのように取り入れるか考えるために、小学校部会の新聞提供事業を活用し、全校で共通の新聞を講読し、学年ごとに新聞を活用した学習を考え、実践を試みた。

①実践の実際

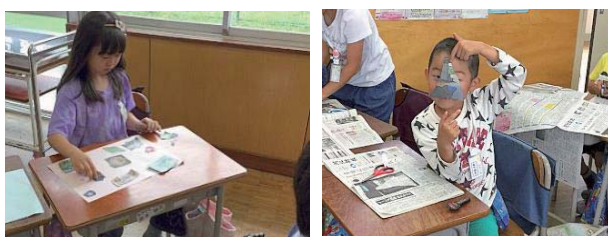
【1年】 図工

新聞の紙としての特性に着目し、図工の教具として活用した。新聞紙を広げたり、つないだりして一枚の大きな紙を作らせた。乗ったり潜ったりして遊んだ。



【2年】 図工

自分が面白いと思った写真や絵、文字などを自由に切り取らせた。好みの色の画用紙を選ばせ、貼り付けて作品作りを行った。初めはどう作品に仕上げればよいか悩んでいた児童も、制作する中で面白さを見付け、作品に仕上げることができた。



【3年】 国語「漢字の組み立てと意味を考えよう」

本単元では部首の考え方について初めて学習する。部首について学んだ後に、実際に新聞からその部首でできた漢字を見付ける学習を行った。見付けた漢字には赤鉛筆で印をつけさせた。新聞を使ったことで、同じ部首であっても多くの漢字があることを学ぶことができた。また、未習の漢字にも触れることができ、言葉の世界の深さを知ることができた。



【4年】 総合 「災害を知ろう」

防災の学習を新聞にまとめさせる際に、新聞を作成した。新聞の構成を知るために、実際の新聞を開きながら確認させた。また作成する新聞の資料としても活用した。



【5年】 国語 「新聞記事を読み比べよう」

同じテーマで書かれている二つの記事を読み比べ、論調の違いを読み比べさせた。河北新報と読売新聞の二紙を用意し、ペア学習を行った。

今回の読み比べによる学習は、本単元の新聞提供事業を活用させていただいたものである。



【6年】 国語

新聞全体に目を通し、ページごとにカテゴリーに分けて新聞が書かれていることを理解させた。興味を持った記事を選び、その記事を要約し、感想をまとめ、その内容について紹介し合った。



②実践を終えての反省

	○	△
1年	広げると大きくなる 扱いやすい	
2年	めくる楽しさ 様々な記事、写真、マンガ	机の上で扱うには大きい
3年	未学習の漢字にふれることができる	情報量が多い 部首を判別するのが難しい漢字
4年	教科書では分かりづらい 割り付け	記事を読むこと
5年	写真による情報	文章のレベル高い 読み取りの難しさ
6年	ページによるカテゴリー分け 児童による興味関心の違いの気付き	読み取りの難しさ

実践の終了後、各学年で振り返りを行った。新聞の特性と、その教材の可能性や難しさについて、下記のような共通理解を図ることができた。

- ・新聞紙の大きさや薄さは低学年の図工の教材として良い反面、場合によっては大きすぎて扱いくらいの場合がある。
- ・多くのページで構成されており、めくる楽しさがあり、漢字、言葉、図やイラストマンガなど様々な情報を得られる良さがある。逆に一つの目的のものを探す活動を行うときは、情報量が多いために、探しにくい場合がある。
- ・新聞は本来読み物であるが、読解させるという活動に関しては、どの学年においても全ての児童に十分な学習ができたとは言い難い。

(2) 新聞に親しむための環境づくり

①年間購読と環境整備

7月から10月、11月から2月、新聞と子ども新聞を織り交ぜながら、毎日3紙の新聞を購読した。

	新聞	子ども新聞	
7～10月	河北	朝日小学生	日経MJ
11～2月	産経	読売KODOMO	毎日小学生

児童が年間購読紙を自由に読めるように、校舎内3か所に分けて新聞コーナーを設置した。昨年度までは、教員が新聞を設置していたが、新聞が児童にとってより身近になるように、委員会の組織を活用して、毎朝、児童に気になったページを開いて新聞台に設置させた。



また、掲示した新聞の近くには、新聞の構成を理解するための掲示物を用意し、どのように新聞が書かれているか、児童に分かるようにした。

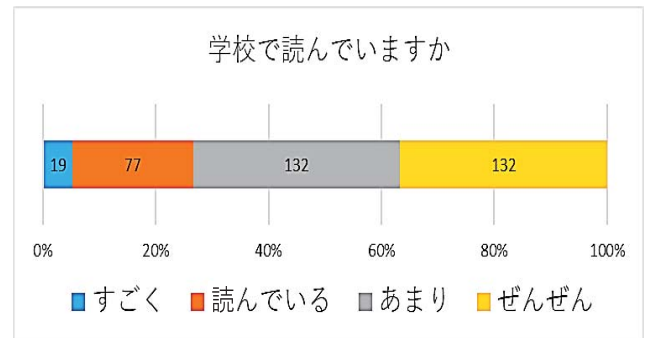
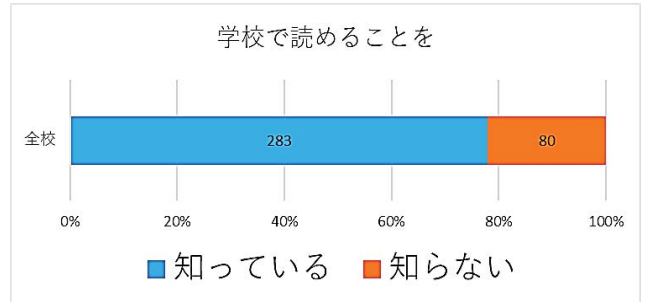
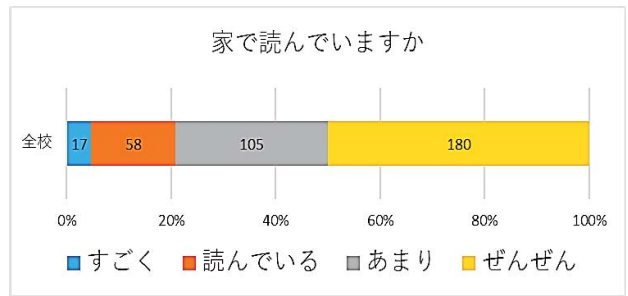
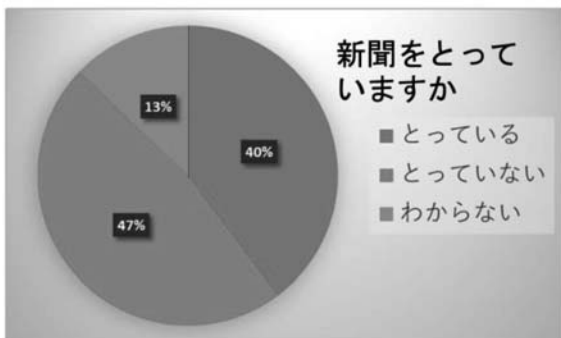


②環境整備とその考察～児童の意識調査から～

昨年度から継続して行ってきた環境整備が児童にとってどれほどの効果があったか把握するために、以下の4点について児童の意識調査を行った。

・家で新聞を購読しているか
・家で新聞を読んでいるか
・学校で新聞を読めることを知っているか
・学校で新聞を読んでいるか

調査により以下のような結果が得られた。



考察① 調査からの読み取り

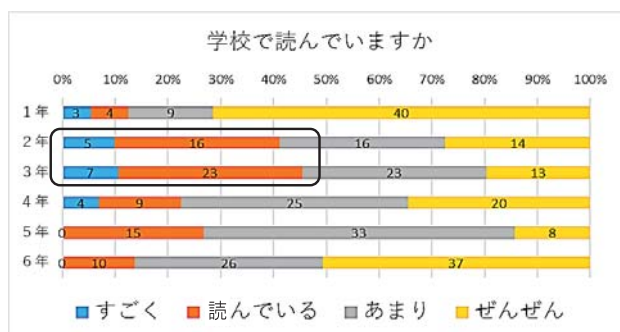
結果	半分以上の児童の家庭で新聞を購読していない。
考察	毎年新聞を購読しない家庭は増加傾向にある。

結果	家で新聞読んでいる児童は約23パーセント、学校で新聞を読んでいる児童は約26パーセントであった。
考察	環境を整えれば、必ずしも児童が読むというわけではない。新聞の内容が児童にとって難しいものであることが主な原因として考えられる。教師の働き掛けが大事である。

結果	8割以上の児童が学校で新聞を読めることを知っている。また、家庭で全く新聞を読まない児童の割合は、学校でのそれと比較して15パーセント以上減っている。
考察	児童が積極的に新聞を読んでいるとは言いがたいが、新聞に親しみを感じている。

考察② 調査では分からなかった児童の「読む」の感覚

考察を行った際に、2～3年生の読んでいる児童が多いことがわかり、学年によって児童の「新聞を読む」という行為やそのとらえに違いがあるのではないかという指摘があった。



そこで各学年で新聞を読んでいると回答した児童に追加で調査を行った。

低学年では、新聞を読んでいると回答していても内容をよく理解していないことが分かった。また、中学年でも、マンガやテレビ欄を見ていることが分かった。高学年になって社会の動きを知るためや、興味関心のために、気になる記事を読んでいるということが分かった。

(3) 河北新報社による出前授業

6学年の総合的な学習の時間では、修学旅行で学んだことを新聞形式でまとめさせた。5年生に伝えることをめあてに、河北新報社の方をゲストティーチャーとして招き、より相手に伝わる新聞の書き方について教わった。



全体講義の後、各教室に戻り、講師の先生方に助言をいただきながら新聞づくりを行った。見出しや割付、5W1Hを意識した文章など、教わったことを生かして新聞を完成させることができた。



(4) 各学年・専科の授業での取組

各学年や専科の教員が、個人で新聞を活用した。(6年)

・社会「縄文のむらから古墳のくにへ」

縄文時代の学習でその暮らしや縄文人の特徴を学んだ。縄文人のゲノムが解読されたという記事を合わせて紹介した。

・社会「長く続いた戦争と人々の暮らし」

ローマ教皇が日本に訪れ、広島・長崎で演説を行った記事を紹介し、大東亜戦争が現在までつながる出来事であったことを学習した。

・国語「物語を作ろう」

筋書きを構成メモに書き、それをもとに物語を作った。教科書の方法とは全く別の方法で物語を作っている、村上春樹のインタビューの記事を紹介した。



〈理科専科〉

・5年「天気の変化」

年間購読している新聞を取りため、資料として台風の天気図を示した。

・5年「流れる水のはたらき」

身近な場所でのどのような水害が起きているのか調べるために、取りためた新聞を調べ学習の資料として活用した。



3 おわりに

同じ新聞を全校児童で使う試みを行ったことで、より広い視点で新聞活用の可能性を探ることができた。

児童が新聞に親しめる環境づくりを継続してきたことで、積極的に新聞を読む児童に育ったとまでは言い難いが、新聞に親しみを持つ児童が増えた。

今後は、2年間の実践を通して得られた成果や反省を整理し、来年度以降の実践に生かしていきたい。

未来の創造 ～NIEで育む強い心と高い志～

大崎市立岩出山中学校 教諭 齋藤 美佳

I はじめに

今年度、岩出山中学校区（岩出山小学校・岩出中学校・岩出山高校）は、宮城県教育委員会から志教育推進地区に指定され、志教育の実践と推進に努めた。志教育とは、人や社会とかかわる中で社会性や勤労観を養い、集団や社会の中で果たすべき自己の役割を考えさせながら、将来の社会人としてよりよい生き方を主体的に求めさせていく教育であり、3つの視点「人とかかわる・よりよい生き方を**もとめる**・社会での役割を**はたす**」を掲げている。

本校では、生徒一人ひとりが社会的・職業的自立に向けて、自分の生き方を考え、強い心と高い志をもって、自分の未来を創造するための能力と態度の育成が重要であると考えた。そこで、小・中・高及び地域との連携や交流を柱とした豊かな学びの構築を目標に掲げ、その手立ての一つとして、NIE教育を実践した。

【研究テーマ】

未来の創造～NIEで育む強い心と高い志～

【生徒に身に付けさせたいもの】

●強い心

夢や目標に向かって、自己の役割と責任をはたしながら学び続けるための力

●高い志

地域社会の中で、自己理解を深めながら生活して抱いた将来の夢や目標

手立てのひとつにNIE教育を掲げる理由は、3点ある。1点目は、社会の縮図とも言われる新聞を活用することで、今、世の中で起きていることをタイムリーに知ることができるからである。新聞記事には、興味のわく見出しや写真なども掲載されているので、生徒も記事に迫りやすい。2点目は、知識や経験のある人々の体験や意見に触れながら、自分の生き方を見つめ直す機会になるからである。3点目は、学習指導要領で求められている思考力・判断力・表現力の育成につながるからである。

以上の理由に基づき、各教科、道徳、学活、総合のそれぞれの学びのねらいに迫った新聞記事を効果的に

活用し、生徒が他者とかかわり合いながら学ぶことができれば、小・中・高及び地域との連携や交流を柱とした豊かな学びの構築ができると考えた。

II 主な実践の概要

1 志教育講演会「伝えよう新聞バック」

視点1 人と『かかわる』

東日本大震災で避難してきた方々に手仕事のひとつとして提案した「新聞バック」について、海の手山の手ネットワークの曾木玲子さん（岩出山在住）に講話をいただいた。当時、大崎地区に避難してきた被災者にとって、新聞バック作りが生きる力になったこと、人と人とのつながりの大切さを感じたことなどを聞き、生徒は、よりよい人間関係の構築や支え合う集団づくりについて学んだ。



視点2 よりよい生き方を『もとめる』

河北新報や英字新聞を使って、2・3学年を中心に新聞バックの制作を体験した。また、新聞バックからヒントを得て、文化祭のテーマである「龍」を全校生徒で新聞を使って制作した。龍のうろこを新聞バックで作り、そのバックに夢や希望を入れて、龍のように高く強く舞い上がりたいという願いをもって、全校で取り組んだ。中国では、龍は、最大級の幸せを運ぶ縁起の良い動物と言われている。文化祭では、全長約10mの龍を披露し、来場者を驚かせた。河北新報の11月6日の朝刊にも掲載された。



視点3 社会での役割を『はたす』

台風19号の影響で大崎市鹿島台で河川が氾濫した。生徒会では、同じ地域に住む者としてはたせる役割はないかと考えた結果、志教育実践発表会の会場で、小・中・高で連携し、募金活動を実施した。

募金を呼びかけるポスターは、新聞から切り取った言葉や写真を活用し、ことばの貯金箱形式で作成した。募金していただいた方には、感謝の気持ちを込めて、「新聞バック」をプレゼントした。



た子ども服の提供を呼びかけるポスターやチラシを作成し、文化祭や三者面談中に子ども服を回収した。

視点3 社会での役割を『はたす』

回収した服を整理し、中新田中学校に届けた。ユニクロスタッフに同行し、実際に難民に服を届けたジャーナリスト安田菜津紀さんからもメッセージをいただき、難民問題において自分たちにもはたせる役割があることを知った。



【回収した子ども服】

○長袖	361
○半袖	304
○ズボン	208
○スカート	60
○ワンピース	70

○ベビー服 177

○防寒着 47

【安田菜津紀さんからのメッセージ】

難民となってしまったおばあちゃんが、「私たちのことを忘れないでね。」と涙を流しながら子ども服を受け取ってくださったのを覚えています。「服の力」の先には、たくさんの人の笑顔が待っています。

2 NIE タイム「服のカプロジェクト」

視点1 人と『かかわる』

朝の学習活動「NIE タイム」の時間、中新田中学校2学年がユニクロと協力し、難民に子ども服を送るプロジェクト「服の力」を実施しているという新聞記事を読み、感想を書いて発表した。



視点2 よりよい生き方を『もとめる』

生徒会執行部やNIE担当である図書委員会を中心にアンケートを実施して話し合った結果、中新田中学校2学年が取り組んでいる「服の力」に協力することが決定した。ことばの貯金箱形式で、家庭で不要になっ

III その他の実践例

(1)ことばの貯金箱&ことばのギフトカード

4月、1学年では、道徳の教科書(東書)に掲載されている「さらなる高みを目指して～全てがリオでかみ合った」の事後学習として、「ことばの貯金箱」を実施した。ことばの貯金箱とは、新聞から気に入った言葉や写真を切り抜き、それを台紙(はがきサイズ)に貼って自分の想いを書き添えていく活動である。生徒の作品には、「進化さらなる前進」「まずは始めることが大事」「光る粘り強さ」「笑顔の花」「生きる感謝伝えたい」など、新学期に向けての楽しみや意欲が感じられる言葉が多かった。生徒は、この活動を通し

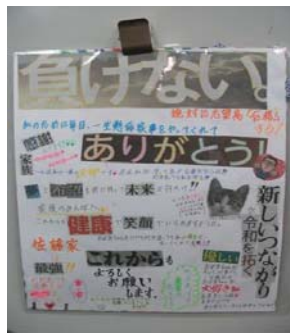


て、自分の心と向き合いながら目標を明確にまとめることができた。3学年では、実践の積み重ねの成果もあり、A4サイズの台紙で行った。

また、11月に開催された「国際交流会」では、1学年の生徒が作成した「ことばのギフトカード」を中国出身の留学生にプレゼントした。ギフトカードの表には、学校紹介の英文を書いた。裏には、新聞から切り取った写真と言葉を貼り、日本の文化や歴史、自然、すてきな言葉を伝える内容で作成した。



3学年では、卒業式に両親に渡す感謝の贈り物を「ことばの貯金箱」で現在作成中である。普段、恥ずかしくて伝えられない感謝の思いや今後の決意などを新聞の言葉を使いながら表現している。



(2)はがき新聞(小・中・高連携・地域との交流)

はがき新聞とは、見出しをつけながら伝えたいことを短い文章でまとめるはがきサイズの新聞である。この取組は、焦点をしぼって書く力が求められるので要約する力が身に付く。見出しを工夫したり、はがき全体に色を塗ったりすると、読み手の興味関心を高める。中学校の様子を伝えるはがき新聞を小学校に送ったり、高校では中学校の取組を参考にして、国語の授業ではがき新聞に挑戦した



りしている。職場体験のお礼状としてはがき新聞を送ることで地域との交流を図ったり、道徳の授業のまとめではがき新聞を作成したりすることもできる。

【今年度作成したはがき新聞のテーマ】

- 恩師への近況報告(小中交流)
- 夏休み・冬休みの思い出
- 小学校6年生へ(小中交流)
- 卒業文集個人のページ

【過去に取り組んだテーマ】

- 青森県三本木農業高校との交流「いのちの花プロジェクト」
- 職場体験～はがき新聞でお礼～
- 立志式～決意と感謝～



(3)出前授業を生かした職業調べ&職業講話

1学年では、河北新報社に依頼し、出前授業を3回行い、今後の授業に生かすスキルを身に付けた。

【第1回 新聞から喜怒哀楽を見つけよう】

新聞学習のオリエンテーションを5月に実施した。新聞の魅力や朝刊一面に掲載されている記事の呼び方(アタマ・カタ・ヘソ)を学んだ後、気になった新聞記事をスクラップして、喜怒哀楽のどれにあたるかについて発表したり、記事の感想を書いたりした。



【第2回 見出しを見つけよう&職業調べ】

○見出しは、取材した記者ではなく、整理部の記者がつける。良い見出しは、8～12文字。

○見出しは、読むものではなく、見るもの。

○見出しを見れば、記事の内容は分かる。

生徒は、見出しについての知識を学んだあと、ラグビーワールドカップや天皇陛下即位に関する新聞記事の見出しをつけるワークショップに挑戦した。

次に行った職業調べでは、朝日中高生新聞に掲載されている「仕事紹介」の記事を活用した。マーカー読みをして、印象に残った内容を3つ選んだ。出前授業で身につけたスキルを生かし、オリジナルの見出しをつけながら、職業調べを行った。



【第3回 取材の仕方を学ぼう&職業講話】

- 取材の基本は、自分が話を聞いたり調べたりして情報を得ること。本やインターネットで調べたことを丸写しするのではない。読んだ人が「おもしろい!」と思う「特ダネ」を書こう。
- 相手の目を見て、はっきり質問して相づちをうつ! 意味が分からなかったり聞こえなかったら遠慮せず質問しよう。
- メモの取り方は、5W1Hが基本。大事なところだけメモしよう。話の内容だけでなく、相手の表情や様子も入れよう。
- 学んだスキルを生かし、見出しを工夫しよう!



生徒は、取材のスキルやメモの取り方を学んだあと、河北新報社からいただいた取材手帳を手に持ち、6人の職業人を取材した。取材した内容を見出しをつけながら分かりやすくまとめ、新聞を作成した。

【(4)朝の学習活動時間「NIEタイム」】

毎週火・水の朝の学習時間10分をNIEタイムと位置づけて、読解力と表現力の向上を目指した学習活動を全校体制で行っている。(平成30年度4月から)火曜日は、全校で同じ新聞記事を読んで160字程度の感想や考えを書く。水曜日は、学級ごとに一人ひとり発表し、互いに意見を共有している。この活動を通して、本校出身のプロ野球選手今野龍太選手(元楽天)に応援メッセージを送ったり、難民に子ども服を送る活動に参加するなど、生徒会活動と連携しながら活動の幅を地域に広げることができた。また、NIEタイムの学習の成果を生かし、全校体制で日本新聞協会主催の「いっしょに読もう!新聞コンクール」に応募した。

【NIEタイムで活用した主な新聞記事の見出し】

- 全盲セーラー太平洋横断
- 楽天・今野 待望の初勝利
- 折り鶴つなぐ 核廃絶の祈り
- 学生がタピオカ店起業
- ふるさと納税で「指揮」
- コンビニおでん冬の時代
- プラごみ3000ト、日本にも強制送還
- 腎臓移植45年 生きる希望 筆に込めて



(5)新聞に関するコンクールへの応募

本校では、NIEの学びの成果を生かし、毎年、日本新聞協会主催の「いっしょに読もう!新聞コンクール」や河北新報社主催の「新聞記事コンクール」、「スクラップ作品コンクール」に応募している。昨年度は、曾祖父が残したインパール作戦の手記について調べ、悲惨な戦争を語り継ぐ責任があると訴えた今野真佳が河北新報社賞を受賞した。今年度は、以下のような成績を収めた。

○いっしょに読もう!新聞コンクール 奨励賞

○スクラップ作品コンクール

【中学生スクラップ部門】

佳作 若竹1・2組

【ことばの貯金箱部門】

佳作 氏家萌音

優秀賞 岩中職員クラブ

優秀団体賞 大崎市立岩出山中学校



IV 成果と課題

Ⅱ・Ⅲで紹介した実践で、生徒は、新聞に親しむだけでなく、新聞記事を読んで知ったこと、感じたこと、学んだことなどを学校生活、小・中・高の連携事業や地域との交流に生かして、豊かな学びを構築し、よりよい生き方をもとめた。そして、募金活動や子ども服の提供など、社会ではたせる役割を見つけて取り組み、他者とのかかわりを大切にした協働による学びを進めることができた。生徒は、「かかわる・もとめる・はたす」という志教育の視点で、NIEにおける主体的で対話的な深い学びを実現することができたと考えている。

NIEで身に付く力はたくさんあり、学力向上も期待できるが、NIEの成果と課題のすべてが数値で図れる学力につながっているとは、捉えていない。5年後、10年後、20年後、生徒が強い心と高い志を持ち、ふるさと岩出山を大切に想いながら生きる姿、自らの役割と責任をはたし、社会に貢献しながら生き続ける姿こそ、NIEと志教育の成果だと考える。本校では、今後もNIEと志教育の推進によって生徒の学びを深め、強い心と高い志をもって、未来を創造する力を生徒に身に付けさせていきたい。

「協働を促す教育活動としてのN I E活動例」 ～2学年修学旅行と連携して～

宮城県宮城広瀬高等学校 教諭 穀田 長彦

1 はじめに

本校は普通科7クラスの全校生徒812名の男女共学全日制普通高校である。団塊ジュニア世代の急増に伴い昭和58年に仙台学区内に開校し、当時の所在地は宮城郡宮城町であり、その後仙台市青葉区となり、いずれは仙台市広瀬区となるといわれていた地区に立地している。宮城広瀬という校名からもわかるように本校は社会や時代の大きな影響を受けながら歩んでいる。この背景から、平成28年度は「魅力ある県立高等学校づくり支援事業」の一環として、平成29年度より「シチズンシップ教育推進事業」の研究協力校としての各種取り組みを行い、これらの事業の一環として平成30年度よりN I E教育推進校としても活動を行い、今年度で2年目を迎えた。

2 本校と新聞の関係および現状

N I Eの実践報告の前に、本校における新聞環境について報告する。

① 本校や周辺地域の新聞報道について

前述のように本校は旧宮城町の人口急増地域にあり、広瀬区構想の中心地として新聞に取り上げられることも多い（河北新報 令和元年11月6日持論・時論）。また周辺には県立こども病院があり交通の便がよいため、医療機関との連携を必要とする生徒も多く、そのような生徒の様子が記事となることもある。（河北新報平成29年11月17日・社会面）これらのことから学校（生徒）と新聞は非常に近い距離にある。しかし、現状は「生徒と新聞が近い」とは到底言いがたいものであった。

② 本校生の新聞環境について

本校2学年生徒へ夏休み明けに行った生徒と新聞との関係についての質問紙調査の結果が以下である。
～質問紙調査 対象2学年男子94名・女子132名 計226名回答～

質問1 あなたはどれくらい新聞を読みますか

頻度/性別	男子 (94)	女子 (132)
毎日	4. 1%	1. 0%
週に3～5	2. 7%	1. 0%
週に1度	6. 8%	1. 0%
ほとんど読まない	86. 4%	97%

質問2 新聞を定期購読していますか

状況/性別	男子	女子
している	37%	42%
していない	60%	56%
気になるときに購入	3%	2%

質問3 社会の状況は何で知りますか

状況/性別	男子	女子
テレビやラジオ	27%	32%
インターネット	44%	25%
本や雑誌	1%	0%
SNS	26%	43%
新聞	1%	0%

アンケート実施後、新聞を毎日読む生徒の割合が少なすぎるのではと教員間で話題になったが、今年度の宮城県のN I E実践発表会の資料内のデータをみるとこれが現状のようである。小・中学校の学年が上がる毎に割合が減っていき男子の4%という数値は平均値に近い。また家庭における定期購読率は定期購読家庭がほぼ4割という数値であることも明らかとなった。このように本校のみならず高校生にとって新聞は情報コンテンツとしてなじみがないものになっていることがわかった。

3 本校の実践

1年目

新聞を身近に感じてもらうことを最初の目的として、新聞を読むリテラシーを養うためにまず、各学年で新聞の読み方講座（写真1）を行った。



写真1 新聞の読み方を聞く（新聞の読み方講座）

そんな中でも1年目のNIE活動の中心は2学年の総合学習で行った。代表的なものは「新聞を使った新聞づくり」(個人活動)と「ポスターセッション」(班活動・写真2)である。個人活動である「新聞を使った新聞づくり」が前半のメインで新聞は家庭に協力を依頼し、新聞を定期購読していない生徒用に学校で新聞を用意した。グループ活動である「ポスターセッション」はNIE実践指定校向け新聞提供事業の新聞を利用して行った。またスクラップ活動で使用するハサミやのり、ポスターセッション用の模造紙、クラス閲覧用の新聞ラックなどはNIE委員会からの活動費で賄った。

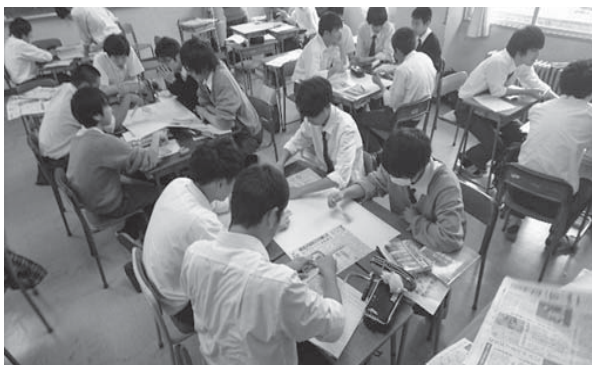


写真2 グループで新聞スクラップを作成する(総合学習)

また授業では1学年の「倫理」で新聞を導入した学習を行った。倫理の学習のまとめには、これまで学んだことを踏まえて社会的事象を考察するという単元がある。そこでの学習で、興味を持った新聞記事を個々にスクラップ(写真3)し、4人程度のグループで話し合いをし、発表しあう授業を展開した。

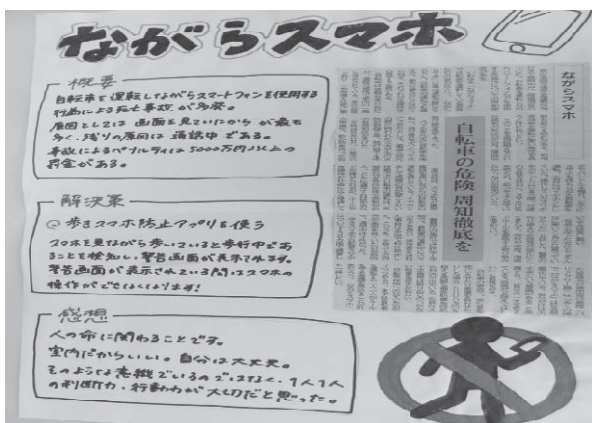


写真3 個人で作成した新聞スクラップ(1年倫理)

～2年目の取り組み～

2年目は、さらに発展させるべく、全校対象には全国紙5紙と河北新報が配布されているという利点を最大限に生かすため記事に踏み込んだ全校掲示を行った。なお、その前に新聞の読み方講座を各学年で行っている。下記はそのうち反応が大きかったものである。

- ① 「京アニ実名報道の社説より」10月14日読売・毎日
- ② 「1面のあたま記事比較」10月16日朝日・産経
【中東への自衛隊派遣に向けた検討開始】
- ③ 「全紙1面共通記事の比較」10月23日全紙
- ④ 【即位礼正殿の儀】
- ⑤ 「最も記事の扱いにばらつきがみられた事例から」
11月6日全紙【れいわ新選組木村議員の初登院】
- ⑥ 「新聞とテレビの報道内容の違いについて」
11月14日全紙【桜を見る会関連】

～2学年での企画1～

新聞スクラップ活動「関西だより」作成とスクラップ記事からの簡単な小論文作成

同時並行でメインの活動となる2学年ではNIEをより体験的かつ継続的に実践するために学年独自に行う学校行事と連携させ、相互作用的に効果が上がることを目的に修学旅行とNIEを連携させることにした。まず修学旅行委員に10月から各クラスで配布される新聞の記事から1か月間関西関連の記事をスクラップし、その都度クラス掲示(写真4)した。特に各クラスで集中した記事が以下である。

日	見出し	新聞
1	京都府亀岡市レジ袋提供禁止	河北
※	関西電力金品受領問題(連日)	全紙
4	迅速な実名報道 警察に申し入れ(京アニ)	全紙
12	泉佐野市 ふるさと納税除外不服	朝日
29	吉本芸人ツイートで広告か	全紙



写真4 クラスに掲示された関西だより

自分たちがこれから行こうとする地方について興味を持つという視点で始めた企画であるが、その点で効果があったと思われたのが泉佐野市の記事を取り上げたクラスが多かった点である。関西国際空港のある泉佐野市は本校の修学旅行の宿泊先であり、興味を持って記事を検索した結果が窺えた。

この1か月の取り組みから興味を持った記事より2つ、事前学習もかねて文章を書かせることを当初から構想していた。その結果として全紙が取り上げた「一

連の関電問題」と「京都アニメーション火災被害者の実名報道」について記述させることにした。どちらも構図としては東日本大震災を経験した東北の人間には考えるべきテーマである。しかし、生徒の反応やスクラップを見ても関電問題はまとめるのに難易度が高いように感じていた。そこで10月下旬に集中して報道された「京都市による施策PRがステルスマーケティングにあたるか」ということをテーマにして文章と「京都アニメーション火災被害者の実名報道について」の2つについて記事から考えることを記述することに変更した。本校では朝学習の時間があり、登校後10分間自主学習を行う時間を設けている。この時間を利用して生徒がスクラップした記事の中から全紙が取り上げた2テーマについて1週間の時間の中で、当該記事と簡単な解説を交えたプリントを配布し800字程度で論じる時間を設けた。

▼テーマ1 10月14日読売・毎日の社説を読み、事件被害者の実名報道に対する新聞社の主張について思うことを述べなさい。

▼テーマ2 10月29日朝日記事「吉本芸人 ツイート2回で100万円」の記事（写真5）から京都市のPR手法はステルスマーケティングか述べなさい。



写真5 実際の記事より

テーマ1の記事は読売が「社会を知る手がかり」毎日「他者への共感」を訴え、実名報道への理解を求めていた。この社説に対して生徒の反応は新聞社への姿勢に理解を示すものが7割であり、その根拠の多くがネットではなく新聞社だからこそというものだった。3割の批判は被害者感情優先であり、中に新聞社の社説には実名報道の社会的長所しか述べていない記述への不信感を述べたものもあった。

対照的だったのがテーマ2である。こちらはほとんどが、この手法はステルスマーケティングにはあたらないし、これでだまされたと思うならそれはだまされたと主張する方がおかしいというものであった。これは意外な反応であったが、「ハッシュタグがついていたならもう広告ではない」という見解はこの世

代の共通の認識という新たな発見があった。

もう一つ大きな効果はこの時期に生徒の文章表現力や理解力を測れた点にあった。ケース1は論点をはっきりさせるために「新聞社の主張」に「理解できる～理解できない」まで4段階で選択させて、その後論述させたが選択と論述がまるで逆という生徒が多く見られた。よく言われる問題文が理解できない生徒の増加についてこの場面で実感した。また文章力についてもSNSの影響か、かなりの割合で単文による話し言葉の多用が見られた。とくに文章をつなげる際に使用されている「なので」の乱発には危機感を覚えるほどであった。

後日談になるが、令和元年12月20日に行われた宮城県NIE実践発表会でも、同年12月3日に公表された「国際学習到達度調査（PISA）」において日本の高校生の読解力が過去6回の調査と比較して最低の15位であったことと関連づけて新聞と読解力育成の可能性について話し合われたが、その事実を実際として感じる機会となった。

～2学年での企画2～

京都新聞の取り寄せとスクラップ活動「京都だより」の作成および簡単な小論文作成

11月より京都新聞社の協力を得て、修学旅行先の今を知るために毎日京都新聞をクラスに配布した。10月の活動と同様に修学旅行委員が気になる新聞記事をスクラップしクラスに掲示した。同様に全校生徒用に「こんにちは京都新聞です」というコーナーを設け、全校生徒にも特徴的な記事をピックアップして読めるように掲示した。2学年でクラス掲示されていた記事を簡単にピックアップすると以下ようになる。

日	見出し	掲載面
4	北野天満宮「曲水の宴」開催	市民版
9	京都市のゲストハウス廃業急増	1面・社会面
17	祇園焼鳥店「においは」京の景観?	1面・社会面
28	両陛下 即位後初の上洛	1面

京都だよりは当初スポーツ面に集中していた。これは致し方ないことと考えていたが、生徒の最初の興味は京都新聞の「取りあげ方」にあったことが聞き取りからわかった。京都新聞は京都・滋賀に約45万人の定期購読者を持ち、読者数や地域の規模などは河北新報と宮城県の状況と非常によく似ている。しかし、河北新報はブロック紙の性格が強く、京都新聞は京都府と滋賀県の地方紙の性格が強い。ゆえに県内の高校スポーツは河北新報の場合に県内版に

掲載されているのが通常だが、京都新聞はスポーツ欄に大きく掲載される。実際に河北新報であれば県内版にあげられる高校駅伝の記事が、京都新聞では「立命館宇治高校女子 32 連覇」という見出しで同日行われた野球の国際競技であるプレミア 12 で日本代表が勝利した記事より同じ面で大きく扱われており、この報道の仕方に興味を持ったことが、生徒がスクラップした大きな理由であった。記事の内容より、記事の掲載の仕方に関心をもった点は生徒たちが無意識ではあるが、地域の新聞が持つ役割を学んだ一例にあたると思われる。

偶然にも新設置科目となる地理探求が学習目標とする「空間的な規則性」と「地域的特色」を相互作用として体験できる教材として「これから訪問する地方紙」である京都新聞が機能を果たした例とも考えられる。

また企画 1 で取りあげたテーマ 2 題ともに京都新聞は地元の記事として詳細に取りあげている。11月8日の社説で先ほど京都市のPRの手法について「ステルス広告 消費者を守る行政なのに」と題して非常に厳しく批判し、11月18日から24日まで社会面で「真相 京アニ事件 連載記者の葛藤」として報道のあり方をまとめている。特に最終回は関西大学准教授が示す課題を掲載し、「現代の報道 対話欠かせず」と見出しを打ち、地元の新聞として全国紙とは違った観点で取材のあり方を振り返っていた。旅行終了後はこれらの記事をまとめたものを教材として小論文を作成させた(写真6)

自分たちが旅行した場所が単なる観光地ではなく、人々が生活している場所で、同じような課題や問題を抱えている場所であるという事実を京都新聞から感じることができた。



写真6 実際に題材となった記事

～参考～

上記の企画が効果的だった新聞の提示法

本校で特に生徒が新聞を身近に感じたと思われる方法が教室の黒板脇に新聞ラックを配置するというものである。(写真7)



写真7 教室のこの位置に提示(左)

時系列で報道の状況がわかる(右・台風19号)

生徒だけでなく、教員も授業内で記事にふれる機会が多かったことが実証された。授業内にふとできる隙間の2～3分の時間に各教科の教員が近くにある新聞の記事を題材に話をすることが生徒の視野を広げる機会となっていた。意外だったのは理系科目のほうが新聞記事を活用するケースが多かった点である。例を挙げれば、理科ではノーベル化学賞や台風19号について、数学で古新聞で正方形から正三角形を作るところから、図形把握の学習をしたというのがあり、各教科に応じて教員はいろんな活用例を独自に持っていることに気づかされた点である。

～おわりに～

今回は修学旅行先の新聞を取り寄せるという方法からの取り組みを紹介した。今年度の宮城県の実践報告会では PISA 調査における読解力の低下に新聞の活用は有効ではないかという提言がされたが、その1つとして地方紙の取り寄せも効果的と思われる。読解力は文章だけでなく、その文章の背後にある社会的な環境や歴史についても視野を広げることを要求される。新聞を通して背景や視点の違いを感じ取るだけでも大きな効果があると考えている。またこれだけ SNS の普及した社会だからこそしっかりと文章を読む機会が必要である。その点新聞は、新書一冊分に近い18万文字の文字が日々家庭に届けられる。その文章は校閲と各新聞社の社会的責任に担保されており、ネットの文章とは重さが違う。また発信者は万人を想定し書いているので、読み手である高校生はわからない単語に出会うことも多い。ネットは自分の知りたい情報だけにアクセスする、ある種視野を閉ざしがちなツールであるが、新聞はその対極にある。この点を強調しながら、新聞から縁遠くなりつつある高校生に新聞と向き合わせる機会を広げていきたい。

II パネルディスカッション

コーディネーター	仙台城南高等学校 校長	中川西 剛先生
パネリスト	県教育委員会 高校教育課主幹	櫻井 知大先生
	仙台市立館小学校	山内 崇寛先生
	大崎市立岩出山中学校	齋藤 美佳先生
	宮城県宮城広瀬高等学校	穀田 長彦先生

新学習指導要領のキーワード「主体的・対話的で深い学び」を目指す新聞を活用した授業やこれからの子供たち、特に宮城の子供たちに身に付けさせたい力をテーマに、パネルディスカッションをしました。

子供たちの変容は？

中川西 3人の先生から発表がありました。熱の冷めないうちに質問があればお受けいたします。

各先生方から総括してNIEの効果とか子供たちの変容はどうなのかもう一度整理をしてお話ください。



(コーディネーター 中川西氏)

山内 どの担任も子供に新聞を読ませたいと思っていたが、なかなか読むところまでは至らなかった。この2年間で、親しみを覚えさせることまではできた、という成果があると思います。

齋藤 朝のNIEタイムですが、人前での発表が苦でなくなってきた生徒が多いです。読み取ろうとする力も高まり、堂々と発表

している実感があります。全国学力状況調査の質問紙では、3年間育てた現高1生は、今の中3生と比較すると数値で大きな違いが出ています。

「自分に良いところがある」など自分を肯定している項目が非常に高いです。新聞を読んでいるかどうかの差も10ポイントです。新聞の効果は、強い心・高い志を育て、自分の未来を力強く創り上げていこうとする力が身に付くと感じています。

穀田 新聞を使うことで視野が広がるという非常に当たり前のことです。高校では携帯電話を持って来ていい環境にあります。本校では約7割の生徒が仙山線で通学しており、車内では大半がスマホを使っている。スマホを見ているときは、ネットでもスマホでも自分の欲しい情報しか見えていない。それを違う方向から違うものを提示しただけでもこんな世界もある、情報の取り方についてもこんなのもあるということを知ることができたことが非常に大きかった。

中川西 櫻井先生から何かありますか。

櫻井 3名の先生の実践に裏付けられた言葉の重みを改めて感じました。

山内先生の全学年で新聞を活用するとい



う試みは、NIE の可能性を探るという大きな試みだったと思います。日本の文化の集積とでもいう身近な新聞です。教師が教育に新聞を必要だと判断すれば活用していくという話でした。岩出山中齋藤先生は、しっかりとした学習の目標、子供たちにどんな力を身に付けさせたいか、なぜ NIE なのかというところをベースにしたという話でした。穀田先生は、修学旅行をテーマとされました。まさに子供たちに何を身に付けさせたいか、どういった力を付けて、どう生きてほしいかということがあるからこそ出てきたアイデアだと思われます。特別活動を要にして総合的な学習の時間、探究学習の新学習指導要領に求められる教科等・横断

的な学びに向けて、修学旅行を通じて「京都の新聞を読ませる」こういったアイデアが生まれました。非常に高い指導力、実践力を感じました。

齋藤先生の取組ですが、自身の長年にわたる取組が背景にあり PDCA を回しながら再構築しブラッシュアップして非常に説得力のある実践だと感じました。

3人の先生の校内における後継者の育成や協力体制の構築など他校にもシステムの形として広げていってほしいと思います。

学校が子供と新聞を会わせる場

中川西 館小の山内先生のお話でドキッとしたのが「環境があれば読むわけではない」ということです。揃えておけば児童・子供たちが読むわけではないというのは大きな話だと思いました。置くだけで「読んでね」というのは難しい、その通りだと思いました。もう一つ、先ほどの購読率を見ると確かに学校が新聞と子供たちを会わせる場になるのではないかとこれもその通りと思いました。それから齋藤先生の話で、地区の小・中・高で連携し、志教育と併せながら進めているというのが素晴らしい。



(県教委高校教育課 櫻井先生)

見る・聞く・味わうとか触るとか、五感といえいいですかね。今の子供たちは見たつもりとか、聞いたつもりとか分かったつもりとかいつもつもりが入っていると思います。1・2年生に新聞を貼ってその中に入れてみる、新聞バッグを手作業で作るという活動が実は五感を磨くとか鍛えるということになり、教育に浸透すればいいと思います。

それからドキッとしたのは、新聞は毎日届く百科事典、その通りだと思いました。

高校については、記事を探しながら比べるという活動、同じ社の新聞でも日々の見出しが継続的に扱われている記事や同じ日の新聞でも社によって見出しが違っていたりする。高校生の視点で指導されていると感じた次第です。

新学習指導要領が来年度小学校からスタートしますが、新聞の利活用や言語活動等が、国としてどのように示しているのかご指導いただきたいと思います。

新学習指導要領で求められる力

櫻井 新学習指導要領についてお話をさせていただきます。学校教育法30条で、学校教育が児童・生徒に育む資質・能力については知識・技能、思考力・判断力・表現力、主体的に学習に取り組む態度と規定されています。新学習指導要領ではこの三つの柱で学ぶ力がまとめ上げられ、生きる力の育成をより徹底していきます。

どんな時代を生きていく力かといいますと、よく言われるのがソサエティー5.0。今後高齢化とかさまざまな問題の中で、人間中心にスマートに社会を生き抜く力です。ただ5.0が自動的になりうるのではなく

て実現していくのも維持していくのも子供たちです。AIとかIoTとかロボットにどれだけ取って代わられるのか、職業が何割か無くなるのではないかとされている社会を生き抜くための力と考えていただきたい。そして日本の場合は、選挙権年齢の引き下げなどの時期にぶつかっています。こういった時代を生き抜くための資質・能力をしっかりと確実に身に付けさせることが必要であるという点が今回の学習指導要領改訂の押さえどころです。アクティブラーニングは、主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善であり、中川西先生が言われたように言語活動の充実ですとか、従前から言われていることがなお一層重視されます。そして探究活動、こういった指導が必要になるということです。

新聞活用等については、これまでも多様な学習での有効性は確認・指摘・実践されてきましたが、新学習指導要領に特に言語活動の充実や情報活用能力に絡めて多くの記載が入ってきました。教えるための教材の一つとしてですが、学習指導要領には新聞に関する記載が数多く有ります。各教科等で新聞の活用ができるとされています。

新聞を活用した学習や授業は新学習指導要領上の配慮事項であることを確認しながら学習を進めてほしいと思います。個人的には非常に有効な教材、指導資料であると思います。

中川西 新学習指導要領でも取り上げられ、方向性は全く間違っていない。それをどうするかというのが私たちの問題だと感じています。

先ほど、鈴木会長さんの挨拶にPISAの話がありました。12月3日頃の新聞で、読解

力の部分が前回 8 位から 15 位に落ち、各紙、いろいろ取り上げられました。新聞の中で日本の子供たちがどのように表現されているかの資料を 1 枚作りました。

(資料は 25P)

大学の先生や塾の方々等々が述べた新聞に載っていたものをまとめました。

「文章を正しく読み取れない」「言いたいことを正確に伝えられない」「主語と述語が不明確で意味が通じない」「要らない助詞を足す学生が本当に多い」は当然のことですね。

原因として、SNS の影響で「前後のつながりを考えない」「短文、話し言葉、スタンプ、絵文字を使えば感情が伝わる」「ぱっと書いてぱっと送る」「読み込めていなくても早く反応する」ことを重視している。このことが、いま日本の子供たちに起きているのではないかということです。

それから、今の子供たちは部活動や塾などで忙しすぎるのではないか。子供たちは、本当に時間がない、新聞などまとまった文章に触れる時間が減少している、新聞や雑誌のような内容を精査した長文を読む生徒が減りネット上のチャットなどの短文のやり取りが増えた。つまり文章を短く区切って話しているということでしょう。

読売新聞の 12 月 4 日付の中に、新聞を読む生徒と読まない生徒の読解力の平均得点がありました。どうやら今日本の子供たちは SNS に代表されるような短い文章をつなげていく、感情表現は絵文字で済むことが流行ってきているので、読解力が落ちているのではないかと思います。学校、教育を預かる者としては注意していかなければならないと思います。

宮城の子供に付けたい力

中川西 では、宮城の子供たちにどんな力を身に付けさせたいか、いわゆる読解力も含めて今の子供たちにどんな力をつけたらいいのかご意見をいただきます。

山内 私は 5・6 年で持ち上がって担任をしていますが、最近の話題は子供のスマホの普及率です。多くの子供が持っていて、いろんなトラブルがあり、情報に振り回されているところがあります。スマートフォンだけでなく新聞もですが、何が正しい情報なのかを自分で判断して見つけて整理していく力はすごく大事だと感じています。また、習い事をしている子供は私の地区も多くいて、小学生も忙しいと確かに感じています。



(館小学校 山内先生)

中川西 中学生はどうですか。

齋藤 身に付けさせたい力はたくさんありますが、自分の未来を、自分の力で創っていく力を身に付けさせたいと思います。古い話ですが、野球のイチロー選手が、松井さんがアメリカに行く際、「人の作った道は自分の道じゃない、自分で道を作って行けよ」とアドバイスしたそうです。いろいろな情報が入る中で、その情報を受け止めて自分

が判断して、自分の道を創る力は身に付けさせたい。そのことは志教育とつながります。人とかかわって、何か自分で求めたり、何が果たせるか、この三つのキーワードが大事だと思います。

中川西 高校生はどうでしょう。

穀田 高校は、齋藤先生がお話した多くの拡大版というか全くその通りです。

関係ない話をしますが、野球部の顧問をしており、甲子園常連校の監督さんが別のチームに移られて新たにどのようにチーム作りをしているか質問したら、ものすごく面白いことを言っていました。「今の子供はみんな自分のことわかってほしい、わかってくれとばかり言うけど、それは俺はやらない。こちらのことを理解しなさい。」という話でした。先ほど自分たちのわかる言葉で、狭い世界で自分たちをわかってもらえればいいのが高校生に多いものですから、自分たちの方から発信してわかってもらう、他者にわかってもらうということをこれから特に身につけさせたい。高校の場合は社会に出るのですから、すべてわかってもらえるわけではない世界に君たちは出て行くという準備をさせたいと思っています。



(宮城広瀬高校 穀田先生)

中川西 私からもですが、日ごろから、「なぜだろう」とか「どうして」と、そんな気持ちで生活してほしいと思って生徒たちには話をしています。全部鵜呑みにするそういう教育を我々がしてしまっているのではないかな。

「本当か」というところで我に返って考えてほしい。分からなかったら解明して、ちょっとでも分かれば褒めてあげる、成功体験がサイクルになっていく、そのような未来を自分の力で切り開いていく力が大事だと思います。

では、どうやって新聞活用の活動を進めたらよいか。有効であることがデータのにもあるわけです。

宮城版 NIE に向けて

中川西 実践指定校でなくても全県的にいかできないでしょうか。当然リーダー役が実践指定校ですが、他の小、中、高含めて新聞の利活用を進めていくことができないかと思っています。

学校図書館協議会長を兼ねているので、読書に関するアンケートの結果を用意しました。小学生も、中学生も、高校生も本が大好きという子は8割以上います。ところが、2018年では、1か月間で何冊読んだかについては、小学生が9冊、中学生が4冊、高校生は1冊です。思いと実際は違います。置いておくだけでは読むわけではないという話がありましたが、学校で仕掛けていけない限りは無理ではないか。小学生なりに、中学生なりに、高校生なりに仕掛けをしていかなければならないのかなと思います。

一つの方法として、子供たちの中で交流活動を推進する体制づくりができないもの

か。校種を超えてお互いに一つの記事についてどうなんだろうということを意見を交流し合うことを考えています。それが宮城らしい NIE と思っていますが。どうですかね。

地域ではやられていますが、全県で広げていくいいアイデアがないかと思っています。子供たちを動かしていく、仕掛けは先生たちがしていくが、新聞の利活用で能力を高めていく、そのように新聞を利用できないものかと思っています。



(岩出山中学校 齋藤先生)

齋藤 今進めている実践について紹介します。私は、息子の学校の PTA 行事で「ことばの貯金箱」をやりました。地域の新聞販売店も巻き込み、保護者の参加は生徒 80 名に対して 20 名くらいの参加がありました。また、中新田図書館で「ことばの貯金箱」コーナーを設置してもらい、1 冊のノートを置いています。中学生と 80 代の方の「ことばの貯金箱」の作品が 1 冊のノートの中で隣同士になっていました。私も NIE のアドバイザーをしているのでいろいろな仕掛けを通じ世代を超えたつながりや新聞販売店、図

書館を巻き込んでいくと NIE が広がっていくと思います。

中川西 本校では ICT 教育を推進しており生徒一人 1 台タブレットを持っています。つながりの中で ICT も活用できないかと考えています。今日は NIE 推進委員で本校教員の鈴木理恵先生が来られていますが、県内でネットワークづくりを系統的にできないでしょうか。

鈴木(城南高) 本校では ICT 教育を導入しております。ビデオ通話もできるので、いろいろな可能性があると思います。ズーム機能もあり、複数で会議をしている感じもあります。小、中、高の発表を聞いて思いついたのですが、NIE の高校部会で全国大会の伝講を聞いたときに茨城の被災地でない小学校が被災地の取材をしているという発表があり、大変興味深いと思いました。校種を超えて生徒会なりチームを作って被災地と被災地以外の生徒、校種を超えていろいろな意見を交換するのも宮城の子供たちに付けたい力だと思いました。

中川西 パソコン上でも今インターネットがつながっていますから、学校図書館を核として全県的に動きを作れるのかなと思いました。

一歩進んで子供同士とか、世代を超えて、校種を超えて NIE 教育が新しい形で推進していけば楽しいと思った次第です。

河北新報社の学びサポートの一覧もあり、活用しながら、また進めたいものです。

山内先生、齋藤先生、穀田先生、素晴らしい発表をありがとうございました。県教委の櫻井先生、ありがとうございました。

今回の学習到達度調査（P I S A）の「読解力」の結果を受けて、新聞紙上で取り上げられた日本の生徒などに対するコメントなどを羅列してみました。

- 1 文章を正しく読み取れない。
- 2 言いたいことを正確に伝えられない。
- 3 主語・述語が不明確で、意味が通じない。
- 4 いらぬ助詞を足す学生が本当に多い。
- 5 前後のつながりを考えない。 → SNSの影響
 - : 短文、話し言葉で通じる
 - : スタンプ、絵文字を使えば感情が伝わる
 - : ぱっと書いて、ぱっと送る
 - : 読み込めていなくても、早く反応することを重視

- 6 学校外で毎日又はほぼ毎日チャットをする生徒。87.4%
- 7 一人用ゲームをする生徒。47.7%
- 8 「てにおは」をしっかりと理解できていない。
- 9 長い文章を読む訓練ができていない。
- 10 まとまった文章から情報を抜き出す能力が落ちている。

- 11 今の子供達は、部活動やスマホ、塾と忙しすぎるのではないか。

- 12 危機意識をもって手を打たないと、順位は上がらない。

- 13 新聞などでまとまった文章に触れる時間が減少している。

- 14 新聞や雑誌のような内容を精査した長文をよく読む生徒が減り、ネット上のチャットなど短文のやりとりが増えた。

- 15 小説や新聞などで、まとまった文章を読む機会と読解力には関係性がみられた。

- 16 1ヶ月に数回以上新聞を読む。日本：21.5% OECD平均：25.4%

- 17 読む生徒は読まない生徒に比べ、平均点は30点以上高かった。

- 18 本を読まない。日本：25.7% 中国：3.3% 香港：12.7%

- 19 学習でのICT活用の遅れ。

- 20 文章から情報を探し出す力が乏しい。

- 21 文章の質と信頼性を評価し、熟考する力が乏しい。

- 22 長文に慣れていない生徒は語彙が減り、文章から必要な情報を抜き出す力が低下している。

- 23 子供たちの言語環境が急激に変わり、読書などで長文に触れる機会が減った。

- 24 ゼミ発表では、「そして」連発

- 25 長文嫌い。接続詞は苦手。

- 26 日本語を組み立てる力は、以前と比べ明らかに落ちている。

- 27 「読み書き」は今や特殊技能の一つ。

- 28 自分の考えを、他人に伝えるように根拠を示して説明することが苦手。

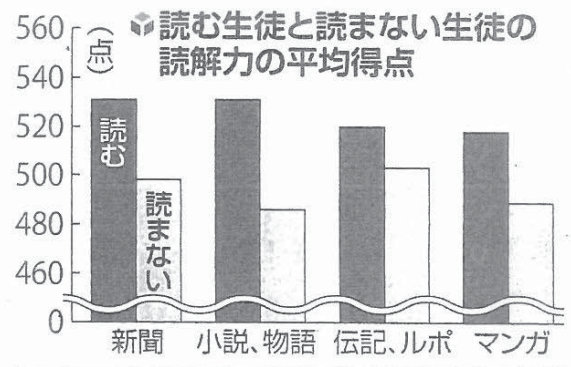
- 29 文章に寄り添って理解するのは得意だが、書かれている内容や筆者の考えの妥当性を吟味すると言った「評価・熟考」型の問いには手を焼く傾向が指摘された。

- 30 学校教育の中で、他人の意見に流されずに自らの頭で考え、表現する。そんな習慣を身につけていないのではないか。

- 31 国内では長らく、もっぱら共感をもって作品を読む教え方が主流だった。それが2000年のP I S A開始以降、書かれていることをうのみにせず、批評的に読む方法の研究が進み、教科書も変わりつつある。

- 32 思考力を鍛える授業づくりには手間がかかる。

- 33 学習指導要領の「読むこと」の言語活動は読んで終わりではなく、読んだ上で発信する形だ。関連の様々な文章や作品を読んで情報を比較し、考えを持ち、発信、共有するという学習を意図的に繰り返すことが重要だ。



読売新聞（令和元年12月4日）より

宮城県N I E研究大会 記念講演

「子どもたちの健やかな脳発達のために」

東北大学加齢医学研究所教授

瀧 靖之先生

世界でも貴重なデータ

本日は、脳の発達全体についてお話し、最後に、先生方も日々感じておられるかもしれない新聞の力について触れたいと思います。

私がおります東北大学加齢医学研究所、スマートエイジングセンターでは、脳科学の研究から得た知見を社会に発信しています。子どもたちのどういう生活習慣、親子関係が脳の発達にどう影響するかという研究もその一つですが、健康なお子さんはそもそも病院に来ませんので、世界的にデータが少なく難しい分野です。



たき・やすゆき 東北大学スマート・エイジング学際重点研究センター副センター長、東北大学加齢医学研究所機能画像医学研究分野教授、医師・医学博士

そこで私たちは、10年前になりますが、宮城県や県や市の教育委員会、校長会などに相談し、極めて多くの方たちの協力をもらうことができました。「小児脳発達プロジェクト」と言ひまして、世界でもまれなデータベースを保有しています。東北大学加齢医学研究所長の川島隆太先生がプロジェクトリーダーで、私が実務を担当しました。子どもたちに大学に来てもらい、うるさくて怖いMRIに入ってもらう前に、30分ほどかけて仲良くなってラポール形成をしてから画像を撮ります。画像診断の際は「これがあなたの脳ですよ」と画像をプリントして渡し、最後に「あなたの協力で貴重なデータが得られました」と感謝状を渡します。子どもにとって大事なものは、このあとお話ししますが、知的好奇心なのです。このようにすることで、「将来医者になりたい、脳科学者になりたいと思った」という手紙をたくさんいただきます。

これからお話することは多かれ少なかれ新聞につながっていくと思いますが、まずは総論的なお話をします。

発達のピークが異なる

子どもたちの脳の発達はどうやっておきるのか。子どもの脳は、生まれてからいっぺんに成長するわけでは全くありません。ある部分は早くから、ある部分は思春期ごろになってやっと発達していく。脳の領域により発達のタイミングが異なります。領域ごとの発達のピークが分かると、周囲の大人が子どもの健やかな脳の発達のために、いつ、何をしたらいいのかが見えてきます。

生まれてからしばらくの時期は、「感覚」に関わる脳の領域が発達のピークにあります。笑顔でぎゅっと抱きしめ、ぬくもりを感じながら赤ちゃんの目を

見てたくさんお話をする。いわゆる愛着形成の時期です。これが大変重要です。

半年から2歳ぐらいは「母国語の習得」の時期です。読み聞かせの時期です。ちなみに読み聞かせはこの時期だけにすればいいのではなく、ずーっと、やりたいものです。小学生、中学生にもいい働き掛けになります。

次に来るのが、特に大事な「知的好奇心」。2歳ぐらいから、知的好奇心が芽生えてきます。自者と他者、自分の世界と外の世界の区別がつくようになる。このことから、さまざまなことに興味を持つようになります。

3～5歳ごろは「運動」に関わる領域が発達し、8～10歳ごろは「言語野」が発達する時期で第2言語の習得に向いています。

小学校高学年から中学校の時期は「前頭前野」が発達のピークを迎えます。前頭前野というのは、考える、判断するという、極めて人間らしい力にかかわる領域です。子どもたちが夢をかなえる、自己実現を図るのに大事なものは何でしょうか。たくさん大事なものがありますが、学力はやはり重要だと思います。知的好奇心の強い方が、学力が伸びることが分かっています。なぜでしょうか。

好きなことは覚えやすいんです。好きなことについては記憶力が良くなるのです。記憶をつかさどる海馬と感情をつかさどる扁桃体は密な関係にありこの両方が刺激されると、わくわく楽しくなっているものを覚えやすくなるのです。学力を伸ばすには、知的好奇心をいかに高めるかがポイントになるのです。

脳が発達する親子関係

中学校、高校、大学で伸びていく子の家庭の様子を、私たちはインタビューを重ねて調べました。大変興味深いことに、非常に伸びた子たちは、仮想の世界と現実の世界を結びつける作業を家庭でなさっているんですね。図鑑でも本でも新聞でもいい。こうした社会のものごとを伝えるものから何かを知って興味を持った様子を見せたら、すかさず本物を見せる。新幹線に興味を持ったなら仙台駅や車両基地。化石なら科学館。こうしたことを何度も繰り返すことで、子どもに世の中の広がりを理解させているんです。

ここで大事なのが、「図鑑を買い与えればいいんだ」

でなくて、私たち大人が図鑑や本や新聞に興味深く読んでいる姿を見せることです。人の脳には、真似をするミラーニューロンがあり、子どもは周囲の大人を模倣して能力を獲得していきます。私たち親が楽しんでいる姿を子どもに見せ、楽しいことを一緒に行うことこそが大事なんです。

アウトドア体験は効果があります。アウトドアでの活動は、脳発達に重要な「運動」や「好奇心」「コミュニケーション」などの要素が含まれています。そして、ゲームと異なり、アウトドアではいろんなことが無限に起こります。興味の幅も無限に広がります。非コントロール下で状況を判断し、課題解決へ対策を遂行する能力が求められます。共感性や、やり抜く力が育ちます。

やり抜く力のような、点数で表しにくい非認知能力の重要性が最近指摘されているところです。

いわゆる「東大脳」の持ち主に共通するのは、並外れた熱中体験を持っていることです。音楽でも図鑑やスポーツでも「究める」ことができれば、勉強も同じこと。子どもが熱中体験を持てるのは幸せなことです。親子で一緒にいつでもリビング勉強ができることや、規則正しい生活も大事です。

伸びる子の家庭ではどんな言葉を掛けていると思いますか？「何でも好きなものをやればいい」「勉強は好きなときにやればいい」「自分の人生だから自分で決めればいい。サポートするよ」「パパ、ママは何があっても味方だよ」「面白いね。よく気付いたね」「努力しているから、きっと人が認めてくれるよ」。虐待により子どもの脳の発達が抑えられてしまうことは知られていますが、その逆はどうでしょう。知的好奇心を満たし、脳の発達をどんどん進めるのは良好な親子関係だということが分かりますね。

寝る、食べる、運動する

親子関係の他に重要なものがあります。生活習慣です。

当たり前のことのようにですが、十分な睡眠が大切です。睡眠不足は海馬の神経新生を押さえ込んでしまいます。長時間のスマホゲームで睡眠を削るのは脳発達を抑制してしまうのです。

次は食事。子どもの脳は大人の1・5倍～2倍のエネルギーを使います。脳の爆発的な成長に必要なからです。エネルギー不足はよくないのです。まずは食べること。さらに、朝食にごはんを食べる子と、

砂糖たっぷりの菓子パンを食べる子では、ご飯党の方が、脳発達により進むと考えられます。子どもの脳は常にエネルギーを必要としているので、菓子パンのように血糖値がドーンと上がってすぐ下がるものは不向きです。菓子パンはおやつにはいいですが、主食には普通のパン、もっといいのは白米です。

そして、運動して体を動かすことも、もちろん大事です。

寝る、食べる、運動する。生活習慣については、昔から言われている当たり前のことを脳科学で後付けしているだけなのではないか、と思ったりもします。ゲームで夜更かしすることがいかによくないか、知っていただきたいと思います。

趣味がもたらす豊かさ

熱中するものは何でもいいんですが、楽器演奏が脳にすごく良いことは最近分かってきました。楽譜を見て、理解して、体を使って再現する。脳のたくさんの分野を使い、発達を促進するからです。

もう少し話を広げると、趣味や好奇心は大人にとってもすごく大事です。私たちは認知症予防の研究もしています。認知症リスクを下げる要因は限られていますが、趣味、あるいは好奇心を持つことは有効です。大人のためにも、親子で一緒に楽しめるといいですね。

人は、いかにいろんな人とコミュニケーションができるかが重要だと思います。余談ですが、脳科学の学会で海外に行ったときに、ホテルにピアノが置いてありました。私も暗譜で弾ける曲が1、2曲あるので、もう一人いた男性と一緒にピアノを弾いてコミュニケーションして、その後に名刺交換をしたら、雲の二つ上ぐらいの著名な脳科学者だったことがあります。何か趣味や特技があると、国を超え世代を超えてコミュニケーションできる。熱中した体験があるのは素晴らしいことです。

デジタル機器の負の側面

近年、「共感性指数」の低下が注目されています。子どもたちに接している先生方は実感されているのではないかと思います。「相手の気持ちを理解できない」「空気が読めない」子どもが増えています。2000年以降、指数の低下が顕著です。デジタル化に伴うソーシャルスキルの低下が影響していると考え

えられ、「今後、大問題になるだろう」と言われています。

メディア脳の問題が指摘されています。スマホなどのメディアが脳に与える影響は、少なくとも、ポジティブなものだけではないと指摘できます。まだ、科学的エビデンス（根拠）が少ないですが、あと何年かすると研究結果がたくさん示されるようになるでしょう。

ゲームをやめられない、問題が起きてもゲームを続けてしまうなど、自分で自分を制御できないのは、意志が弱いからでなく、治療の必要な疾病「ゲーム障害」であると世界保健機関（WHO）が認定しました。

脳の発達は非常にダイナミックです。小中高校の世代が、本来なら運動する、ぐっすり寝ている、人とコミュニケーションを取っている、こういう時間を対戦型ゲームなどに費やしている。心身の発達に影響を受け、結果として、その後の「人生を築いていくための機会の損失」が起きているのではないのでしょうか。

スマホなどのデジタルメディアは素晴らしいコミュニケーションツールですが、半面悪い面もある。この悪い面をよく考えないといけません。1日1時間、2時間など使用時間を決めて、使用を打ち切れないのではと思います。そうやって共存していくしかないと思います。

新聞で親和性を高める

最後に新聞について。私より先生の方がはるかに経験、知識がおありでしょう。新聞を読む子は成績がいい。なぜでしょう？ 多くの言葉に接すれば接するほど、いろんなことを習得します。普通の生活だけより、新聞など活字に暴露する場面が多いほど、インプットが増える。語彙や分かる漢字が増えると読解力が高まり、結果として学力に影響してくるわけです。読解力がつくからです。

未就学児に関するある調査によると（岸本裕史氏による報告）、未就学の時期にどれだけの言葉に触れたかにより、その先の学習能力に差が出るという結果があります。小さい時から絵本を見せたり読み聞かせをしたり、少し字に触れさせてあげると就学後に効果的ということでした。

人には、初めてのものより、一度触れたことのあるものの方が、親和性が高いという特徴があります。

私が「新聞は素晴らしい」と思うのは、新聞にはさまざまなジャンルの記事が載っているのです。ぱらぱらめくるだけでファミリーアティー(親しみやすさ)が上がります。勉強だと意識せず、自然に知識を入れてあげるのに、新聞は素晴らしい存在です。

新聞で知っているのに、教科書で出てきたときに「ああ、あれ」となる。興味が広がり、記憶力を上げる。先々の職業選択にもプラスになります。概観できるようになるからです。情報を受け取るツールとしてタブレットなども悪くないですが、ネットサーフィンをしているうちに主題から外れ、芸能ネタなどに移ってしまったり本来の興味が削がれたり、目のピント調節機能が低下してスマホ老眼になったりする心配があります。

新聞のメリットは非常に大きいので、子どもたちの新聞への親近感をぜひ、育ててあげてほしいと思います。それには、保護者が新聞を読んでいる姿を子どもに見せることです。

「きょうの1面は何だろう」と新聞に載っている話題を家庭で取り上げて、楽しい時間を持っていただきたい。内容がよく分からなくても、言葉やものごとに対するファミリーアティーが上がり、後で学ぶときに記憶力が上がります。

趣味を持つことは大事で、「幸せな人は長生きする。Happy People Live Longer」と言われます。主観幸福度の高い人はストレスレベルが下がり、高脂血症、高血圧、循環器病などを遠ざけるのです。

保護者がストレスをためず、子どもが楽しいと思えることを一緒に経験できる環境をしっかり作ってあげる。夢中になれることを、親子で楽しんでいただきたいと思います。

まとめ

本日お話ししたことを、まとめてみます。

脳は段階を追って発達する

子どもの脳はいっぺんに一様に発達するのではなく、後頭部から前頭へ向かって、各部分が発達していきます。段階に合った働き掛けで、健やかな発達を支えましょう。

学ぶ力の土台は好奇心

子どもたちの学ぶ力の土台となる知的好奇心を伸ばすには、保護者の生活習慣も大きく影響します。スマートフォンなどのデジタルメディアは、デメリ

ットによく注意してください。多種多様なニュースに触れられる新聞の有用性を知り、「読みなさい」ではなく、一緒に読んで、いろいろな世界への親しみ、ファミリーアティーを育ててください。



〈質疑応答〉

Q 脳の成長とは、成長のピークとは具体的にどういうこと？

瀧 脳の発達死ぬまで続きます。脳には可塑性という、変化する力があるからです。ただ、可塑性は年齢とともに下がるので、時間がかかります。最適な時期を逃しても、今から始めればいいんです。

Q 脳は大きい方がいいのですか？

瀧 脳科学者の間で少し前に話題になったテーマです。知識や言語などは大きい脳の方が良いようだが、運動能力は小さい方がパフォーマンスが良いようなど、いろいろ組み合わせがあるようです。年を取ると、脳の体積が保たれている方が認知力は良いようです。

Q 親や教師など周囲の大人がすべきことは、子どもたちのミラーニューロンをいかにうまく刺激するか、ということでしょうか？

瀧 小さいうちは一緒にやる。大きくなったら、意欲を保てるように、いかに明確なマインドセットをしてあげられるか、だと思います。職場体験などもいいでしょう。より大事なことは、私たち大人がいろいろ楽しんでいるところを見せることだと思います。

Ⅳ 実践報告

(1) 南三陸町立戸倉小学校

平成30・令和元年度実践指定校

新聞に親しみ、進んで活用する児童の育成

～国語科の授業づくりの工夫を通して～

1 はじめに

本校は、昨年度から2か年（平成30・令和元年度）のN I Eの実践指定を受けた。

昨年度、指定を受けるにあたり、児童と保護者を対象に「新聞に関するアンケート」を4月に実施したところ、家庭における新聞の購読率が44%で、新聞を日常的に読んでいる児童は26%であった。購読率は半数近くあったが、新聞に親しみ、日常的に活用している児童が少ないことが分かった。

そこで1年目は、「新聞に興味を持ち、進んで親しむ児童の育成」を研究主題とし、授業や日常活動にどのように新聞を取り入れたらよいか、国語科を中心に授業づくりの工夫を行い、以下の2つの視点で研究に取り組んだ。

- (1) 学習意欲を高める工夫
- (2) 新聞に親しむ機会の工夫

日常生活で新聞に親しめるような環境を整えながら、国語の授業に新聞を取り入れた。児童は、今まで少なかった活動という珍しさもあり、興味をもって授業に取り組み、学習意欲向上が図れた。しかし、研究授業以外での新聞の活用が少なかった点や、児童自らが新聞を活用することまでは至らなかった。

2年目は、1年目よりも新聞を授業に積極的に取り入れ、児童が進んで活用することができるように、以下の2つの視点で研究に取り組んだ。

- (1) 新聞に親しむ機会の工夫（日常的な活動）
- (2) 新聞の取り入れ方の工夫（授業づくり）

2 実践の概要

(1) 新聞に親しむ機会の工夫

① 教員研修の実施

1年目の夏休みに他校の教員も参加して、共同通信社の長田良夫氏より講話を、東北福祉大の渡辺裕子先生に「ことばの貯金箱」のワークショ



ップをしていただいた。楽しみながら学ぶことができ、児童の活動支援へ生かすことができた。

② 「ぶんぶんタイム（朝新聞）」の設定

木曜日の業前活動に「ぶんぶんタイム」を設定し、1年目は全校でことばの貯金箱に取り組んだ。子供たちは新聞を広げることに慣れ、切り抜いては楽しそうに「チャリーン」と貯金することができた。

(↓ 1年目 2年生のぶんぶんタイム)



2年目は、低学年はことばの貯金箱、中学年は新聞を読んで記事を紹介、高学年はかほくワークシートやスクラップノートの紹介などを行った。

(↓ 2年目 3年生のぶんぶんタイム)



③ 「新聞ひろば」の設置

1年目は、1階玄関前のホールに新聞を並べ、広げて読めるようにカーペットを敷いた「新聞ひろば」を設置した。また、児童が載った記事や地域のニュースを切り取った記事を掲示した。



2年目は、新聞ひろばを2階教室前に移動した。学年部ごとに3か所設置し、低学年部前には子供新聞を、中・高学年部前にはこども新聞と一般紙を置いた。



また、図書室の一角にも新聞を並べる机を設置し、図書委員会がおすすめの新聞を紹介した。



④ 「新聞コーナー」の設置

1年目は玄関の新聞ひろば前に、2年目は2階廊下に、新聞記事を紹介するコーナーを設置した。



⑤ スクラップ作り

1年目は、高学年で、面白い記事を画用紙に貼って紹介するスクラップカード作りに取り組んだ。

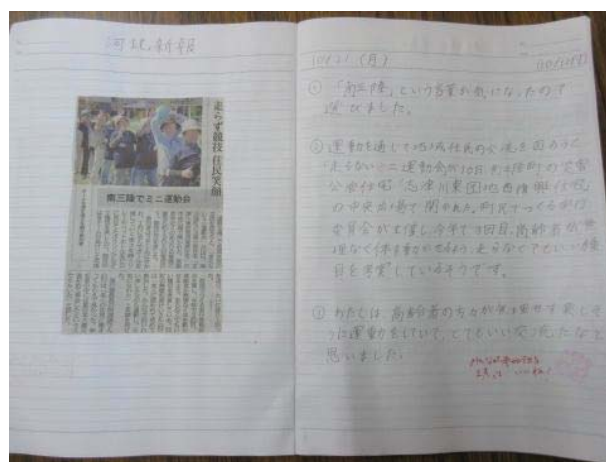
2年目は、3年生以上でスクラップ作りをした。

中学年は、「アイカード（英語の introduce の頭文字から、校内で決めた呼び名）」として、画用紙に貼って紹介する活動に取り組んだ。それぞれの学級で廊下壁面等へ掲示し、いつも見られるようにした。



高学年は、全員がA4サイズのノートを用意し、週末の家庭学習として「スクラップノート」に取り組んだ。月曜日の朝の会で紹介し合ったり、廊下へ並べて見合ったりする活動を行った。

いずれの活動も、家庭に新聞がない児童もいるので、学校の新聞を持ち帰らせて、取組を続けた。



また、3年生以上全員で「河北新報スクラップ作品コンクール2019」の“ファミリーの部”に応募し、「優秀団体賞」をいただくことができた。



(2) 授業実践

- ①一人一回以上の研究授業(国語)全員で検討会
- ②各学年で授業実践、結果を一覧にまとめる。

【1年目：学習意欲を高める工夫】

1年 かたかなをかこう

「ことばの貯金箱」から片仮名の言葉を選び、その言葉を使って文を作った。日常活動と授業がつながり、児童は意欲的に取り組むことができた。



2年 なかまになることばをあつめよう

「スポーツ」「動物」などのグループ毎に、仲間になる言葉をこども新聞から探す活動を行った。探し出させたい言葉が載っている新聞を事前にまとめておいたものを配ることで、スムーズに行うことができた。



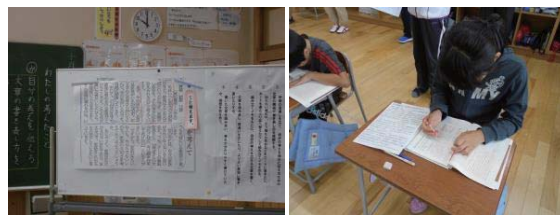
3年 「ほけんだより」を読みくらべよう

図や表の効果について新聞記事を紹介したり、実際に新聞を眺めたりする活動を取り入れた。児童は、こども新聞を手にし、楽しみながら図表の効果について考えることができた。



4年 わたしの考えたこと

自分の考えを相手に伝えるための文章の構成や書き表し方を理解するために、新聞の投書を紹介した。教科書にそった形式で書かれた投書を探ることができず、実際は形式が少し違うものを提示することになったが、児童は一生懸命学習することができた。



5年 新聞記事を読み比べよう

自分が気に入った記事を探して紹介することで、「面」や「記事の書かれ方」に気付かせるようにした。一人一紙、手にしたことで、友達が選んだ記事を自分の新聞から探すことができ、意欲的に取り組むことができた。



6年 新聞の投書を読んで意見を書こう

たくさんの新聞を用意し、投書を読んでテーマに分ける活動を行った。実際に投書をするという目標を設定することで、児童は真剣に読み進めることができた。



町の幸福論 —コミュニティデザインを考える
プレゼンテーションの情報集め的手段として新聞記事を活用した。信用できる資料として新聞記事を活用できることに気付かせることができた。

また、発表会では、新聞等で集めた事例をもとに発表することができた。



【2年目：新聞の取り入れ方の工夫】

1年 ねことねっこ（国語）

こども新聞から、促音を含む言葉を探す活動を行った。事前に促音が載っている新聞を用意したことで、スムーズに取り組んでいた。



いろいろなふね（国語）

こども新聞に掲載されているポンプ車の「役目」「つくり」「できること」を探し、乗り物カードにまとめた。



あきまつり（生活）

おもちゃまつりの「わなげや」で、新聞紙を使用して輪を作って遊んだ。

どちらがひろい（算数）

大きさの異なる一般紙とこども新聞を用意し、直接比較に使用した。

2年 なかまになることばをあつめよう（国語）

「スポーツ」「動物」の2グループで、仲間になる言葉をこども新聞から探す活動を行った。



もっとなかよし

まちたんけん（生活）

生活科の町探検で、さんさん商店街を探検して見つけたことを、グループ毎に、壁新聞にまとめた。



3年 ようすをくわしく表そう（国語）

新聞から選んだ記事の写真を縮小して配付し、同様のものを電子黒板で拡大提示して、様子を詳しく表す文を考える活動を行った。気仙沼市のきれいな写真だったので、興味をもって取り組んでいた。



ながーい紙、つくって（図工）

新聞紙を切ったり、つなげたりしながら、思いついたことを表現する活動で、長く切った新聞紙を使用した。

店ではたらく人（社会）

社会科の校外学習で、かまぼこ工場を見学して分かったことを、グループ毎に壁新聞にまとめた。



4年 みんなで新聞を作ろう（国語）

新聞を一部ずつ配付し、見出し毎に記事の範囲を色ペンで囲ませた。分かりやすい配置について考えさせることで、自分たちが作成する新聞の見出しやレイアウトを考えるための参考になった。

わたしの考えたこと（国語）

教科書の教材文と同じ形式「自分の考え」「考えの理由」「きっかけになった出来事」「自分の考え」で構成されている小学生の投書を新聞から探して提示し、意見文の構成を考える参考にさせた。



お蚕様の秘密を探ろう（総合）

総合的な学習の時間に取り組んでいる蚕を育てて繭をとり、繭細工を作って配るまでの活動を通して学んだことを、グループ毎に、壁新聞にまとめた。



5年 新聞記事を読み比べよう（国語）

児童数分の新聞（全国紙）を、当日朝に配達してもらって使用した。地方紙は学校で購入しているものを使用し、全国紙と地方紙の違いに気づかせることができた。



資料を生かして考えたことを書こう（国語）

教科書の教材文をもとにして、パンフレットにまとめる活動を、壁新聞にまとめる活動に変更した。グラフや表のある河北新報の記事から、資料に書かれていることを読み取って文章を考えさせた。



情報を生かすわたしたち（社会）

普段、SNSなどによる情報がどのように使用されているかを取り上げている記事を紹介した。社会に溢れている膨大な情報の中から、信頼できる情報元を選んで必要な情報を得ることの必要性や重要性などについて考えさせることができた。

6年 新聞の投書を読んで意見を書こう（国語）

児童の人数分の+αの新聞を用意し、一人一人読みたい投書を選んで読み、投書とは何かについて学習した。新聞を広げられるように長机を設置した。

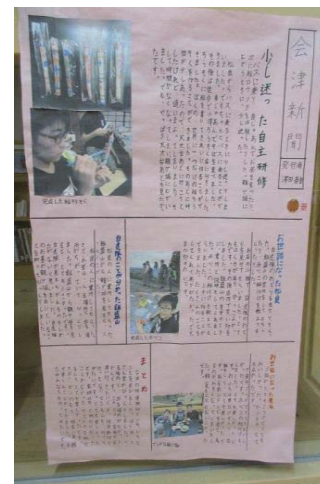


その後、実際にテーマを決めて書いて「声の交差点」に投書したところ、掲載していただくことができた。



修学旅行のまとめ（総合）

会津若松市方面への修学旅行で、したことや感じたこと、考えたことなどを壁新聞にまとめた。



長く続いた戦争と人々の暮らし（社会）

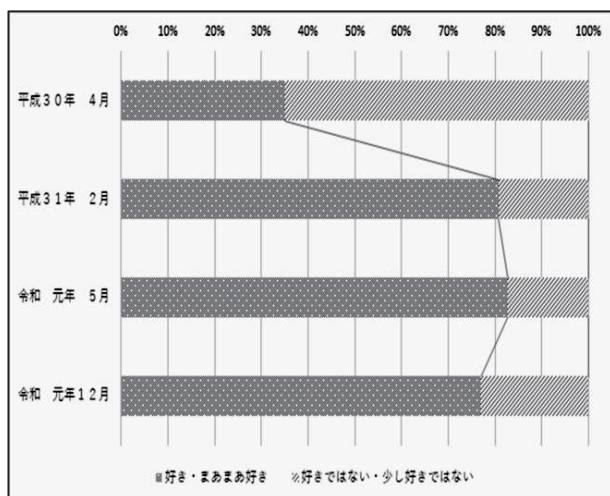
沖縄戦や原爆について特集された新聞を、学習時の資料として使用した。教科書や資料集より詳しくまとめられており、児童は興味深く読み入っていた。



3 成果と課題

(1) 成果

- 「新聞に親しむ子」に関しては、アンケートの結果では、「新聞を読んだり、読んでもらったりするのが好き」と答えた児童が、NIEの取組を始める前に比べて、大きく増加したままで推移した。これは、いただく4か月分の新聞以外にも助成金を使って子ども新聞などを学校で購入し、年間を通して校内に新聞が豊富にある環境を整えたことが要因の1つと考えられる。それらの新聞を活用してぶんぶんタイム（朝新聞）の活動を楽しんだり、新聞ひろばや新聞コーナーを常設したりすることができ、新聞に親しませることができた。また、家庭学習のスクラップノート作りのために、家庭へ新聞を持たせて取り組ませたことで、今までなかなか新聞に触れることができなかった児童が、ゆっくり読むことができるようになったことも要因の1つであると考えられる。



- 「進んで活用する子」に関しては、2年間、全校で授業研究をし、新聞をどのように取り入れるかに

ついて、試行錯誤しながら取り組んだ。

上学年は実物の新聞を使用することで、教科書の内容理解を深めることが



できた。また、下学年でも、子ども新聞を使用するなど取り入れ方を工夫することで、楽しく学習することができた。今年度は、研究授業以外でも前年度の取組を生かして授業できるように、年間指導計画に「新聞を取り入れた授業一覧」をはさみこんで使用した。事前にどの教科のどの場面で使用できるかが分かり、教材研究において有効だった。さらに担任の創意工夫で、積極的に様々な教科で新聞を使う実践も試みた。社会科や総合などで記事を紹介したり、壁新聞を作ったり、体育や図工で新聞紙として使用する等、多岐に渡って取り入れることができた。

- 読解力の向上につながった可能性がある。全国学力・学習状況調査の「読むこと」の結果が、昨年度より向上していた。調査方法や児童の実態、人数も異なる上での比較なので安易に結論付けることはできないが、今年度の結果として全国平均には及ばなくとも差が小さくなり、児童の読解力が向上してきているのではないかと感じた。

(2) 課題

- 新聞は、家庭で購読していないと児童が自ら触れる機会がないため、新聞が身近にある環境づくりはとても重要である。新聞を読むことの面白さや重要性、ネットニュースなどとの違いについて学習する時間を確保し、環境づくりに努めたい。
- 家庭学習の課題にすることや新聞の記事を紹介するような活動は短時間でできるが、言葉集めに使うため等、事前に新聞を精選する準備には時間がかかる。新聞を取り入れるメリットとデメリットを踏まえて、取り組む必要がある。
- 新聞を読む習慣付けや、記事に対して自分の考えを持つところまでを児童の「活用する力」ととらえて取り組んできたが、そこまでは難しかった。
(担当 教諭 武山 知子)

新聞に親しみ、互いに学び合うNIE

1 はじめに

本校は「キリスト教的人間観に基づく人格形成」を教育目的とし、児童期（ファーストステージ）、思春期（セカンドステージ）、前青年期（サードステージ）の発達段階ごとに教育活動を展開する小・中一貫校である。児童・生徒は仙台市内外のさまざまな地域から通学してきており、それぞれの児童・生徒の住む地域が異なるため、自分の住む身近な地域についての情報や学びを共有することは難しい。そのため、地域に目を向けながら学ぶ学習では、学校の周辺地域を取り上げて活動を展開している。各教科の学習では、教育特例校として文部科学省の認定を受け、「論理的思考力と表現力の育成」を目標に、三森ゆりか先生（つくば言語技術教育研究所）のご指導をいただきながら、子どもたちだけでなく教員も継続して言語技術教育を学び、子どもたちに週1時間の授業を行っている。言語技術教育によって思考力・表現力を鍛えながら各教科の基本とし、各教科と連携したESD活動を展開してSDGsの実現に近づくことを目指している。ESD活動ではさまざまな活動で新聞をつかう機会を取り入れ、それぞれの学年の目標に応じたNIE活動に取り組んでいる。また、今年度のNIE活動の目標を「新聞を活用して、論理的思考に基づくクリティカルなものの方見・考え方を身につける。」と定め、学習活動の道具の一つとして児童・生徒が新聞を身近なものと感じ、生かすことができるよう目指している。

2 実践の計画

今年度も本校におけるNIE活動は、昨年に引き続き、ESDなどの年間活動計画の単元の中の活動として位置づけられている。年度当初のESD活動の年間計画の作成時に、どの活動にどのように新聞を使うことができそうか、どのように活用できそうかを各学年で考え、ESDとの効果的な結びつきを図っていきけるようにする。学年のテーマや目標に関する新聞記事を探し、記事から情報を正確に読み取ることをねらいとした活動や、記事に対して自分の考えを明らかにしながら他者に向けて発表を行う活動など学年に

新聞を作成することで学んだことを効果的にまとめたり、発信したりする機会をつくってきた学年もある。これらの活動を通して、新聞をツールとして協働的に学び合い、他者とのかかわりを大切にするという点でも、ESD活動の中に積極的に位置づけることを目指している。

日々のNIE活動としては、数年来継続して全校で行ってきた「この記事に注目！」もさらに内容を充実させ、新聞に親しませるよう各学年で工夫している。併せて、本校の言語技術教育を基盤とした指導により言語活動も充実させることを心がけ、活動を通じた他者との「対話」による伝え合い、深め合いを目指す。



メディアセンター（図書館）のNIEコーナー

<学校全体で取り組む活動>

○各学級に新聞を配布

今年度より、各学級に新聞が1部ずつ入れられるようになった。朝に届けられた新聞を、各クラスの当番が午前中のうちに学級に運ぶ。（配られる新聞は、1～3年生が毎日小学生新聞、4年生から9年生までが河北新報。）

朝読書の時間にも新聞を読む児童



昨年までは学年に1部ずつの割り当てで配られていたため、各学年の教室前の廊下に新聞を置いて、学年ごとに見ることができるようにしていた。しかし、クラス単位で所持しているものではないため、担任が自由に記事を切って活用したり使いたいときに使うことができなかつたりする不便さがあつた。その結果、ほとんど見られたり使われたりするものないまま活用されない新聞が多い実態が見られた。このような状況を改善するため、また、新聞をもっと身近に置くことができるように、学年ごとに1部ではなく、学級に1部新聞が入るようにした。これまでより身近に新聞がある環境になったことで手に取りやすくなり、朝読書の時間にも新聞を見る児童が増えるなど、新聞は昨年度までより児童・生徒にとつて近い存在になった。

○記事を読み自分の考えをまとめる ～「この記事に注目！」～



一つの新聞記事から、発達段階に応じて、記事の要約・記事に対する自分の考えや、調べたことなどを書いてまとめ、書いたことを発表してその考えをクラスで共有する。クラス、学年によりまとめ方や実施の仕方が異なるが、児童・生徒同士で書いたものを見合い、そこに新たなコメントや感想を書き加えたり、記事の内容からクイズを自分で作ってクラスみんなに問題を出題したりするなど、さまざまな方法でクラス間の交流、協同の学びの場として活用している。自分の

考えについてよくまとめて書けているものは、1階のNIEコーナーに掲示して、他の学年の活動や内容も互いに見合うことができるようにしている。

○「いっしょに読もう！新聞コンクール」への参加

夏休みの1～9年生の共通の課題として「いっしょに読もう！新聞コンクール」に取り組む。自分で好きな記事を選び、その記事に対する、①自分の意見、②家族や友人の意見、③話し合つて感じたことを記入する。

今年度も夏休みの宿題として取り組んだ「いっしょに読もう！新聞コンクール」において、本校から3名が奨励賞を受賞した。また、小学校課程・中学校課程それぞれでの学校奨励賞も受賞した。

昨年度は…

例年続けている当コンクールへの参加であるが、昨年度は本校から2名が優秀賞を受賞者することができた。（他、奨励賞2名、学校奨励賞も受賞。優秀賞は最優秀賞に次ぐ賞。全国で校種別に10名ずつが受賞することができる。）小学校部門の2名が本校の3年生からの受賞であり、また、昨年度の優秀賞は、東北では本校の2名のみであったこともあり、河北新報社からの取材により朝刊の記事で取り上げていただいた。



3 各学年における実践

1年生

【記事を読んで自分の考えをもつ、表現する】

ESD活動のテーマである「みんなしあわせ～キラリ輝く四つ葉のクローバー～」に関連して、全員で同じ新聞記事を読み考えたことや思ったことを書く。（病気の子とファシリティーダッグの記事、台風被害に地域の人々が協力したことが書かれている記事など）

<児童の反応>

- ・自分が病気の時に、ファシリテーターがいたら、一人じゃないのでさみしくない。
- ・小児がんの子どもは、アイビーがいるから元気になる。
- ・取り組みにはお金がかかるので大変だ。
- ・犬アレルギーの人もいるからどうするんだろう？
- ・アイビーに会ってみたい。

<成果>

- ・「幸せ発見記事を探してみよう。」とクラスで促したところ、教室の新聞を見る児童が増えた。
- ・「家から新聞を持ってきていいか？」と聞いて、朝の読書の時間を利用して読んでいた児童もいた。
- ・教室に新聞をまとめて置いておくことで、新聞を目にすることも多くなり、記事に興味を持つ児童が増えた。
- ・新聞の内容を、自分の経験に置きかえて考えることが少しずつでき始めている。
- ・クラスに新聞係を作ったことで、新聞を綴じることやみんなが読めるように棚にきれいに並べる様子が見られた。

<課題>

- ・内容の理解が難しいため、教員がその都度言葉の補足をしなければならぬ状況がある。
- ・字よりもイラストや写真で自分の興味あるものだけに目を通しがちである。
- ・見出しに興味を持つまでは、まだいかない状況である。
- ・ゆっくり読むというよりは、ぱらぱらとめくることがまだまだ多い。クラスに数人はゆっくりと読もうとしている。

2年生

ESD活動のテーマである「笑顔」に関連して、読むと思わず笑顔になる新聞記事を読み感想を書く活動を、夏休みの宿題として行った。

<児童の様子>

テーマに合わせて興味をもった記事を集め、記事の内容から読み取ったことや感想をまとめることができた。また、記事を読んで、普段の自分の生活に生かそうとする様子が見られた。

<成果>

- ・いろいろな領域の新聞記事に、興味をもって読むようになる姿勢ができてきた。
- ・ESD活動のテーマと関連づけたことにより、どちら

の活動も学びを深めることができた。

- ・自分にできることを実行したいという思いをもつことができた。

<課題>

- ・全家庭で新聞を購読しているとは限らないため、身近に新聞がない児童もいた。

3年生

ESDで今年度のテーマとしている環境問題について書かれている記事を自分で選び、「この記事に注目」に取り組んだ。

<児童の様子>

一人一人が自分で記事を選んだのでクラス全体で5W1Hを確認できず、どんなことがかかっているのかなかなか理解できない児童もいた。

地球温暖化の他にもゴミや水の問題を取り上げる児童がいた。また、様々な環境問題に興味を持つ児童が増えた。

<成果>

- ・ESD活動で地球温暖化について学習し、自分たちにはできないことはないか考えたので、記事を自分たちの問題として考えることができた。
- ・環境問題が自分たちの生活に密着していることを知り、身近な問題としてとらえることができた。

<課題>

- ・新聞に何が書かれているのか自分の力だけでは理解できない（書けない）児童がいたので、個別の対応が必要。または、保護者にも協力していただくことも必要。
- ・5W1Hを理解しながら読むことができていないため、記事選びからテーマ（環境）とはずれてしまう様子も見られた。

5年生

朝の会で、日直がテーマにそった新聞記事を紹介する。テーマはESDの学習に合わせて毎月テーマを変えた。4月 自由、5月 宮城県、6月 福島県（福島県での宿泊学習に向けて）、7・8月 農業（福島県での宿泊学習に関連）、9・10月 介護・福祉、高齢者（福祉施設交流会に関連）、11・12月 小さくされている人々（待降節に関連）

紹介する際には、「選んだ理由」「記事の内容（5W1H）」「自分の考え」「調べた語句」を紹介するようにした。また、児童が作成した「この記事に注

目！」はファイリングし、いつでも見ることができるようクラスに置いている。

【河北新報「いいね小学校」】

「いいね小学校」に掲載する記事を代表児童10人で作成した。

<児童の様子>

日直になる一週間前くらいから、友達と協力してテーマに合った記事を選ぶようになった。記事を見つけられない児童がいると、「新聞の真ん中あたりに宮城県に関する記事がたくさんついているから、そこを見るといいよ」「介護・福祉に関しては、くらしのページの『ティータイム』っていう新聞を読む人の投稿も参考にするといいよ」など、記事の探し方を教え合う姿が見られた。また、朝の会等で最近のニュースの話題を出すと、「新聞で読んだ！」と興味を示す児童が増えた。

<成果>

- ・テーマを決めることで、一つのテーマに関して日々知識を深めることができる。時折、記事がかぶってしまう児童が出てくるが、両方の児童の意見を比較して違いを見つける良い学びの場となっている。
- ・昨年度と変わって日直が記事を発表するようになったり、クラスに必ず毎日新聞が置かれるようになったりしたため、児童たちが意識的にNIEに取り組むようになった。
- ・ESDに合わせたテーマを設定したため、児童たちがESDの学びとNIEの学びを関連させ、より学びを深める姿が見られた。

<課題>

- ・「介護・福祉、高齢者」に関する記事を探すのが児童たちにとっては難しかったようだ。
- ・現在は日直の発表のみの活動。NIEの発表を通して児童同士が意見を交換し合う場を設けたい

6年生

【この記事に注目！】活動①

月ごとにテーマを決めて、毎日、日直がテーマに合った新聞記事を選び『この記事に注目！』を朝の会で発表した。発表内容は、「記事の内容（5W1H）」、「自分の考え」、「調べた言葉」など。

テーマ：春、行楽、気候、世界情勢、世界平和など

【この記事に注目！】活動②

定期的にSDGsに関連する新聞記事を選び、クラスで「この記事に注目！」に取り組んだ。個人で「こ

の記事に注目！」を書いた後は小グループ内→クラス全体で発表をさせた。発表後は、付箋に感想を書いたものを互いに貼らせた。

（関連記事）：世界のトイレでは、脱プラゴミ、障害者ぶつけた当事者の声



<児童の様子>

- ・クラスに置いてある新聞をじっくり読み、テーマに合った記事を真剣に探す姿が見られた。
- ・話し言葉と書き言葉の違いなどに気を付け、発表にふさわしい述べ方を習得しようとしていた。
- ・グループ内で共有することで、自分とは違った視点や考え方を知ることができて喜んでた。
- ・「もらって嬉しかったコメント」を発表し合うことで、相手が喜ぶコメントは何かを考えるようになった。

<成果>

- ・月ごとにテーマを設けることで、漠然と新聞を読むのではなく、目的意識を持って新聞を読むことができた。
- ・SDGsの関連記事を読むことで、SDGsへの児童の理解が深まり、SDGsが身近なものであると感じるようになった。

<課題>

- ・テーマによっては児童が選ぶ新聞記事が被ることがあり、内容が偏ってしまう。
- ・児童が自主的に関連記事を選び、クラスに話題提示をしているのではなく、SDGsの関連記事は毎回教員側から提示している。

7年生

【Everyday NIE】

日直が気になる新聞記事を切り抜き、帰りの会でスピーチ（選んだ理由・内容・感想）を行った。

【NIE交流会】

月に1回Everyday NIEを黒板に掲示し、記事に関する意見や、感想に対する意見や評価をふせんに書いて貼った。

【沖縄戦に注目】

道徳で沖縄戦について扱った後、終戦の日の記事を複数の新聞の切り抜きから選んで「この記事に注目」を行った。

<生徒の様子>

- ・休み時間を利用して、ワークシートを完成させていた。話題になっている記事や、自分の生活に関わりそうな記事など様々な視点で選んでいた。前日に家で記事を選んでくる生徒もいた。感想は一言で終わってしまうことが多かった。
- ・帰りの会で一度耳にしている記事なので、短い時間で行うことができ、気になる記事を選んで意見や感想を書きこむ姿が見られた。【NIE交流会】
- ・学習した内容が記事として取り上げられているので、実感を持って記事を読んでいた。【沖縄戦に注目】



<成果>

新聞が家にない生徒も、新聞を読むことに慣れてきた。ニュースなどで聞いただけの内容を深く知ろうとする姿がみられた。また普段気にしていない内容を知る機会ができ、視野を広げることができた。

<課題>

毎日のルーティーンになってしまい、理解が浅かったり一面的になったりしてしまうので、大人目目で修正や深めるための手立てが必要である。

9年生

【英語 フェイクニュース】

英語の授業でフェイクニュースを作らせた。新聞の記事からカラー写真のみを生徒に渡し、その写真から面白いニュースを作り、最後にニュースキャスターとレポーターとして発表させた。

<生徒の様子>

写真を元に楽しそうに話を作ることができていた班もあれば、創造的に話を作るのが難しさを感じた班もあった。しかし、発表の際にはどの班も面白いニュースを披露することができた。

<成果>

昨今、様々な媒体でフェイクニュースが拡散されることがある。ネット等の記事をうのみにせずクリティカルに考えながら記事を読めるようになることの大切さを共有することができた。

<課題>

英語での発表もあり、準備に時間がかかった。また、記録を残しながら定期的に行い自ら成長の振り返りができると良い。

【国語 地域紹介】

自分の地域の記事を探し、その記事を使い地域紹介しあう。紹介された紙面にはコメントをつける。

<生徒の様子>

大きな地域に住んでいる場合はすぐに記事が見つかり、楽しそうに作業していたが、なかなか記事が見つからない場合もあり、肩を落としている生徒もいた。一方で、自分の住んでいる地域の知らない面を知ることができて、意外そうに声をあげる生徒もいた。

<課題>

相当量の新聞を用意しないと、授業中に独力で地域の記事を探すことは難しかったようだ。

【公民教科書「第4部 私たちと国際社会」の学習における、新聞作成】

1時間目 世界規模で起こっている問題を挙げ、どの問題が最優先に取り組まれるべきかを全体で話し合う。



2時間目 新聞記事の書き方を学ぶ。興味関心のある分野についてグループに分かれ、図書館や新聞を活用して、関連する情報を集める。

3時間目 調べたことから記事の内容を決め、インターネットや図書館、新聞を活用して記事作成に必要な情報を集める。



4～7時間目 情報収集をし、記事を作成。



8時間目 作成した記事を読み合い、投書を書く。



作成した新聞は、学習の中で参考資料として活用する。

<生徒の様子>

- ・世界で起きている問題に興味・関心を持ち、積極的に調べ学習を進めていた。
- ・新聞記事を書くことが初めてだったため、載せる情報に優先順位をつけることや、わかりやすい表現を探すことに苦労していた。クラスに設置して

ある新聞を参考にしながら、レイアウトや文章表現を工夫していた。

- ・級友が書いた記事を楽しそうに読んでいた。

<成果>

- ・新聞記事への興味を深めることができた。
- ・どんな表現にすれば、相手に伝わりやすいかを工夫することができた。
- ・優先順位をつけて文章を書くことができるようになった。
- ・これから学習する内容「第4部 私たちと国際社会」に関する興味・関心を深めることができた。

<課題>

- ・インターネットでの調べ学習をする際、「どんな情報を知りたいか」を考えないまま調べ始め、記事に載せる情報を集めるまでに時間がかかる。
- ・生徒たち自身が、適切な表現をするため、語彙が少ないことを実感していた。
- ・記事を書くにあたり、事実と意見を分けて書くことに難しさを感じている生徒がいた。

4 おわりに

昨年度に引き続き、今年度も全学年がE S D活動の中にN I Eを取り入れ、新聞を使う活動を意識してきたため、この2年間は児童生徒が新聞に触れる機会や活用する機会が大幅に増えた。家庭に新聞がない児童・生徒も、(今年度から)各学級に新聞が置かれるようになったことで手に取りやすくなり、自ら新聞を読む姿がどの学年も見られるようになった。家庭でも、自分の気になる記事を切り抜き、記事について内容を要約したり、自分の考えをまとめたり、関連する出来事や物事について自ら調べてまとめたりするなど、自主学習に新聞を使う姿も見られた。新聞を身近なものとして抵抗なく読み、活用できる児童生徒が増えたことはこの2年間の大きな成果である。

一方で、やはり学校での新聞への関わりが単調なものになる様子が見られたり、教員の中でも新聞の扱いに苦手意識を持つ様子が見られたりしたので、次年度以降もさらに新聞を身近なものとするための工夫や、様々な活動の紹介をNIE担当から発信していくようにしたい。

(担当 教諭 大澤 寛子)

新聞の作成を通して地域の課題を探究する

1 はじめに

本校は平成29年度からNIE実践指定校となり、1学年の「総合的な探究の時間」における探究学習にNIEを導入している。新聞を活用した探究学習を始めてから4年目となるが、今年度は昨年度の経験を活かし、生徒がより幅広く新聞を活用し、地域の課題について探究することをねらいとして取り組んでいる。

2 実践概要

(1) 本校の現状

新聞を活用した探究学習は昨年度に引き続き4年目である。本年度も新聞を読み、新聞から得た情報をヒントにさらに情報を収集し、そこから見えてくる宮城県の課題の解決策を考え、オリジナル新聞を作成して発表する活動を行った。本校ではWi-Fi環境が整備されており、生徒たちも必要な情報があればインターネットを利用することが多い。

(2) 探究学習への取り入れ

本校では、以下の5点に関して重点的に探究活動を行った。

- 1) 情報の収集の仕方
- 2) 自分の視野の広げ方
- 3) 互いの意見や考えのまとめ方
- 4) 新聞記者を招いての講演会
- 5) オリジナル新聞作成と発表

総合的な探究の時間の活動として、各学級で8人程度のグループを作り、探究テーマを設定し、情報収集を行い、最終的に新聞として発行・発表を行った。まず6月までは情報

収集のやり方や新聞を読んでもらうということに主眼を置いて取り組んだ。新聞の読み比べ、情報収集をしながら興味・関心を持った社会問題に関する記事のスクラップノートを作成したり、「新聞記者を招いての講演会」を実施したりすることで、探究学習におけるテーマの設定や課題の絞り方に役立てることができた。さらに生徒たちも講演会を受けて、生徒たちは主体的に独自アンケートを取ったり、インターネットの情報だけでなく、書籍を利用して収集したり、直接取材のアポイントのお願いをして取材したりと活動を広げた。そして1月に行われる発表に合わせて、主に情報源として、また情報を発信する媒体の例として新聞を活用し、宮城県の課題や地域社会の課題について、自分たちの身近なことだと考え探究していくことにとっても繋がり、最後の発表でも各クラス、各グループとも探究学習の成果が見られた。

(3) 情報源としての新聞活用

新聞を読まない生徒が増えている現状を受けて、可能な限り多くの生徒が自由に新聞と触れ合い、日常的に新聞を目にする機会を増加させるため、昨年同様に4階1学年フロアに新聞コーナー(5月～)、昇降口前に1面記事コーナー(11月～)を設置し、探究学習に取り組む1学年の生徒がより自由に、より幅広く、またより深く新聞記事を通じて情報を得ることができるような環境づくりに努めた。昇降口前のコーナーには、前週の新聞の一面記事を月曜日から日曜日まで貼り出し、担当生徒たちが記事を読んで「考えたこと・感じたこと・疑問に思ったこと」などをざっくばらんに付箋に記入し貼り付け掲示すると

いう取組をした。昨年度に引き続き2年目のことで、生徒たちも普段読まない記事に対して、様々なことを感じているようだった。特に今年度は、台風の被害など災害による記事を取り上げることが多かった。生徒たち自身で何をすべきか考えさせられる機会を持ったと考えられる。



上図：昇降口前の一面新聞コーナー

(4) 「新聞記者を招いての講演会」の実施

本年度も新聞作成に当たり、テーマの絞り方や新聞の構成、情報の取材法などを河北新報社の新聞記者の方に話を伺うことで理解を深める機会を設けた。昨年度は10月頃の実施だったが、今年度は7月のテーマを設定する前に実施させてもらった。昨年度の結果から、取材・調査の方法や課題の絞り方や焦点の当て方が参考になった生徒が半数近くに上り、テーマを設定する前に実施すべきと判断してのことである。

(5) 自分たちの新聞を作って発表しよう

これまで述べてきた活動を通して、生徒たちは宮城県など地域の課題について探究活動を行った。生徒たちの活動も、インターネットに頼り切らずに、新聞・書籍で調べたり、アンケートを作成して調査したり、市役所や警察署などに直接インタビューを行い課題に迫ったりするなど、多岐にわたって取り組んでくれた。これも「新聞記者を招いての講演会」を経て、生徒たちが当事者の「声」を届けようという想いが芽生えたことが大きいように思える。そして、一人一人が各班の課題

について調べたことを共有し、オリジナルの新聞を作成してくれた。

1月14日に新聞発表のクラス予選会を実施し、21日にはクラス代表による全体発表会を行った。クラス予選では、各班の新聞について調べた内容を補足するようなグラフ・表などを描いたポスターを用いながら、テーマ、調査結果、提言などを簡潔に発表した。プレゼンテーション形式の発表をすることで新聞では表せないような視覚的な効果を取り入れるなど伝え方に工夫が見られた。さらに、生徒目線での課題に対する提言を創造することができたように感じている。

金賞を受賞したクラスの新聞



3 成果

昨年度は手探りで進めてきたが、今年度は昨年度の「新聞の完成品や先輩の残したもの」があるため、生徒もゴールがイメージしやすく積極的に活動してくれたように感じている。また今年度は太白区役所や河北新報社の協力もあり、生徒たちが地域の課題を明確化することもできたし、取材する際のアドバイスなどもいただきながら探究学習を進めることができたと感じている。最後に、生徒たちにはこれらの活動をきっかけに、探究心を持って地域の課題へ目を向けて、解決策を創出してくれることを願っている。(担当 教諭 阿部 正義)

楽しくNIE

1 はじめに

本校は、特進科、探究科、科学技術科の三学科を擁する学校であり、平成28年度からNIE実践指定校の認定を受け今年度で4年目となる。

初年度は、主に探究科の生徒たちに自分が興味を持つ記事だけでなく、時事的な話題にも触れさせながら、自ら考え、表現する力を育むことを目標に活動を行った。2年目はさらなる発展・拡充を図るため、探究科以外の学科や学校の委員会活動へNIE活動を取り入れた。3年目はそれまで行ってきた活動を踏襲しつつ、新たに河北新報新聞記事コンクールへの応募や新聞大会への参加、定期試験や大学入試対策の小論文指導への新聞記事活用を行った。4年目となる今年度は、高校1年生（探究科、科学技術科）対象にNIEに関する講演、長期休業中の課題に新聞記事を活用し、学年全体でNIE活動に取り組むことで、年間を通して継続的な活動を目指した。

2 実践の概要

2-1 NIEコーナーの設置

新聞が多く目の届くよう校舎1階の職員室前、探究科職員室前の2か所に「NIEコーナー」を設置している。日々届けられる新聞（河北新報、日経新聞、産経新聞、毎日新聞）や本校生に関する新聞記事、現在話題になっている記事を誰でも自由に閲覧できるようにした。



図1 各職員室前のNIEコーナー

2-2 NIEに関するアンケート

NIE活動を進めていくにあたって、生徒のNIEに対する興味関心を把握するために、1学年の生徒対象の

アンケートを行った。アンケートは9月と1月の計2回行った。

1回目と2回目ともに「自宅では新聞を購読していない」と回答したのが約7割、「新聞を全く読まない」と回答したのが1回目約6割だったのが2回目はやや減少し、「新聞を読む」と回答したのが約3割から約4割に増えた。「新聞を読むメリット」でもっとも多かったのは「社会事象に詳しくなる」「読解力が身に付く」「語彙力が身に付く」だった。一方「スポーツ面」を読むという回答が多く、今後は生徒たちが他の面にも目を通すよう教師側での工夫が必要である。

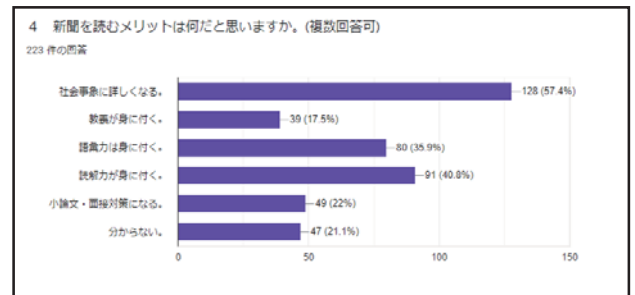


図2 NIEに関するアンケート

2-3 NIEに関する講演

生徒たちに新聞に対してもっと興味関心をもってもらうために、NIE委員会主催の講演を企画し、河北新報の丹野綾子さんに本校に来ていただいた。講演では本校生が載っている記事を例に出しながら、新聞とインターネットの違い、新聞を読むメリット、新聞の読み方等を話していただいた。講演後の生徒からの感想では、「今までは自分の興味があるところだけを読んでいたので、読み方を変えると興味がないところも面白く読めるようになるかもしれない」という感想があった。



図2 NIEに関する講演の様子

2-4 NIE 活動の目標設定

今年度も昨年度から引き続き、以下の目標を掲げ各授業でNIE活動に取り組んだ。

- ①新聞に親しむ。
- ②新聞を継続的に読むことにより、自分自身の興味・関心の幅を広げる。
- ③新聞の構成や役割を知り、情報を主体的かつ批判的に読み取る力を身につける。

2-5-1 1学年での取組(1年探究科、科学技術科)

小論文対策として、段階的に取り組むために夏と冬の長期休業中にNIEに関する課題を出した。

ワークシートは、A3用紙両面印刷をし、1時間程度でまとめられるものである。生徒は分からない語句などを端末でも調べ、要点を読み取りながら時事問題に対して考えを深めた。



図3 扱ったワークシート

2-5-2 国語での取組(探究科1年)

探究科1年では、12月中旬に今年1年を振り返るために、毎年日本漢字能力検定試験が発表する「今年の漢字」の記事を読ませ、生徒たちが中学校から高校に進学した1年間を振り返る機会をもたせた。

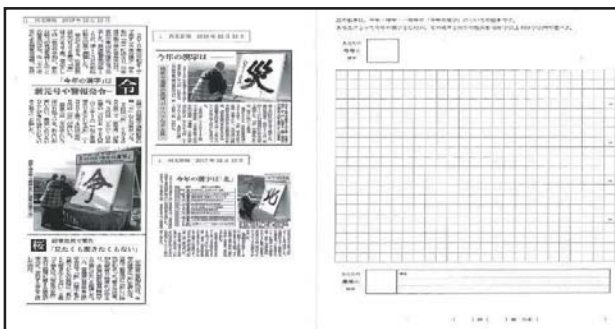


図4 扱ったワークシート

2-5-2 国語での取組(科学技術科3年)

探究科3年では、小論文対策の一環として新聞記事を使用した。来年実施されるオリンピックを前に東北の地が世界の人々に何をどのようにアピールすればよいかについて自分の意見をまとめた後、ペアワークで意見交換を行い、各自の考えの幅を広げた。

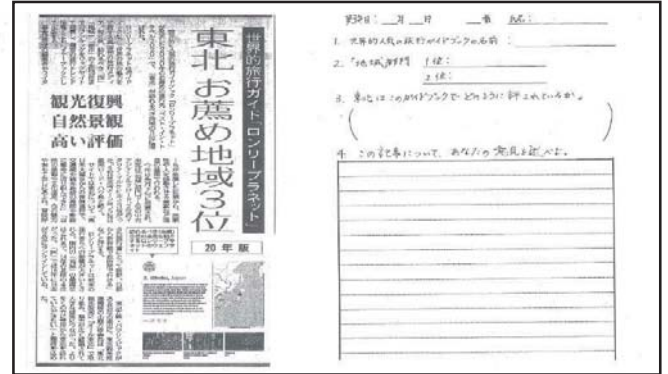


図5 扱ったワークシート

2-5-3 英語での取組(探究科1年)

コミュニケーション英語Iの授業では、教科書で扱ったトピックを深め、自分の事として捉えるために新聞記事を使用した。授業で扱ったトピックに点字に関する記事が出てきた。点字を意味する単語は生徒たちに馴染みがなかったが、校内で購読していた英字新聞に点字に関する英文記事があった。教師側でその英文記事を読むための質問を用意し、ワークシート形式で生徒に取り組ませた。



図6 扱ったワークシート

3 成果と課題

4年間のNIE活動を振り返ると、最初は限られたクラスのみでの実施であったが、年数を経る毎に、NIE活動に取り組む教員が増えた。活動が多岐にわたり、生徒たちが新聞に触れる機会が増えた。その結果、生徒たちが自分の意見を深める機会を多くもつことができた。今後はICTを活用して、校種を問わず他の実践校の生徒たちと相互に意見を交換する場をもちたい。

(文責 鈴木 理恵)

NIE 1年目の実践報告

1 はじめに

本校は今年度からNIE実践指定校となった。1年目は、通常の授業や校内研究、学校行事など、これまでの教育活動に新聞を活用する考え方で実践を始めた。

本校の校内研究では、算数科の指導を通して「自ら筋道を立てて考え、表現できる児童の育成」を主題に、考えを伝え合う活動を充実させている。

2 実践の概要

(1) 環境づくり

①NIEコーナー

図書室に毎日の新聞を立て掛け、誰でも読めるようにした。過去の新聞も新聞掛けや箱に保管し、教員が活用できるようにしている。コーナーには、自作のNIEプリントを不定期（時事的な記事を週に2回程度）で設置している。これらを月に一度校内放送でアナウンスしたり、取組に積極的な児童を紹介したりして、コーナーに足が向くように促している。



②NIEプリントの制作

社会を揺るがすニュースがあった時や、児童にとって身近な事柄が記事に取り上げられていた際に自作でNIEプリントを作成した。

これらは、図書室に不定期で設置している。（過去のプリントも封筒に保管し、取り組むことができる）

また、朝のモジュールを活用したスキルタイムにお



いて、全校でも同じ記事のプリントに取り組んでいる。（設間は低・中・高ごとに異なる）

児童が取り組んだプリントのコピーをNIE掲示板（全校児童が通る昇降口に設置）に貼り、他の児童の回答を見ることができるよう工夫をした。



NIEプリントを制作することは、教員にとっても新聞を身近に感じ、NIE活動を模索するきっかけになると考える。また、NIE担当だけが行うのではなく、全職員で取り組むことが全校で継続的に取り組むことにつながると考える。冬季休業期間に「NIEプリント作成研修」という現職教育を行った。

(2) 行事との関連

-NIE×いじめゼロキャンペーン-

仙台市では、11月は「いじめゼロキャンペーン」を行っている。そこで、過去の新聞記事を活用して、いじめに関するNIEプリントに全校で取り組んだ。なお、NIEプリントの制作では、河北新報データベースの検索機能を活用し、児童の実態を踏まえて内容を精査した。

プリントのコピーはNIE掲示板に貼るとともに、児童自らがいじめ根絶に訴える内容を校内放送で伝える

など、学んだことを日常生活に生かすことができた。



(3) 授業や校内研究との関連

①3年生

社会科「かわってきた人々のくらし」の小単元は、道の変化とともに人々の生活も変わってきていることに気付く学習である。調べ学習では家電製品等を扱うことから、実感を伴わない児童が見られた。そこで、まとめにおいて、今年度(2019年12月31日付け朝日新聞29面「ゆ

く品々くる時代)」の新聞記事を活用した。自分たちのくらしや未来の生活に目を向けさせるきっかけとなり、「生活をよりよくするために道具は変わってきたが、なくなるのはさみしい。自分たちが大人になったときにも良いところは残ってほしい。」と、学習内容を自分事として捉える振り返りを書く児童が多く見られた。

②4年生

社会科「きょう土を開いた人」の単元では、鎌田三之助を取り上げ、先人の功績による地域の発展について学習を行った。学習の最後に、「鹿島台は現在も災害に強いまちづくりを進めている。」という現在進行形の形でまとめを行ったが、「もう災害は起こらないはずなのになぜ現在進行形なのか。」と疑問に持つ児童もいた。そこで、2019年に起きた台風19号による吉田川氾濫の記事を活用した。タイムリーな記事を活用したことで、過去と未来を結び付け、今もなお災害と向き合っているのだと理解することにつながった。また、干拓のための環境や道具等の条件が整っていない時代における鎌田三之助の功績のすばらしさを改めて実感することにつながった。

③5年生

総合的な学習の時間で地球温暖化などの環境問題や、激甚化する気象災害について学習を行った。東日本大震災についても学習し、被害の大きさや悲惨さを学んだ。その中で、石巻市の門脇小学校に関して、住民の声(2019年2月14日河北新報)、当時在籍していた児童の声(2019年11月4日河北新報)、石巻市の考え(2019年8月10日河北新報)、部分解体が始まったという記事(2019年12月3日)の4つの記事を4日に分けて読ませ、「旧門脇小は震災遺構として部分保存すべきか、全体保存すべきか」について考えさせた。いろいろな立場から旧門脇小の保存問題についての考えを知ることで、「震災の教訓を伝承していく」ということが、いかに難しいかを感じることができた。

また、校内研究を行っている算数では、単元の終わりにA5サイズの「算数はがき新聞」を書かせた。内容は、

- i この単元で「一番勉強になったこと」
- ii iで選んだ学びが「なぜそうなるのか」
- iii iの学びが「どんな時に役立ちそうか」

の3つである。

はがき新聞を作成することで、単元内での学習内容や学習方法を俯瞰し、整理することで学びを深めることができた。学習内容の有用性や有益性、発展性などについてメタ認知を働かせて考察することで、数学的に考えることを楽しみ、学習意欲を高めることができていた。



3 成果と課題

(1) 成果

- ・自主学習で新聞記事に関する感想を書いたり、河北新報のwebページからNIEプリントをダウンロードして取り組んだり、新聞を学習に取り入れる児童が一部見られるようになった。



- ・行事と関連させたNIE教育の取組は、その行事への意識を高めさせていた。防災訓練などでも来年度実施をしたい。

- ・環境づくりとして図書室にNIEコーナーを設置したが、スキルタイムでプリントに取り組むことで、多くの児童が新聞に触れる機会が与えられた。

(2) 課題

- ・児童にどのような力を身に付けさせたいのか、漠然として実践したため、計画性に欠く実践が多かった。次年度は、実態をアンケートで把握したり、学力調査などの結果分析を活用したりして、「どのような変容が見られたのか」を明確にしたい。

- ・学習指導要領が示す資質、能力を目指すべきではあるが、教科と関連させた実践を一層充実させ、深い学びにつなげたい。

- ・NIEコーナーだけではなく、新聞紙自体を手に取りやすい環境をつくることで、児童は与えられた記事だけでなく、自分自身で活用できるようになると考える。

環境づくりについて、次年度一層模索したい。

(担当 教諭 佐藤慶一)

NIE 1年目の実践報告

1 はじめに

本校は、今年度からNIE実践指定校の認定を受けている。また、今年度は、小学校社会科教育研究協議会東北大会の会場校となっていたため、社会科を中心に新聞を活用した学習の取組を行ってきた。

2 実践の概要

〈5年〉領土問題での活用

学習内容と今の社会の現状を結びつけるために、新聞を活用した。

特に、領土問題については、昨年度から5学年の学習内容に入っているが、国政状況が刻々と変化する中での学習になる。そこで、学習した内容と関連する最新の国内外の情報について、データベースを利用して適切な新聞記事を見付け、児童に提示した。児童は、現状を把握することで、より深く社会的事象を考える姿が見られた。

新聞記事は、5学年の廊下に掲示し、児童が目にすることができるようにした。



〈6年〉模擬選挙での活用

民主主義や選挙の仕組みを理解させるために、実際の市議会選挙を模擬的に行った。授業では、

初めに、候補者の名前を書いていき、この中から1名の候補者を選ぶように伝えた。しかし、児童は、「誰に投票したら良いか分からない。」と口々に話した。しばらくすると、児童の中から「新聞に詳しい情報が載っているよ」という発言があった。そこで、「実際に調べてみよう」と促し、該当する日の新聞を与えた。すると、候補者の情報が整理されて掲載されている紙面があることに気づき、候補者の主張をじっくりと読み取る姿が見られた。

次に、自分が選んだ候補者とその理由について発表させた。児童は、悩みながらも新聞から読み取った情報を根拠に、自分の考えをしっかりと説明することができた。

最後に、翌日に改めて選挙を行うことを伝えると、その日の自主学習で候補者のより詳しい情報を新聞から探してまとめてくる様子が見られた。

さらに、新聞のレイアウトに着目し、どの候補者も公平に扱うように工夫されていることに気付く児童もいた。

このように、新聞を活用することで、選挙について興味関心を高め、選挙の仕組みを理解させる一助となった。

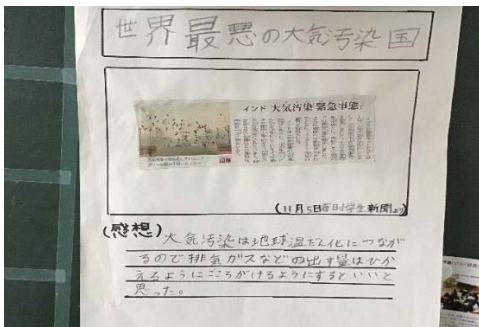


〈6年〉新聞でスピーチ

朝の会で自分の興味を持った新聞記事を題材として話すこととした。教室には、1週間分の新聞を置き、発表する前日までに記事を切り抜き、感想を書かせた。

はじめは、どのような記事を選び、何を書いたら良いか悩む姿が見られたが、次第に記事から読み取ったことを自分の言葉で伝えようとする姿が見られた。また、以前よりも新聞やニュースに関心を持つようになった。

発表するために作成したワークシートは、クラス内に掲示し、児童がめくって見返すことができるようにした。



〈6年〉政治単元での活用

今年度、6学年の社会科は、新学習指導要領を先行実施したため、政治単元から学習を始めた。その後、歴史単元において日本国憲法制定を含む戦後日本の諸改革について学んだ際、児童は、戦後の日本で制定された憲法が現代社会のもとになっていることに気付いた。

そこで、現代社会における諸問題についての記事を提示し、日本国憲法とのつながりに着目させた。日本国憲法の三大原則とのつながりを考えながら記事を読むことで、現代社会が平和で民主的な国家を目指して、今も発展し続けていることを捉えさせることができた。



〈特別支援学級〉ことばの貯金箱

特別支援学級に在籍する高学年児童2名を対象に、ことばの貯金箱を行った。

普段、新聞は読まないことが多いということで、始めはどんな言葉を集めたらよいか迷う姿が見られた。活動を進めていく中で、「チャリーン」「いいね！」の言葉が飛び交うと、友達の声掛けに自信を付け、もっと集めようと新聞の隅まで目を配り、活動する姿が見られるようになった。

児童は、「普段新聞を見ないが、新聞にはたくさんの素敵な言葉が使われていたことに気付いた。」「きれいな写真も載っていて、もっと新聞を読みたいくなった。」と述べていた。

このように、新聞を使ってたくさんの言葉に触れさせる機会を持つことで、児童の中の語彙を増やし、よりよいコミュニケーションを取るための一つの方法になることが分かった。



3 成果と課題

(1) 成果

- ・データベースを利用して記事を検索したことで、教師が効率的に資料を見付けられた。
- ・新聞やニュースに対して興味が高まった。
- ・学習内容と関連付けた新聞記事を提示することで、学習内容を身近に感じさせるとともに社会の問題を自分事として捉えさせることができたので、他教科での活用場面を吟味していきたい。

(2) 課題

- ・社会科以外での新聞活用が少なかった。
- ・児童が新聞を身近に感じられるように、新聞コーナーの設置等工夫が必要である。
- ・新聞を使った学習の良さや実践事例などが共有できる職員研修を行いたい。

(担当 教諭 佐藤 由依)

NIEとの連携・活用を目指した授業

～リテラシー能力と社会的関心の育成～

1 はじめに

今年度で創立から44年を数える本校だが、平成28年度から東日本初の「災害科学科」を新設し、昨年度、初の卒業生を出すことが出来た。

現在も各学年の「7組」として、普通科6クラスと共に防災・減災教育に取り組んでいる。

実は、本校は平成25・26年度にも実践指定校として参加させて頂いてはいたのだが、今年度、再び指定校として認定された為、地歴・公民科を中心に全ての授業でNIEへの参加を呼び掛けた。

2 各科目での取り組み

職員室入り口に、提供された6社の新聞を分けてワゴンに入れ、いつでも先生方が新聞を活用出来るように設置したところ、生徒の理解を助けたり、イメージ付ける為等々の目的で、幾つかの科目で利用された。以下、諸先生方による、主だった実践例を挙げる。

(1) 3年生 公民科「時事問題研究」



本校独自の設定科目で、公務員希望者を中心に選択している。主に政治・経済の内容を演習問題を軸に総合的に掘り下げて学んでいる為、新聞記事を題材にして内容の理解に役立つことも多い。

今年度は2回に渡って、6社の「同じ記事」への捉え方及び取り上げ方・考え方等、各社毎の「違い」を見つけることによって、社会に対する幅広い横断的な視点

を持たせることを目標に、読み比べさせた。

生徒たちは6紙の「同じ記事」を各自でピックアップし、その差異を分析することで各社毎の特徴やスタンスを掴いながらも見分けていた。

各社の読み比べを通じて事実関係等、概ね同じ内容になっている点に加え、多面的な視角・多様な認識が有ることに気付かせることには一定の成果を得たが、その記事及び社会的事象に対する生徒個人の独自の視点・解釈はまだ未熟であり、回数を重ねて練習していく必要性を痛感した。



※39人の選択授業で6紙の読み比べによる、多角的視点・多面的思考の涵養を試みた。



生徒によっては家庭で新聞を購読していない者も少なくはなく、テレビやネットニュースで済ませている現状も有ることから、日頃から新聞に目を通し、慣れ親しむように水を向けるべく、今後も機会を見て実施し、生徒たちの思考力に「深み」を持たせるようにしたい。

(2) 3年生 小論文対策

3学年の小論文対策として新聞を利用した。近年、大学入試の小論文に於いて時事問題が頻繁に問われるが、その際、生徒の情報収集に利用されるのがスマートフォンであり、ネットのニュースが中心となっている。自分の興味が有る事柄だけに触れる為、情報が偏っていて時事問題に於いても、比較検討が出来ていない。そこで、複数の新聞を利用することで比較検討出来、同じニュースでも新聞によって捉え方が有るということ意識させた。

又、近年では文章を読み、要約してから論じる小論文試験も多く有る為、新聞から、その日のニュースを読ませ400字・200字・100字、と段階を追って要約する練習を行わせた。初めはなかなか要点を纏めることが困難だったが、練習を重ねる毎に文中のポイント及び要点を掴めるようになっていった。

(3)「新聞の読み方」講座

令和2年1月9日(木)、河北新報社より須藤 宜毅様をお招きし、本校1年生280名を対象に「新聞の読み方に関する講座」を行って頂いた。講座では特に震災に於ける新聞報道、並びに震災後の新聞の役割等について講話して頂いた。

震災直後は新聞の作成が困難になったこと、又、安否情報・生活関連情報を記載し、回し読みが出来る・何度も読み返すことが出来る、という新聞ならではの利点から多くの人々に新聞が求められる状況になったそうである。



又、震災後はワークショップ「むすび塾」を開催して地域の実情に合わせた、より深い内容の防災情報の提供を行っていることや、震災を未来に伝え、将来的な

防災・減災に繋げていくことを目的とした「備えの手紙」という企画等を行っていることも伺った。

生徒たちは熱心に講話を聞き、後にとった感想文には、「テレビやインターネットが使うことが出来ない災害時には何度も読み返すことが出来、写真等によって周りの様子が分かる新聞は大切だと感じた」、「震災で家や大切な人たちを失くした祖父母が避難所で有り難そうに新聞を読んでいた姿を見てきたので、今回の講話を聴けて良かった」等と書かれており、災害時に於ける新聞報道の大きな役割や、防災・減災の為の新聞報道について、しっかりと受け止め、学んだようである。



※本校の講堂「iRis Hall」にて行われた。



3 終わりに

日々の授業に、どのような形で新聞を取り入れ、活用するか。指定校になると義務感ばかりが先走りがちだが、目的と手段を逆転すること無く、大学を始めとする受験・進学指導に全校体制でNIEに取り組むことが急務の課題と感じている。

(担当 教諭 幸野 久嗣)

NIE活動を取り入れた「総合的な探究の時間」の指導の一試み ～SDGsと関連づけた新聞作成をとおして～

1 はじめに

本校は今年度(令和元年度)からNIE実践校と指定された。高校の場合、NIEの活動は教科・科目で実践することが多いのかもしれない。当初、社会科はもちろん、英語や国語でも活用できると考えていたが、対象として考えていた一学年では教科で新聞を使うという話は出て来なかった。

一方、今年度入学生からは「総合的な学習の時間」は「総合的な探究の時間」としてより「探究型」の学びが求められている。「探究型」の先進校である京都市立堀川高校の元校長荒瀬克美先生の話のを伺うたびに、本格的な「探究型」学習の難しさを感じていた。堀川高校では「探究科」の生徒に3年かけて探究する内容を考えさせている。「どんな突飛な発想でも常識とは合わない発想でも、教員がそれを受け止め、自力で飛べるように翼の角度を変えたりしながら揚力をつけてやる。そうやって3年生の発表に漕ぎつけている(例えば、第一学習社2018年度「小論文講習会」での講話)という部分に刺激を受け、「総合的な探究の時間」で取り組むのが良いという合意に至り、スタートした。

2 実践の概要

(1) テーマ設定

今年度入学生から総合的な探究の時間では、できることからやろうということでテーマ設定をした形で「探究型」の学習をすることにした。そのテーマは「SDGs」である。「SDGs」は2015年9月の国連サミットで採択され、各国が2030年までの15年間で達成するために掲げた目標のことだ。しかし、小中学校では「SDGs」への取り組みが聞かれるものの、高校での取り組みは心許なかった。例えば、現代社会、政治経済などの教科書には正面切って取り上げられていない。資料集にも小さく取り上げられているだけである(例えば、『政治経済資料2019』、とうほう)。

では企業ではどうだろうか。企業によっては「SDGs」をビジネスチャンスと捉えているようである。

(例えば、「その技術、世界が待ってますーSDGsはビジネスチャンスー」、JICA)。そうであれば、いずれにせよ企業で働くであろう生徒たちは「SDGs」を理解しておいたほうが良いのではと考えた。

そして、指導にあたっては生徒が学ぶだけでなく、生徒・教員全員で共に「SDGs」について学ぶこととし、教員は「教え手」ではなく、「共に学ぶ大人」という位置づけで始めることにした。この方針のもと、まず4月から9月の前半は「SDGs」の理解を第一の目標として、3年間の計画を考えた。

(2) 3年間の計画等について

① 各学年の目標

- 1年生の目標： 「SDGs」を通して視野を広げ、社会的出来事に関心を持つ
- 2年生の目標： 1年生の時に関心を持った社会的出来事をさらに掘り下げる出来事を複数の視点から考える
- 3年生の目標： 2年生の時に掘り下げた内容と自分の進路とを結びつけて考える

② 今年度(1年生)の計画

前期：「SDGs」の理解→国連広報センターによるパンフレット、双六等の活用(=写真=)

後期：新聞記事活用→記事

から「SDGs」を考え、「自分新聞」を作成

(3) 今年度の新聞の活用

NIE実践校として本校に新聞が配達されはじめたのは11月からだった。毎日6社の新聞を届けていただいているが、当初のイメージは同一日の新聞を生徒人数分届けていただけるものと思っていたので、生徒全員に同じ環境で数日分を読みこませ、そこから「SDGs」と結びつけて理解させようとしていた。しかし、それが規定上無理だったので、特定の一日の「河北新報」を全員分購入し、その新聞を活用して「SDGs」の理解を深めることとした。流れは以下のとおりである。

① 「新聞の隅から隅まで読む」

多くの生徒は新聞を読む習慣がない。言うまでもなく、自宅で新聞を取っていないからである。そこで、まず新聞記事を読みこなすことから始めた。

クラスごと全員で新聞を読み、感想を述べ合う。ここでは、教員はグループ分けのみ行い、感想等



には口を挟まないようにした。まったくの『読みっぱなしでいいよ』というスタンスで臨んだ。

- ② 「SDGsを踏まえ、新聞記事から自分がとりあげる記事を決める」

前期で学んだ「SDGs」を思い起こしながら、記事を読み、17の目標のどれに該当するか。また、17の目標の他の目標には該当しないのか。一つの記事に対して「SDGs」の複数の目標を関連づけさせた。

- ③ 「関連づける記事を特定したら、「SDGs」と関連づけながら『個人新聞』を作成する」

単に記事と「SDGs」の目標とを結びつけた



けではそこで満足して終わってしまう。そこで、自分で新聞を作成し、新聞記事とSDGs」

とを結びつけさせ、より理解と定着を図ろうと考えた（=写真=）。

- ④ 「『自分新聞』を持ち寄り、数名のグループとして模造紙に『グループ新聞』を作成する」

自分一人の理解では独りよがりの理解かも知れない。そこで、グループ毎に複数名で新聞を作成しながら理解を深めるようにした。

取り上げる記事が同じでも違っていても、他者の視点を理解しながら自分の視点の足りない



ところを押さえ、モノの見方、理解を深めていくことを目的にした。

（=写真=）

もちろん、『個人新聞』への取り組みと出来映えによって『グループ新聞』の出来は左右されるが。

- ⑤ 「グループごとに『グループ新聞』の内容を発表し、内容をさらに深めさせると共に、他グループの発表から、さらに自分たちの視点の足りないところを押さえ、モノの見方、理解を深めていく」発表することでさらに内容理解が深まるようになった。そして、他グループの発表により、一層理解を広げることが出来た。

質問や討論でさらに内容を深めることも可能かも知れないが、残念ながら本年度は時間の関係でそこまでは出来なかった。

- ⑥ 「新聞記者の方に新聞の作り方、こう読んで欲し

いという想いをうかがう」

どこの新聞社にお願いしても記者の方が作り方、読み方、注意して欲しい点を説明して下さい。本校では12月5日に河北新報社防災・教育室丹野綾子さんにお話をお願いした。（=写真=）



作り手側の意図を理解した上で新聞を読むことを狙いとした。

3 今年度のまとめと次年度に向けて

もっと新聞を入手し、せめて毎週新しい記事を読ませるべきだったと反省している。本校は一学年が280名のため、新聞社側としても毎週これだけの部数を提供することは難しいのかも知れない。しかし、「新聞」である。今年度は特定の日付の新聞だけを読み尽くす形になってしまいが、次年度以降は何か「新聞」に触れさせたいと考えている。

また、日程に追われ、とりあえずまとめたというような「自分新聞」も散見された。時間と教員の手をもっとかけるべきだったと思う。

次年度に向けては前述のように、2年生では1年生の時に関心を持った社会的出来事をさらに掘り下げさせようと計画している。また、出来事を複数の視点から考えることを目標にしたいと考えている。新聞を活用し、生徒が自主的・能動的に社会の出来事に対応できる力をつけさせていきたいと考えている。

（文責 小林 治教諭）

- （付） 毎日届けて頂いている6紙は図書館で生徒・教員全てに読んでもらえるようにしている。



原則1か月分を展示し、1か月を過ぎた分は他室で補完するようにしている。

V 宮城県NIE委員会 30周年記念座談会

「ともに歩む あすのために」

出席者	宮城県NIE委員会会長（名取市立増田中学校長）	鈴木 一史さん
	仙台市立岡田小学校長	阿部 謙さん
	仙台市教育委員会教育指導課指導主事	野中 映里さん
	名取高等学校（令和元、2年度実践指定校）教諭	小林 治さん
	東北福祉大学教育学部3年	小野ひよりさん
	宮城県NIE委員会コーディネーター	島山 厚子さん
進行	河北新報社 防災・教育室長	鈴木 淳さん

鈴木淳 本日はお集まりいただき、ありがとうございます。宮城県NIE委員会は平成元（1989）年7月に日本初のNIE推進団体として設立され、本年度で30周年になります。設立10年目の平成10（1998）年には第3回NIE全国大会を仙台で開催しています。全国から注目されて始まり、さきがけとして参考にされていた時期があったのに、30年の間に活動がマンネリ化したのか、停滞が感じられます。教育現場の声を参考に、再び活動を盛んなものにしていきたいと思えます。新しい学習指導要領が令和2（2020）年度に小学校、3年度中学校、4年度高校と順次取り入れられ、新聞を使った活動が増えていきます。次の10年、20年に向けて、具体的にどのように生かしていったらいいのか忌憚のないご意見をお聞かせください。

最初に、発足当時の状況や経緯を伺います。教育現場の受け止めはどんなものだったのでしょうか？当初から関わっていらっしゃる阿部先生に口火を切っていただきましょう。

阿部 今お話がありましたように、平成元年に宮城県NIE委員会の推進委員会が立ち上がりました。私は元年採用で、仙台市立八幡小学校の新任教師でした。NIE事務局で以前コーディネーターをされていた菊地俊和先生が当時、仙台市立芦口小学校の校長先生で、八幡小学校の教務主任の三浦恭夫先生が特活（特別活動）研で新聞活用に力を入れていた。このお二人が中心となって始まったという具合でした。平成元年の7月でしたか、全国新聞教育研究会（全新研）仙台大会がパルシティ仙台で開かれ、私は特活部会だったものですから会場の椅子運びを手伝いました。この全新研で台原中学校の須藤由子先生のNIEの授業公開を見たのが、NIEの授業との出会いでした。

平成元年は初任者研修が始まった年です。私は課

題研究にNIEを取り上げ、三浦先生の指導を仰ぎながら取り組みました。

芦口小と八幡小が中心だったので、推進委員会の中の小学校部会は両校の9人で始まりました。このころは今と違って河北新報社さん独自の研究指定校でした。河北さんから補助をいただいて、元年度と2年度は芦口小が研究指定校、八幡小は研究グループで、両校とも、平成2年度に授業公開を初めて行いました。きょうお持ちしたこの資料は、八幡小の取り組みを製本したものです。2年度は部会の人数も10人、20人と増えたので、自分がやったことをそれぞれの学校で刷って持ち寄って、綴じました。みんな手弁当での作業で、今思えば、あのころが一番熱かったかもしれません。西村敏郎校長先生がコーディネーターになったときに、100人ぐらいの規模になったのですが、名簿では100人いるけれど顔を見るのは20人ぐらい、という状況がずっと続いていきました。4年度以降は補助をいただいて活動報告を製本し、全国大会の年に10年分をまとめ、「やってみようNIE」という冊子を作りました。ともかく、自分たちは新聞が好きで、使っている人はいっぱいいて、それをちゃんとNIEとして



宮城県のNIEの黎明期から未来まで、さまざまな意見やエピソードが語られた座談会＝令和2年1月9日

研究していこうと始めたわけです。元年以前のことは畠山先生から願います。

ただ、周囲の認知度はほぼありませんでした。私の初任研の発表は特活の中で行ったのですが、「ここ、特活だって分かってる？」と言われてましたし、「ニー」とか「ニエ」と呼ばれることが多かったので「エヌアイイー」

と呼ばれることを最初の目標にしようとみんなで話したりしました。平成4年でしたか、社会科の全国大会が小松島小学校であり、小松島小の先生が新聞を使った授業を発表しました。初めは社会科を中心に活動がなされたという感じでした。あと、新聞活用の発表をすると「教育課程のどこに位置づけられているの？」とよく言われましたね。最初は「学級活動です」と言ったりして、なかなか教科ですと主張しづらいところがありました。

畠山 私はその前年度、組織づくりのあたりに関わりました。私のNIEとの出会いは昭和63年です。仙台市立東二番丁小学校（東二小）に勤務していて、佐藤清哉校長先生が小学校特別活動部会の会長さんでした。当時、中学校は特活部会の中に新聞委員会があって活発に活動していました。中学校部会から「全新研をするので小学校部会にも新聞部会を設けてほしい」と言われたようで小学校特別活動部会の中に新聞部会をつくりました。その時副部会長をなさったのが、さきほどお名前が出た菊地俊和校長先生で、東二小で会議が持たれ、菊地先生がまとめ役となって組織づくりが進められました。

東二小は歴史のある学校ですが、昭和62年12月に校舎を改築し、仙台市初のオープンスペースがある新しい学校として生まれ変わりました。オープンスペースを生かした個別化、個性化教育に取り組み、それを仙台から発信できる学校として、個に応じ個を生かす学習指導を研究していました。それは今思うと、課題解決学習とか探究型学習そのものだったんですね。子どもたちが課題を持って調べたことを最終的にまとめる。そのまとめ方を新聞で表現する取り組みでした。NIEの前段の新聞をなんとか取り入れようという動きも合わさって、東二小は新聞作りに熱心に取り組みました。



阿部 謙さん

当時は、新聞用紙をどうするか、どういう新聞用紙なら子ども子供たちが書きやすいかを校内で研究しました。お持ちしたこれは今でも使われている新聞用紙です。これが当時のものに近いんです。これはB4判ですが、当時はB4判とB5判の2種類を作りました。今は一マス5^ミ角だと思いますが、当時は4.5^ミ角が、子どもたちが書きやすく使いやすそうだと^ミ単位で検討

しました。1冊30枚ぐらいで、B5判が100円、B4判が200円で子どもたちに購入してもらって、自由に書かせました。他の学校から「欲しい」と言われるようになり、みやぎ生協に版を売って、これが今でも続いています。1人が1冊持つことで、個別に調べる、イラストなど得意な手法で作れるなど、個に応じ個を生かすことにつながりました。最初は新聞づくりがスタートし、新聞を授業でどのように生かしたらよいかというところへ発展していったと言えると思います。



畠山 厚子さん

鈴木淳 10年を経て平成10年に第3回NIE大会が仙台で開かれたころの状況を教えてください。

阿部 平成8年度からNIE全国大会として開かれるようになりました。河北新報社社長の一力一夫さんが日本新聞協会でNIE担当（初代NIE委員長）をされていたこともあって、一力さんは全国でいち早く宮城県で推進団体を立ち上げたようです。第1回の東京に続く第2回は宮城・仙台のはずと思っていたようですが、広島で開催され、満を持して第3回が仙台開催となりました。

小学校部会では、今、仙台市立七北田小学校校長の相澤経利先生が当時虹の丘小学校で、W杯に向けたクラスの取り組みを発表し、「やってみようNIE」をご紹介しました。研究指定校の桂小では大風秀康先生が発表しました。全国からたくさんの方が参加があり、ネットワークでつながりたいなどと盛り上がった大会でした。

鈴木淳 当時は先進地だったんですね。

阿部 最初の10年間は、推進委員会がない県も多かった。新聞社と学校関係者が協力する例は少な

く、先進地として参考にされました。一方で、ほんの一部の先生でやっていた。痛し痒しの部分もあります。

鈴木淳 「やってみようNIE」を見ると、当時から現在まで活動されている方がたくさんいらっしゃいます。その後、後進がうまく育たなかったのでしょうか。皆さんは現状をどうお考えでしょうか。

野中 今年、仙台市教委のNIE担当として関わらせていただいています。各校の授業を見ていると、過去の実践指定校の取り組みは、今の教育活動の中にも根付いていると感じます。NIEの研究大会や授業公開、実践発表などからヒントを持ち帰り、各校の実態に合わせて生かしている。例えば「ことばの貯金箱」。今、語彙力の向上が注目されています。以前、七北田小の今藤先生が語彙力を身に付ける一方法として実践を紹介されていましたが、先生方も多くの刺激を受けたようです。新聞を使える環境が整ってなくても自分の学校で似たような実践するにはどうすればいいか考えていました。

小林 高校では、組織的な取り組みとなると、実践指定校の活動ぐらいかもかもしれません。本校で全く新聞を使っていないわけではありません。二つ挙げ



小林 治さん

ます。朝のホームルームの時間に共通題材として新聞記事を配って読ませる先生は多いと思います。学年主導で、記事選択も教師の関心で選ぶという場合がほとんどでしょう。簡単な設問を付け、読んで終わりとならないようにすることもあります。

もう一つ、授業の中で単元に関わる新聞記事を持ってきて、「きのう、こんなことがあったよね」と見せて導入にすることもあります。ただ、学校単位でやっているかと聞かれますと…。

新聞を購読している家庭は少ないです。教員も年齢層によっては少ないという状況はあります。私は新聞が好きなので、持って行って、掲示して見せていますけれど。

鈴木淳 「新聞が好きだ」という先生に関わっていただいてこれまでやってこられました。次代は厳しいと、NIEの部署に来て私は4年目ですが、

そう思います。そういう中であって、小野さんはどうやって新聞が好きになったのですか？

小野 私はNIE全国大会が仙台で開かれた平成10年生まれです。気仙沼の自宅では河北新報と三陸新報を取っていましたが、読むのは主に父と祖父で、私自身が新聞を手にすることはあまりありませんでした。大学で初めてNIEを知り、自分は新聞を取り入れた教育を受けてきたかなと振り返っても



小野ひよりさん

頭に浮かばず…。帰省した折に記憶とクローゼットの中を探り出してみたところ、小学6年生と高校生のときに実践してきたものがたくさん出てきたので持ってきました。東日本大震災のとき、私は小学6年生

でしたが、これは前年6月に、東北大学の今村文彦教授に地震のメカニズムを教わって、メモを取り、調べて、分かりやすいように工夫してまとめた新聞です。この他にも、総合的な学習の時間や社会科で学んだことなどをあまり定型に縛られずに、自由にまとめ、1年間で17枚作りました。

進学した高校は、この間までNIE実践指定校だった気仙沼高校です。私は「国語科週刊課題」をやりました。国語科の先生が記事を用意し、先生から、「この熟語の意味を述べよ」「この部分の『それ』は何を指しているか」など、国語科のテストのようなものを出され、辞書で調べたり添削してもらったりして学びました。自分が気付いていなかっただけで、いろんなところで新聞を活用していたんだと分かりました。

鈴木一 私も12月の研究大会で小中高の実践を聞き、すごいと思いました。私は社会科教師ですが、いろんな教科にも志教育にもたくさん活用できるんだと気づき、学校で先生方にも話しました。河北新報朝刊に週1回(火曜)掲載される「NIEのページ」もいい内容です。あのページだけでも授業に使える。まだまだ広がりがあるなと思った1年でした。私も学校で、自校の生徒が駅伝で活躍した記事などを校内に貼りますし、「こんな記事あったよ」と朝、騒ぐようにしています。

鈴木 淳 NIEのページが充実していると伺い、ありがたいです。次は課題について考えてみたいと思います。

野中 新学習指導要領の全面実施にあたり、新聞の使い方も転換期になるのかなと思います。内容を理解する、調べたことをただ新聞にまとめるといった学びから、「書かれている内容に対して、あなたはどうか考える？」と問う授業になっていきます。いろいろな資料や文章を突き合わせて対話しながら新しいものを作り上げる。こうした学習をうまく取り入れていくためのアイデアや手助けが必要になってくると考えています。

畠山 新聞を読まない家庭と、読まない先生が増えています。この事実が停滞につながっていると私は思います。私も現役時代、高学年なら内閣改造があればすぐ記事を配り、内閣ってこういうもので、とすぐ授業に取り入れた。新しい情報を伝えられる新聞の良さを実感してきました。新聞を読んでいる人はそれが分かるんです。自然に、これは授業に取り入れられるなど感じてきた。さきほど新聞作りの話題がありましたが、新聞をまとめる楽しさが、残念ながら読むことにつながっていない。そこが問題なのではと思います。どうすれば読むことにつながるのか。12月の研究大会の実践発表で、「学校が新聞と出合わせる場になるしかない」という話がありましたが、まさにそれを感じているところです。

鈴木 一 保護者と新聞との出会いも大事になります。これから課題を考えていく上で、大事な視点の一つになっていくと思っています。

畠山 30代、40代の保護者に働き掛けることが大事です。そこは新聞社さんに頑張ってもらいたいですね。

鈴木 淳 国際学習到達度調査(PISA)で日本の15歳の読解力が低下し、懸念されています。どういった対策が有効でしょうか？

野中 対策として必要なことを三つ、考えてみました。一つは、PISAが求めている「読解力」の定義を、教える側がしっかり押さえて授業をすること。二つ目として、デジタル機器を使った解答に慣れる環境整備。三つ目は、求められている力を子ども

にも自覚させる指導。

ここでの「読解力」は、自らの目標を達成のためにテキストを理解し、利用し、評価し、熟考し、取り組む力を指します。ここで言うテキストとは、本や新聞はもとよりウェブサイト、投稿文など、子どもたちが触れているすべての情報が含まれます。こうした読解力を小中高の指導者がどれだけ意識して指導しているか。今回の調査では「理解すること自体の力は下がっていません。今までも課題となっている力が問われ



野中 映里さん

ているのです。そうした力の育成を意識して指導しているか。そこを立ち止まって考えたい。新学習指導要領の国語科には、「情報の扱い方」についてや「考えの形成」が指導事項として具体的に打ち出されています。「読み取った文章をもとに、自分の考えを持つ」という過程をきちんと指導することが求められています。

二つ目の、デジタル環境について。解答に必要なパソコン操作に慣れていないことも正答率が下がった要因として考えられています。文章を自在に取り出す、コピー&ペーストするなど。機器の整備に加えて、学習の中でこうした機器を操作する場面を取り入れることが大事だろうと思います。

三つ目は意識調査の部分です。調査結果によると生徒の教師の指導に対する支持率は高いです。これは指導の際の雰囲気良く、分かりやすく指導されていることを子ども自身が自覚しているということです。一方で、フィードバックに対する意識がものすごく低い。自分の考えをよりよくするための視点を与えられて考えたり、次への課題につなげたりしていく過程が子どもたちにとって自覚されていないということです。新聞作りをするのであっても、話し合っ内容内容を深めたり、よりよい内容にするための視点を教師が与えて再考したりする過程を大切にすることが必要でしょう。

小林 文章をどのように理解させるか、授業として成立させるか、ということをやっと悩んできました。日本の子供は読解力が低いと以前から言われてきたことなので、PISAの結果に一喜一憂せず、基本を丹念にやっただけだと思っています。

国立情報学研究所の新井紀子さんが、「AI時代を

生きるために読解力が必要だ」と指摘しています。算数の問題も文章が理解できないと解けない。論文だって資料を読めないとダメなはず。基本は読書の習慣だと思うのですが、これがかなり厳しい。本をあまり読まない家庭は、本の必要性を感じていないので。読書の習慣が整っているところに新聞がセットであると、よりよい方向に行くだろうと思います。基本をやっていく中で、新聞の価値もよりよく出てくるだろうと思うのです。

鈴木一 研究大会で瀧靖之先生の話聞き、この座談会のために、職員会議で先生たちの意見を聞いてきました。「子育て世代の親子の会話が少なくなっている」という指摘が多く出ました。子どもにスマホを持たせて、親は別のことをしているという光景ですね。私は今回のPISAショックを契機に、「なぜ読解力が必要なのか」ということが国民的な関心と呼び、国民的議論になってほしいと思います。なぜ読解力が大切かという、今の子どもたちは他人とコミュニケーションを取るのが苦手だと言われていますが、コミュニケーション力と読解力は密接に関係するからです。このままだと、ますます変なことになのではないかという危機感があります。



鈴木 一史さん

今の子どもたちは動画を見ている時間が長いので、動画だとうまく解決できる脳の構造になっているのかもしれない、動画が全て悪いのではなく、うまく結びつけてやれば、という考えの先生もいました。

阿部 うちの小学校の4月のPTA総会の時に、虐待事件が話題になっていたころだったので、「だっこしてあげて」を宿題にしたのですが、研究大会で瀧先生の話聞き、次のPTA総会では「夜、読み聞かせをしてあげて」と言おうと思っています。

朝読書の話が出ましたが、最近の読書タイムに子どもたちが読んでいるのはマンガが多い。それもコミックではなくてマンガ形式のもの。動画や画像、絵がないと理解できなくなっている。ラジオも使われなくなっているし、言葉だけ聞いて情報を理解する、情景を想像するという機会が少ない。でもスマホ、タブレットを取り上げるわけにもいかない。どう利用するかを考えない。

今の先生はタブレットを使ってどんどん授業する

し、子どもたちも乗ってきますが、読み比べをすると「新聞はいいツール」と分かってくれます。全員に新聞を渡せるような提供方法が課題ですね。

「学校で新聞に出合わせる」と、子どもたちはいい表情をします。配られた段階で「重た〜い！」とかね。小学校で新聞に出合わせて引き付けて、将来的に「新聞を読もう」と言ってくれるようになると思います。

何年か前から予算がついて仙台市では学校図書館で1紙購読できるようになりました。平成28年度から仙台市では、「杜の都の学校教育」の「各種教育の充実」にNIEが取り上げられました。教育委員会からは複数紙を比べて吟味して使うように求められています。河北新報と、PTA予算でもう1紙という学校もあります。読解力向上に新聞の力は大きいので認知度を高めていきたいと考えています。

鈴木淳 令和2年度から学習指導要領が変わります。NIEにどう生かしたらよいでしょうか？

小野 学生の中でアドバイスを申し上げるような立場ではありませんが、新しい学習指導要領を調べてみました。新聞活用について現行より詳しくなっています。新聞に対する期待は分かりましたが、でも、私のこれまでの経験では、新聞に親しんでいる子どもは少ないと思います。そういう状況では子どもに響かない。受け身になってしまう。新聞を「読む」ではなく、「活用」を取り入れて工夫していくことが大事なのではと思います。月に1、2回、朝に新聞タイムを取り入れて新聞に慣れ親しむのはどうでしょう。新聞を何度も折り畳んで厚さがどのくらいになるか調べてみよう、でもいいでしょう。慣れ親しんでから、その先へ続くのだと思います。

畠山 先日、テレビで加藤諦三という社会学者が、「世界的に人間の幼児化が始まった」と話しているところを見ました。SNSで欲しい情報のみ取ってくる、そういう自己中心的でわがままな状態が幼児化につながると。学校は全人的な育成を図るところ。新聞は視野を広げるのに役立ちます。学校にいるから新聞に親しめるという環境整備の推進が必要だと思います。

不易と流行のうち、不易が新聞。PISA式読解力を高めるためには、一紙でなく複数の新聞を取って比較することが有効だと思います。地方紙、地域紙を取れる環境が欲しいですね。ここは新聞社に期

待したいです。子どもたちのために各社のネットワークづくりをお願いできれば。

小林 本校が実践指定校になったのは、「総合的な探究の時間をどのようにしようか」という校内の検討が出発点でした。社会と自分のつながりを考えていくものにしたいと思っていたところ、校内の「総合的な探究の時間委員会」からSDGsに継続して取り組んでほしいという提案があり、ならば新聞活用を取り入れるのがいいだろうとなった。次の悩みは新聞をどう提示したらよいか。1紙のみのコピーでは偏りがあるだろうし、授業に使える記事が載っていない日もあるだろう。そこへ「実践指定校になると6紙も提供される」という情報を別の先生が持ってきた。私が担当することもあり、詳しく知っている先生に聞いて、実践校に申請しました。

教員自身が「SDGsって何？」という状態でした。生徒と一緒に研究することにしました。学校行事がいろいろあり、実践できるようになったのは11月でした。全校生徒で同一日付の新聞を読む日をつくりました。新聞を手にとったことのない生徒が多く、1時間の授業ではスポーツ欄やテレビ欄を眺めて終わってしまった子もいましたが、1面トップの女川原発再稼働の記事と関連記事を「これ何？」と読み進めた子もいました。

新聞を読んでいないテレビを見ていないと言う前に、ニュース自体に触れていない生徒が多いです。触れてもネットで流れてきたのを見て、それ以上は見ないですね。実践指定校に提供される6紙は図書館に置いています。指定校になったことで4か月間、毎日、見せることができるようになりました。先日は河北新報社から新聞づくり用の割り付け台紙をもらって、ちょうどきょう、生徒たちが新聞作りに挑戦しています。成果を見ながら、提供された新聞を活用してあと1年取り組んでいきます。

もう一つ。本校では、図書館の前の廊下に図書館の司書が1年前から新聞記事を貼っています。「どうしてやるようになったの？」と聞いたら、「図書司書部会で話が出て、前任校のときからやっている」ということでした。

鈴木淳 図書館司書と一緒にNIEに取り組めたらと思っています。もう一つの大きなテーマに移りましょう。学習指導要領が新しくなるこのタイミングをNIEにどう生かしたらよいのでしょうか？

野中 子どもたちが接するさまざまなテキストの一つとして、新聞は注目されています。新聞は何度も校正が重ねられ、限られた文章と写真と見出しの中に情報がギュッと詰められています。複数紙を読み比べたり、記事を関連付けたりして、「書き手の意図」に気付き、「事実と考えの書き分け」など文章の工夫を学べる好材です。

また、新聞を手に取りやすい環境が欲しいですね。「学校が初めて新聞と出会う場になる」という言葉、私も印象深く受け止めました。学校図書館には今後、情報センターとしての機能の充実が期待されています。現場の大きな負担なしでできるアイデアをうまく取り入れて実現してほしいです。

鈴木淳 最後に新聞社への要望を。

鈴木一 地域に密着して読者ニーズを把握し大事にしなが、記事を書き続けてほしい。中には一方的な見方の記事があり、社内で議論しているのだろうか？と思うこともあります。新聞への信頼を大事に発行していただきたいと思います。

阿部 新聞社は今のままで十分です。そういえば教科書に「書き手の意図を読み比べてみよう」という単元があり、比較できる記事がなかなか見当たらず、苦勞していました。新聞社の方に相談し、プロ野球の交流戦の記事は使いやすいと知りました。新聞社は地元の球団を大きく扱うので、どの試合、どの球団をどのように扱うか新聞によって全然違いますから。「書き手の意図」の前に「読み手のニーズ」があることも知りました。

若い先生に新聞活用の魅力を伝えたいです。教育委員会の研修の一項目にぜひ入れていただきたい。新聞の魅力も伝えたいし、校内研修や部会ではなかなか人が集まりませんから。

鈴木淳 複数地方紙の提供はすぐには難しいですが、他地域の地方紙と河北新報社のデータベースを使って比較するなど十分検討の余地ありと思います。小野さんにはぜひ宮城県で教職に就いていただきたいですね。こういうふうにお話を聞く機会を、新聞を読んでいない人とも持ちたいと思いました。本日はありがとうございました。

Ⅵ 部会活動実践報告

(1) 小学校部会報告

「新聞活用授業への新聞提供とサポートについて」

仙台市立高砂小学校 教諭 青木 茂

1 新聞活用授業について

小学校部会では平成 25 年度から、5 年国語「新聞記事を読み比べよう」の学習において、児童全員に新聞を配付し教材として活用することで、NIE 活動の推進を図ってきた。この事業での提供数は H27 年 1060 部、H28 年 1613 部、H29 年 34 校 2688 部、H30 年 45 校 3684 部となった。

2 今年度の取組

今年度は、5 学年国語科に限らず、全学年・教科等あらゆる場面での実践活用を募集し、16 校 1182 部の新聞を提供した。教材の新聞の他に、指導案や版違いの新聞のデータなども希望に応じて提供した。

実施した学校は、下記のとおりである。

南三陸町立戸倉小、向山小、虹の丘小、
八木山小、北仙台小、松島町立松島第一小、
仙台市立新田小、七北田小、上野山小、
岡田小、鶴が丘小、館小、向陽台小、栗生小、
大崎市立三本木小、秋保小

<成果>

・5 学年国語に限らず、他学年全教科での取組を可能として募集をしたため、活用場面に多様性が見られる。全学年で取組をし、新聞活用を深めた学校が見られた。

・提供した新聞の種類は 3 紙であった。

・クラスで 2 紙を半分ずつ比べ読みする活用法が見られた。各紙の販売担当部、販売店などにご協力をいただき、学校の希望する新聞、日時等希望に添いながら実践することができた。

・小学校部会として、事前に資料等を配付しながら、それぞれの学校での実践サポートをすることができた。

・新聞提供の募集告知や連絡について、仙台市内には仙台市教育委員会校務支援システム「c4th（シー

フォース）」等で行えたことがよかった。

（電子ファイルにて資料等も 10 メガ程度まで送付可能。実施報告等も電子で集約）

<課題>

・ここ数年行ってきた新聞提供授業を継続するためには、今後とも継続して予算措置を講じていく必要がある。（小学校部会の配当予算活用。）

・実施報告書等で、さらに別の新聞を希望する声も見られた。児童一人一紙の利用を基本に、二人で二紙を交換して閲覧するなど、柔軟な活用方法を推進していく必要がある。

・小学校部会担当で各新聞社に購読料を支払うように努力しているが、数校についてお手数をおかけした部分がある。

・募集告知等で「実施学年は 5 学年国語に限らない」ことをさらに伝えていく必要があった。

3 次年度に向けて

次年度、新学習指導要領の完全実施を受けて、小学校のあらゆる学習・活動の場面で新聞活用が深められるように、継続して新聞提供や授業内容のサポート等を深めていきたいと考えている。

各学校が何を必要としていて、当部会でどのようにサポートしていけるか考えながら事業を進めていきたい。

小学校部会は例年 2 回の NIE 会議のあとに会議を設定して運営してきた。2 月 13 日の小学校部会で、次年度の方向性を確認した。

・今年度同様一人一紙を基本にしながらも、読み比べ等で二人二紙を活用するなど、柔軟に対応すること。

・実践したい学校の状況に合わせて、教科領域を設定して実施してかまわないこと。

以後、新年度の会議でも調整を図りながら、新年度事業を展開していく予定である。

新しい新聞の活用事例や、指導案・資料なども要望に応じて対応できるように、小学校部会がさらに機能していくように、計画的に運営していきたい。

(2) 中学校部会報告

「SDGsでつばやきニュースッス」 ～現代社会とつながる新聞を活用して～

仙台市立長町中学校 教諭 進藤 千枝

1 はじめに

中学校部会は、個人的にNIE活動は実施できてもなかなか部会全体で集まり、研修・研鑽を積む時間を設定するのが難しいのが現状である。

今年度は、仙台市の第2回特別活動部会研究会に合わせて県下の先生方へも研究会の案内文書を送付させていただき、中学校部会全体研修を実施した。残念ながら、県下の先生方の多くの参加はなかったが、仙台市内の先生方の御参加をいただき、学びを深め合うことができた。

講師には渡邊裕子先生(NIEコンサルタント)をお招きし「SDGsとつばやきニュースッス」をテーマに講話・演習をしていただいた。

2 概要

(1) SDGsとは何かを解説

なじみのない言葉では、あるが、SDGsの後継として国連が2030年までに達成することを定めた持続可能な開発目標である。「誰一人取り残すことなく」という合い言葉のもと先進国も途上国も取り組むこととし、その具体として17項目の目標がある。



(2) キリキリタイム

渡邊裕子先生の御指導のもと、キリキリタイムが始まった。気になる記事や写真を先生方が新聞から選び、ストックするという作業を行った。



(3) ペタペタタイム

切り取った記事を、ワークシートに貼って、「つばやき」を開始。自分の言葉で記事についてのつばやきを記入する。その後、自分の選択した記事にSDGsの17項目の目標のアイコンの中からその記事にあったものを選択し、アイコンシ-

ルを添付するという作業を行った。ただし、貼るアイコンは一つではなく、この記事にこのアイコンが絶対正解であるということはない、ということ念頭に置くことを先生方に留意していただいた。

(4) 発表タイム

作成したワークシートを元に、4人1班の中で順に記事を選択した感想や「なぜこのアイコンを選んだのか」を和気あいあいの雰囲気の中で発表した。

(5) 先生方の感想から

- ・今までこのような活動をしてきたことがなかったので今後総合的な学習の時間や学級活動で取り入れていきたい。
- ・久しぶりに新聞を真剣に読んだような気がする。
- ・今回初めてSDGsという言葉を知りました。これからの社会を生きる生徒には是非知ってほしいと思った。
- ・新聞を用いた授業も楽しく学べるので、今後は取り入れたいと思った。
- ・とても楽しく、気になる記事から自分の興味が自然と見えてきました。

3 まとめ

部活動の指導等で、なかなか中学校部会では、部会全体として集まり活動することは難しい。今年度は、仙台市の教科外研究会と同時開催で中学校部会を実施してみた。

また、土曜日に開催されている「NIE 土曜しんぶんカフェ」で今年度は2回中学校部会共催という形で「しんぶんカフェ」を実施できた。参加者からは、一様に「楽しく学べる」と好評であった。

新聞は、「リアル社会の入り口」。これからの社会を生き抜く生徒に、自分に向き合い主体的・対話的な深い学びを提供できるNIEを今後も推進していきたい。

(3) 高等学校部会報告

令和元年度 高等学校部会報告

仙台城南高等学校 教諭 鈴木 理恵

1. はじめに

今年度の高校部会研修会は、令和元年 11 月 13 日（水）に河北新報社 1 階のセミナールームで行われた。宇都宮市で開催された全国大会の参加報告と講演の 2 部構成とした。講演の講師を日本経済新聞社仙台支局の和佐徹哉支局長にお願いしたところ快諾していただいた。

2. 全国大会参加報告

全国大会の参加報告は宮城第一高等学校の三嶋廣人先生にお願いした。はじめに新聞スクラップコンクール入賞作品の紹介があった。小学生が「18歳選挙権」「いちご農家について」「働き方改革」についてまとめているものだった。また東日本大震災の被災地のその後についてまとめた作品もあり、被災地ではない地域が被災地をどのように見ているかを知るうえでも興味深かったということだった。次に栃木県立今市高等学校臼井利正先生の実践について報告があった。生徒が身の回りに起きていることと高校数学が結びついていることに気づくために新聞を活用しているとのことだった。また分科会で実際に行われたように、参加者に新聞紙 1 枚（分科会では折り紙）が配布され多面体作りを行った。参加者同士和気あいあいと多面体作りを楽しんだ。

最後に三嶋先生ご自身の授業実践についても話があった。生徒に化学と社会とのつながりを気づかせるために、「リチウム」について取り上げている各新聞を生徒たちに渡し、読み比べを行わせた。生徒たちは各新聞によって得られる情報が違うことが分かった。次期学習指導要領では数値、データを読み解き、物事を論理的に考えていく力の育成を目指している。その教材として新聞は非常に有効であると話されていた。



<全国大会参加報告の様子>

宮城第一高等学校 三嶋廣人先生

3. 講演

日本経済新聞社仙台支局の和佐支局長から「新聞 デジタル化のいま」という題で講演いただいた。講演の中で紙の新聞に掲載されているニュースは、記者が実際に現場に赴き、取材を行ったものであるのに対して、ネット上のニュースは記者自身が自分の目で見るということはほとんどされず、検証が十分にされていないものであるという話があった。新聞は事実を客観的に伝え、記事について多様な意見を掲載していたが、ネットニュースはある出来事に対して、一方の意見のみしか掲載しない。新聞購読をやめるということは新聞そのものを読む習慣をやめる場合が多く、一方の人の意見しか聞かなくなってしまう状況に陥る。それはつまり、多様な価値観を認めず社会の分断を招きかねないと危惧されていた。ネット新聞の特性の一つに検索性がある。自分が気になる言葉を入れて検索し、その中に出てきたサイトでニュースをチェックする。自分が知りたいニュースしかチェックしなくなるので、紙の新聞の 1 面に載るような記事を知る機会がなくなってしまう、その人が持つニュース価値に偏りができてしまう。その結果、ネット上の記事が良いものなのか悪いものなのかを判定できなくなってしまう。

インターネットの普及とともにメディアの多様化は進んでいる。講演の最後に、ネットが社会を分断したが、新興メディアをどう考え、情報収集のあり方をどう維持していくのが今後の新しいメディアリテラシーの課題である、と話されていた。



講演の様子：日本経済新聞社仙台支局長 和佐徹哉氏

4. 最後に

今年度も無事に研修会を終えることができた。講師を快諾いただいた和佐徹哉さんをはじめ、NIE事務局の方々には感謝申し上げます。ありがとうございました。

N I E 全国大会宇都宮大会分科会の報告

宮城県宮城第一高等学校 教諭 三嶋 廣人

前半の分科会は、「N I E を活用した魅力ある農業教育の実践～農作物トレンド調査結果を活用した農業実践～」と題して、栃木県立宇都宮白楊高校阿久津先生の実践発表に参加した。白楊高校は農業・工業・商業・家庭の学科があり、平成28年度からN I E 実践指定校として取り組み、生徒の進路意識を高め、職業観や勤労観を養うことに努めている。

N I E との関連

- 平成28年度から実践指定校
- 新聞を活用した授業の実践例（平成28年～平成30年）
 - 農業経営科1年生・「農業と環境」
 - 農業経営科2年生・「野菜」
 - 農業経営科3年生・「総合実習」
 - 生物工学科2年生・「選択A野菜」
 - 全学科3年生・「選択C野菜」



農業経営科「野菜」の授業では、日本農業新聞の農産物トレンド調査を分析し、話題性がある野菜を理解するとともに、消費者の求めにどのように応じるのか、生産者と消費者の両方の立場にたって判断できる人材を育成している。授業を通して、高糖度の野菜が人気であることや食の外部化、異常気象による産地の不安定化などの問題に生徒は気が付いた。また、GAP（農業生産工程管理認証）の記事から、自分たちも認証を取得したいという意欲が生まれ、道具の整理整頓など直接栽培にはかかわらない部分にまで気を配れるようになり、N I E 活動をきっかけに自ら進んで行動できる能力が身に付いたとの報告があった。

後半の分科会は、栃木県立今市高校の臼井先生に



よる高校数学と社会を結ぶ「新聞」と題して、総合学科における数学活用での実践発表に参加した。身の回りの数学に関係すること

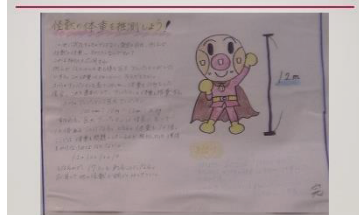
を新聞形式にまとめた「数学新聞」の作成や新聞の中から数学に関連した記事を探す活動を行っている。新聞の中の数学と聞くと、文中にある数字や記事の横にあるグラフや図表をイメージしがちだが、写真の中の建物の形やスポーツの対戦表、星取表も数学の一部であるという報告を聞き、新たな視点を得ることができた。また、記事の中に出てくる、出生率や支持率、〇〇%上昇・減少といった割合などでは、短期的に見ているのか長期的に見ているのか、計算前の数字を正確に把握しなければ、現象の見え方が変わってしまうということにも触れていた。

新聞から「数学」的内容を見つける



途中には、新聞紙で立方体を作り、教具にする方法も紹介していた。全体を通して、次期学習指導要領の目標にある「数学の見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して」資質・能力の育成をしようとする実践報告で、教材としての新聞の有効性を改めて感じさせるものであった。

数学新聞



Ⅶ 研修会報告

1 宮城県NIE推進委員会総会の概要

宮城県NIE推進委員会総会

宮城県NIE推進委員会の総会は7月16日、河北新報社内で開催されました。門脇恒明推進委員長（県連合小学校特別活動研究会長、連坊小路小校長）は開会あいさつで「新学習指導要領は新聞の活用を重視しているが、手法を知らない先生が多い」と指摘。「NIEの必要性を感じるよう、工夫していきたい」と抱負を述べました。終了後は小学校、中学校、高校の各部会が開かれ、役員を選出、年間活動計画を検討しました。

研修では時事通信社仙台支社長の渡辺知毅さんが講演しました。



熱心な討議が行われた小・中・高校部会

講話「通信社の役割と

主権者教育としてのNIE」

時事通信社仙台支社長 渡辺 知毅さん

首相の車列には「番車」と呼ばれる車が常に加わっており、時事、共同両通信社の首相番記者が乗る。なぜ通信社記者か。多くの新聞社、放送局は両通信社のいずれか、あるいは両社から記事配信を受けているからだ。通信社は地方紙などに記事を配信するため国内、国外に多くの取材拠点を持つ。戦前の国策通信社である同盟通信社が解散してできたのが時事、共同両通信社だ。

首相番記者が所属する首相官邸記者クラブは日本でもっとも多く多くの記者が所属。取材対象は首相、官房長官などの政治家や官僚。夜回り朝回りは政治部記者のルーティンワーク。若手記者が書く原稿は通常キャップなどによって大幅に手直しをされる。現場で記事の形ができて、本社の政治部デスク、さらに校閲担当部署などで厳しいチェック、手直しが続く。配信後にチェックする審査部門もある。

「オレ様の正義」を振りかざす言葉が飛び交うネット社会では、子どもたちの情報リテラシーを養うことが喫緊の課題だ。オレ様の正義で結束し排他的な集団をつくる「島宇宙」「エコーチェンバー」現象もあり、新聞もマスコミと罵倒される。

新聞は高い信頼性があるが相対的なもの。完全、絶対的なものではない。記事は事実の一側面を切り取ったもの、一つの視点からのものであり、現時点で妥当でも価値観、意識が変われば評価も変わる。NIEでは現時点での多様な見方を比較することのほかに、時間で変化する記事内容を比較するのも面白い。記事も情報も絶対でなく「危うさ」があると

いう前提に立ち、自分の頭で考える習慣を身につけることが情報リテラシーとしても主権者教育としても重要だ。大衆社会にも油断すればポピュリズムに陥るといふ「危うさ」がある。情報リテラシーを高めるためには一人ひとりが「物差し」を持つことが必要。物差しを共有できれば社会は安定する。共有される物差しが「公共哲学」だ。国会では毎年多くの法律が成立しているが、「いたちごっこ」であり、社会は共有の物差しである公共哲学によって運用されている部分が多いのが実態だ。



公共哲学の対象には新しい価値観も伝統的な価値観もある。欧米や中東では宗教が公共哲学の役割を果たす。日本では神道、仏教、山岳信仰、祖霊信仰などが混在し年中行事として民俗信仰を形成する。正月などの年中行事、祭り、神楽などは共有され継承されてきた精神文化であり公共性がある。その意味で各地域の「公共的民俗信仰」「公共的霊性」は存在する。

新聞の紙面で被災地での祭りや神楽の再開を報じる記事を目にする。各地域で何を「尊いもの」としてきたのか、次の世代に何を継承しようとしているかを考える材料を提供している。民俗信仰や霊性は、人々が共有する価値観や規範意識の根本をなす公共哲学の重要な構成要素である。大学ではビジネス直結の教育が重視される傾向にあるが、高校までのNIEでは、金もうけにとらわれず、公共的な広い視野から主権者教育に取り組んでほしい。

2 地区研修会（大崎市立岩出山中学校開催）の概要

宮城県NIE地区研修会 IN 岩出山中学校

宮城県NIE委員会は8月22日、大崎市立岩出山中学校を会場に本年度の地区研修会を開催しました。大崎市や仙台市などから教諭と事務局23人が参加しました。

会場校の岩出山中は本年度のNIE実践指定校。久光新一校長先生は開会あいさつで「生徒は確かな表現力を身に付けつつあり、新聞を使った学習の効果を実感している。先生方が実践の引き出しを広げる研修を大事にしたい」と述べました。

講話の講師は朝日新聞社仙台総局長で東北復興取材センター長の後藤啓文さん。9月1日付で本社論説委員会に異動する直前のタイミングでした。「取材の歩き方～新聞記事ができるまで～」と題し、東日本大震災の被災者・遺族、沖縄の基地問題などを長く取材した経験を踏まえて、「現場の当事者が自分から話し始める、そういう取材を重ねられるかが記事の厚みを左右する」など、取材の基本をお話いただきました。



語彙力を磨く「ことばの貯金箱」ワークショップ

続いて、NIE教育コンサルタントで東北福祉大学講師の渡辺裕子さんが、自身が考案した「ことばの貯金箱」のワークショップを展開。参加者は新聞をめくって気になった見出しや写真を切り抜き、台紙に貼って発表しました。

渡辺さんは授業に取り入れる際のアドバイスをしながら、「『切り抜き』は言葉をたぐり寄せる作業で、『貼る』のは言葉と向き合う作業。無意識のうちに自分の気持ちを反映した言葉を選び、貼りながら心が整理されてスッキリする。その過程で語彙力が磨かれる」と説明しました。

最後に岩出山中の太田孝晴教頭先生が「今回の学びを生かして、より質の高い授業を実践したい」とあいさつ、閉会しました。

講話 「取材の歩き方

～新聞記事ができるまで～」

朝日新聞社仙台総局長 東北復興取材センター長

後藤 啓文さん

ふるさとは仙台市です。朝日新聞社に入社して約30年。沖縄の基地問題や自衛隊のイラク派遣、東日本大震災などを取材してきました。



震災以降、被災地の状況を全国にどう伝えるか、県内読者には防災や復興についての情報をどう届けるかが、宮城での取材の最も重要なテーマになりました。例年、3月11日付で仙台総局長が記事を書いています。お配りした「地域再生・心のケア、終わりはない」。この800字ほどの記事を書くためにどういった取材をしたか、イメージしてみてください。文章自体は改めて誰かに取材しなくても書けないことはない。でも、私は沿岸部の首長10人ぐらいに現状と課題を聞いて回り、気仙沼や石巻の災害公営住宅を訪ねて住民の皆さんに声を掛けた。

ある男性は津波で奥さまを失い、突然一人暮らしになった。一時はこもりがちの生活になってしまったが、周囲の支えでやっと出歩けるようになった体験から、自治会役員を引き受け、今は高齢独居世帯の見守りをされている。この方は3回目に訪ねたときによく、奥さまの話をしてくれました。相手が自分から話してくれるまで待つのが取材では大事です。そういう積み重ねがないと、「ずれていない」という自信を持って書けないものです。

無理に聞こうとすると相手は心にふたをしてしまう。沖縄では、基地に賛成の人も反対の人も悩みや迷いを抱えていて、一人一人の心の揺れにどこまで迫れるかが課題でした。

新聞もテレビも、記者は目の前のことを一生懸命取材し、一番大事だと思うことを書きます。皆さんには、自分ならどんな取材をするか、考えながら読んでもらえるといいですね。

3 N I E全国大会宇都宮大会参加報告

第24回N I E全国大会宇都宮大会 参加報告

第24回N I E全国大会宇都宮大会（日本新聞協会主催）が2019年8月1～2日、宇都宮市で開催されました。2年度以降、「主体的・対話的で深い学び」を重視する新しい学習指導要領が小学校から順次実施されることから、「深い対話を育むN I E」をスローガンに、全体会や公開授業、実践発表、ワークショップなど20のプログラムが行われました。全国から教育、新聞関係者ら約1100人が集まり、本県からは実践指定校教諭やN I Eアドバイザーら16人と事務局3人が参加しました。初日の全体会の内容と分科会の一部を、事務局報告と参加者レポートで紹介します。

事務局報告

昨年度の盛岡に続き、近県での開催だったことから、仙台～宇都宮間の専用往復バスをチャーターし、新規実践校以外の学校からも広く参加を募りました。猛暑の夏でしたが、名物のギョーザを味わいながらの夜の懇親会では校種を越えて交流を深め、互いに新鮮な2日間になりました。令和2年度の全国大会は11月22～23日、東京で開催されます。令和3年度は札幌市で開催予定です。



初日は、「大村はま記念国語教育の会」事務局で作家の荻谷夏子さんが「N I Eの先達—大村はま 三つの実践例をたどりながら」と題して基調講演。恩師で国語教育者の大村はまさん（1906～2005年）の教育活動を紹介しました。

大村さんの新聞活用は戦後間もない1947年、学ぶための環境も学習習慣もない新制中学校で、新聞や雑誌を切り抜いて生徒1人にそれぞれ一つ、全部で100通りほどの手作り教材を用意したのが始まり。渡された子どもたちが食いつくように勉強し始めたのを見て、彼らが「いかに伸びたかったか」、求める心の尊さに気付いて泣いたというエピソード



基調公演に聴き入る参加者＝宇都宮市文化会館

が心に残りました。与える記事は何でもよい訳ではなく、子どもたちが学ぶのにふさわしい記事を厳選していたという話があり、新聞を作り提供する側も心したいと思いました。



「大村はま 三つの実践例をたどりながら」をテーマに講演する荻谷さん

続くパネルディスカッションのテーマは「新聞で育む深い対話」。下野新聞社のスクラップ作品コンクールで何度も入賞している地元の高校2年、吹上二海（つぐみ）さんと小学4年の心海（ここみ）さん姉妹が「新聞を読むと興味のなかったことにも目が向く」「スクラップノートで人の意見を聞くのが楽しい」と語り、母親の順子さんが「公平な目で多角的に物事を考えられるように、これからは家族で新聞を読みます」と述べました。学校での取り組みに加え、家庭での注目次第で、今の若い世代にも新聞は価値を発揮できるのだと実感しました。

文部科学省初等中等教育局の小栗英樹教科調査官は、用意したパンフレットを示しながら、「対話によって自分の考えを深め、相手を理解する力をつける」ことがこれからの教育のポイントだと話しました。

（県N I E委員会事務局長 与野 珠美）

参加者レポート

適した教材 常に吟味

大郷町立大郷小学校 奥平 大和

●基調講演「N I Eの先達 大村はま—三つの実践例をたどりながら—」

参加したのは、基調講演「N I Eの先達 大村はま—三つの実践例をたどりながら—」、パネルディスカッション「新聞で育む深い対話」、宇都宮大附属小学校の公開授業「わたしの考えたこと」、宇都宮市立五代小学校の実践発表「新聞を活用した言語活動の工夫—思考力・判断力・表現力を育む活動—」である。ここでは大村はまの実践例の概要と感想を述べる。

例①終戦直後の1947（昭和22）年、「犬ころ」みたいにして学習意欲と学習習慣の無かった100人の子どもたちに、一人一人の問題意識に即した100の切り抜き記事を作って人間が学ぶことの尊さを実感させた実践、例②1972（昭和47）年、当時の中学2年生が生まれた1959（昭和34）年4月から翌年3月までの1年間の新聞記事100日分・計300カ面を1カ月ずつ担当させ、自分たちが生まれた年の1年をレポートにまとめるという実践、例③1979（昭和54）年の隅田川の花火大会記事4紙を読み比べる実践—の三つであった。

どの実践も大村はまが生徒の学習意欲を喚起させ、学ぶ価値があると確信した教材を与えているのがポイントである。記事の語句にこだわって場面を想像したり、内容を要約したりするなどして、確かな国語力を高めていったであろうことがうかがえる実践であった。

ここから分かることは、教師は忙しい毎日の中でも、子どもたちに付けたい力、考えてもらいたい内容、そのためにもっとも適した教材は何かということ常を常に考えておかなければならないということである。

さて、もしも、大村はまが現代のスマホ社会・AI社会の中にあって、教室で子どもたちが「犬ころ」のようにになっている姿に憂慮したとしたら、どんな国語教育を行うのだろうか。ラインやSNSの言葉遣いや起こっている事件までも教材化するのだろうか。現代の子どもたちが抱える課題を克服して、国語力を高めるための新たな教育実践の開発はこれからも続くのである。



会場に展示された大村さんの著作物

新聞使い 考える人に

南三陸町立戸倉小学校 及川 祥

●基調講演「N I Eの先達 大村はま—三つの実践例をたどりながら—」

本校は昨年度からN I Eの指定校として授業、日常生活に新聞を積極的に活用してきた。しかし、自分自身、教職の経験が浅く、新聞を教育に活用する有効性についてあまり深くは考えていなかった。今回、初めてN I Eの研究大会に参加させていただいて新聞の持つ力に改めて気づかされた。

荻谷夏子さんによる基調講演では、同じ内容の記事を新聞4紙で読み比べ、表現の違いを見つける授業を紹介していただいた。「比較するものを探し、考える人になる練習をする」など、新聞の活用で思考力を養うことができるということを知り、大変勉強になった。試験のように答えを新聞から求めるのではなく、新聞を使って考える人を育てるということに深く納得することができた。

また、大村はま先生が第二次世界大戦直後、生徒100人一人一人に新聞で教材を作り、対話を通して行った授業実践についても紹介していただいた。子供一人一人に合った新聞記事を選び、教材を作成した大村先生の努力は並大抵のものではなく、目の

前の子供たちの成長を願って尽力していたのだと感じた。

新学習指導要領にうたわれている主体的・対話的で深い学びに、新聞は有効な教材だということを理解し、NIE実践校としてこれからも教育に新聞を活用していきたい。

狙い明確に記事精選

仙台市立長命ヶ丘小学校 佐藤 由依

●基調講演「NIEの先達 大村はま—三つの実践例をたどりながら—」

●パネルディスカッション「新聞で育む深い対話」
パネリスト・小栗英樹（文部科学省調査官）、関口修司（日本新聞協会NIEコーディネーター）ほか

1 日目の荻谷夏子氏の講演とパネルディスカッションでは、新聞は継続して読むことで、情報を得ながらその出来事の背景や他の記事とつなげて考えることができるようになる優れた媒体であることに改めて気付いた。つまり、NIEの実践によって、子供たちが物事を多面的に見ることができるようになることで論理的な思考をする力が付き、これからの社会を生きる上で必要とされるさまざまな能力を育てることができるということを学んだ。

2 日目の宇都宮大学附属小4学年の国語の授業では、子供たち一人一人がよりよい新聞を作るためにはどうしたらよいのか知りたいという気持ちを持っていたために、新聞記事を使って活発な対話が行われていた。NIEを実践する時には、子供たちが新聞記事で何を学べるのだろうかという期待感を持つ記事を精選し、どんな力を付けさせたいか教師側が明確しておくことが必要であるということを学んだ。

2日間を通して、NIEを実践するために、まず日常的に新聞に触れる機会があるような環境作りをしていかなければならないと考えた。

新聞は生きた教科書

南三陸町立戸倉小学校 武山 知子

●公開授業／言語活動のゴールとしての新聞記事の活用 「あなたの悩み、解決します！～わたしの考えたこと」の実践 宇都宮大学教育学部附属小学校4年

昨年度に続き全国大会に参加させていただき、宇

都宮大附属小学校4年生の国語「わたしの考えたこと」を授業参観した。本校使用の教科書にも同名の単元がある。昨年度に授業研究を行ったが、教科書と同じ形式で書かれた記事を探すことができず、似たものを取り入れたものの、探すことにかかり時間がかった。今回の授業は教科書を使用せず、新聞そのものを教材として扱った授業であった。

「大勢の中のあなたへ」という新聞記事を書くことをゴールに据えた言語活動で、「大勢の中のあなたへ」という新聞記事を通して思ったことや気付いたことを話し合う授業は、新聞そのものが生きた教材となることを明らかにした提案授業であった。

児童は新聞を拡大したものを使用し、伝えたいことが伝わるように、どんな工夫がされているかを読んで見つけ、生き生き話し合っていた。目的に合わせて探した新聞を準備すれば、生きた教科書として活用することができるという大変参考になる授業であった。

基調講演では、学生時代に何度も読んだ「教えるということ」の大村はま先生の実践を紹介していただいた。「子どもに言葉の力をつける」ことをエネルギーに、戦争の荒廃から立ち上がったはま先生の実践は、やはりぐっと心に響く。教師が多忙の中で忘れがちな、しかし教師として決して忘れてはいけないものを思い出させてくれる実践であった。



宇都宮大附属小の公開授業「わたしの考えたこと」

五感で新聞に親しむ

仙台市立泉松陵小学校 佐藤 慶一

●実践発表／「3つの資質・能力を育む新聞を活用した授業」宇都宮大学教育学部附属小学校
新聞を活用しつつ、新学習指導要領を踏まえた取

り組みということで、国語科、家庭科、道徳科、音楽科、図工科の実践紹介があった。

国語では、「伝えたいことを新聞に投書しよう」という単元において、下野新聞に投書するという目的意識を持って投書記事を比較・分析したことが、説得力ある文章についての理解を深め、書く能力の向上にもつながったという発表があった。図工科『『ひら』『くる』『びりっ』としんぶんし』は、広げる、丸める、ちぎるといったさまざまな手法を用いた造形遊びの実践であり、新聞の質感や大きさに気付きながら自分の思いを表現できたという成果が発表された。

この図工科の実践は、音楽科「新聞でどんな音ができるかな」との実践とともに、参加者と活発な意見交換が行われた。「NIEは新聞に書かれている事柄を活用するものでは」「素材としての新聞活用もNIEとして捉えて良いのでは」という協議であった。

新聞を「読む」ことはもちろん大切だが、新聞の普及率が低下している現代、親しむことが第一歩であると一個人として考えた。五感を使って新聞に親しめるよう、これからの実践に生かしていきたい。

時間かけ思考深める

多賀城市立山王小学校 鈴木 誠

●公開授業／「対話的な学習活動を通して学びをつなげる国語科授業の創造—『情報の扱い方』に着目して—」宇都宮大学教育学部附属中学校
(学習指導案／題目：新聞の社説を解説しよう／本時の目標：社説を解説することを通して、文章の構成や論理の展開について評価することができる)

4時間扱いの4時間目の授業。あらかじめ、社説BとCを事実が書かれている部分と、意見が書かれている部分に分け、文章構成をチャート図に表す活動を取り入れ自分の考えをまとめている。

本時は、それをグループ内で発表しあい、意見交換をすることから授業が始まった。

4人グループで全員が和気あいあいと発表していた。時間がかかった側面はあるが、自分の思考を深め、共有することができたと思われる。また、テーマである対話的な学習活動を通して学びを深めることができたと思われる。

その後、学級全体で発表することで、社説BとCの文章の構成や論理の展開について評価する場面に

移った。生徒からは、「食品ロスについて、説明するための具体例が客観的で、共感した」との発表があり、なるほどそうだなあと生徒は社説の主張に納得していた。しかし、本時のねらいである論理的な文章構成になっていることに気付くことはもう一歩だったように思われる。

社説という文章は、大人向けの文章であり、中学生にとってやや難しいかもしれないと、講評で指導主事が話していたが、果たしてそうだろうか。生徒にとって、やや難しくても、興味を引く学習課題であると、分かろうと努力していくものである。ぞくぞくする学習(授業)に、主体的な学びがあり、授業を通して、ステップアップがあった。

NIEのことが指導案にきちんと位置づけされており、授業では授業者の中澤先生と生徒の関係がとても良く、生徒が生き生きと授業に取り組み、話し合い、発表をしており、大変すばらしい授業だった。

児童が自ら学び合う

松島町立松島第一小学校 秋場 文東

●実践発表／宇都宮市立豊郷中央小学校の実践発表「主体的に学び合う児童の育成～子供たちが創るNIE～」

宇都宮市立豊郷中央小学校の実践発表「主体的に学び合う児童の育成～子供たちが創るNIE～」では児童の主体性を重んじたユニークな取り組みが印象的であった。委員会活動ではニュース委員会があり、新聞記事の要約を毎日掲示するとともに、行事等での友達の活躍の紹介も積極的に行っている。全校集会では「新聞見出し連想クイズ大会」など参加型の集会を企画・運営し、スクラップ記事の発表会も行っている。また、縦割り活動ではコミュニケーションを深める活動として1日分の新聞のみを使って、より高いタワーをつくる活動が印象的であった。授業では、中学年は新聞広告を利用した社会科の学習活動、高学年は平成を振り返り新しい元号を予想するなど学年に応じた工夫された授業が紹介された。

全校の教職員が一丸となって独自のNIE全体計画を作成し、児童の主体性を高める工夫が随所に感じられ、学ぶものが多かった。

対話通じ より深く

仙台市立長町中学校 進藤 千枝

●パネルディスカッション「新聞で育む深い対話」

●「新聞社の出前授業はこんなに楽しい！」登壇者・朝日、毎日、読売、産経、東京、下野新聞社ほか

「深い対話を育むNIE」を副題にした第24回NIE全国大会宇都宮大会に参加させていただいた。

初日のパネルディスカッション「新聞で育む深い対話」では、文字情報の有効性や、「そうじゃないのですか？」などの対話を繰り返すことによって、より対話を深められるという話があった。

また、「対話的な学び」とは、「子供同士の対話」「専門家との対話」「地域の方々との対話」を通して、自分の考えを深める事ができる。対話を通して、友人をより深く理解できる、思考を深める事ができるという、話が印象に残った。

2日目のパネルディスカッション「新聞社の出前授業はこんなに楽しい！」では、各新聞社のNIE担当の方々からの出前授業への考え方や小中学校の先生、塾の側からの要望などをうかがえた。ネット全盛の時代、新聞社とネット企業との共存は、車の両輪のように一緒に活動していくことが重要であり、新聞は「リアル社会への入り口」であるという話が心に残った。

新聞は、家庭でも、学校でも、社会でも共通の話題で、対話が深められる。新聞は、対話のコミュニケーションツールになり得るという事を大いに感じた2日間であった。

生徒の日常に新聞を

大崎市立岩出山中学校 八木 節子

●パネルディスカッション「新聞で育む深い対話」

新学習指導要領が掲げる「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）」のために、新聞に何ができるのかについてパネルディスカッションが行われた。教室で「あいうえお」が飛び交う授業には「主体的・対話的で深い学び」がある。「あ～（そうなのかな）」「いいね～」「う～ん（そうかな）」「え～（そうなんだ）」「お～（すごいね）」の言葉がある授業には、周りの人たちと共に学びながら新しい発見や豊かな発想が生まれている。

学校で新聞を使った学習は、「組織化（みんなでや

ろう）」「日常化（常にやろう）」「見える化（目標や成果を示そう）」の方向に進んでいる。特に、「日常化」のためには、学習内容と新聞の情報をリンクさせて授業の導入で活用したり、生徒に記事を選ばせ要約や感想を書かせたりするなど、新聞に触れる機会を増やすことが有効である。その環境を整えるためにも学校司書の果たす役割は大きい。生徒が日常的に新聞に触れることで、世の中の出来事を知るだけでなく、ものごとをさまざまな角度から見る経験にもなる。



パネルディスカッションには地元紙の新聞スクラップ作品コンクールに取り組む家族も登壇

「対話的な学び」とは、多様な人々と互いに納得できる答えを見つける事。生徒が議論を整理したり反論を述べたりするなかで、相手に耳を傾け、互いに理解することの大切さに気付かせていくことが必要だ。

NIEの取り組みが新学習指導要領にどのように位置付けられているのか、どのような方法でどのように取り組んでいったらよいのか、具体的な事例を通して学ぶことができた。今回の学びを校内でも共有し、2学期からの活動につなげたい。

新聞投稿で意見発信

大崎市立岩出山中学校 斎藤 美佳

●実践発表／「NIEを活用した義務教育学校における作文指導」 那須塩原市立塩原小中学校

「深い対話を育むNIE」というスローガンの下、宇都宮で開催されたNIE全国大会に参加した。義務教育学校である塩原小中学校では、毎月「作文の日」を設定し、9年間を通して表現力の育成に取り組んでいる。その「作文の日」とNIEを関連させて思考力の向上を目指す実践に大変魅力を感じた。

中学1～3年にあたる7～9年生では、新聞への

投稿を毎月行っており、数多くの生徒作品が新聞に掲載されている。「県外で塩原PR」「伝統の巫女舞」「家族と避難確認」など地域社会に関わる話題も豊富であった。また、校長先生自ら、作品の良さについてコメントしたり、生徒たちが縦割りのグループで作品の工夫点を話し合ったりしている。NIEを通して深い対話が生まれ、思考力が育まれていると感じた。書く力の向上はもちろんだが、生徒にとって、新聞が情報を受信するだけでなく、発信するための道具になっていた。

「書くこと」に抵抗感をもつ生徒の増加が気になっていた私にとって、良い刺激を受ける実践だった。中学生の投稿記事に意見を寄せる地域住民もおり、生徒の喜びにもなっている。表現力と思考力の向上はもちろんだが、今後もNIEが生徒と地域社会のつながりを育む方法の一つになることを期待したい。

自己肯定感が高まる

仙台市立折立中学校 菅原 久美

●ワークショップ『「つぶやきNEWSッス」でアクティブラーニング』講師・渡辺裕子(白鷗大学講師)

「餃子の町」宇都宮での全国大会に参加し、充実した2日間を過ごすことができました。

2日目は、特別分科会のワークショップ『「つぶやきNEWSッス」でアクティブラーニング』に参加しました。講師は、宮城県のNIEを牽引して下さっている白鷗大学非常勤講師・東北福祉大講師でことばの貯金箱「夢」プロジェクト代表の渡辺裕子先生です。

当日は、分科会開始時間前から、会場前に掲示された資料を見ながら興味津々で、渡辺先生に声をかけられている他都道府県の先生方や新聞関係者の方が大勢いらっしゃいました。

分科会は、「つぶやきNEWSッス」の流れや取り組みの意図を渡辺先生のお話とDVDにより耳と目で確認しスタートしました。偶然机を同じにした他都道府県の先生方と4人グループでの活動でした。

① 誰かに紹介したい記事を選び発表。② 模造紙に貼って、自分の思いをつぶやく。③ グループの他の人の記事にもつぶやく。④ 他のグループを見てまわり、付箋につぶやきを書き模造紙に貼る。⑤ グループに戻り、模造紙に書かれたつぶやきを見ながら、もう一度発表し、意見交換。

…という一連の流れを通して、多様な見方・考え

方や価値観に触れながら紙面上での簡単な意見交換を行い、最後の発表では、他の人のつぶやきからさらに自分の考えを深め、さらに「わいわい」と意見を交換し合います。全員が発表し(お一人様をつくらない)、自分のつぶやきに一言でもつぶやいてもらえる(反応してもらえる)ことで自信が生まれる(自己肯定感を高めることができる)ことが素晴らしい活動だと感じました。

初対面の方とあつという間に話が弾む! そんな楽しい時間を体験することができました。

改めて、さまざまな年齢層で、教科や領域での取り組みに活用できる実践であると感じました。



初対面同士でも意見交換が弾む「つぶやきNEWSッス」

複数メディアの利点

仙台市立中野中学校 亀谷 祥子

●実践発表/「複数のメディア・ICTを関連させたNIEの取り組み」 作新学院小学部

栃木県唯一の私立小学校である作新学院小学部のNIE実践報告会に参加した。紹介された事例は三つ。

一つ目の複数の新聞を活用した授業では、生徒の活動を複数の新聞社が写真付きで紙面に取り上げた記事を読み比べ、新聞の公共性や目的を考えることで児童の良い記事の判断基準に変化が見られたというもの。

二つ目のメディアとICTを活用した授業では、新聞やNHK for Schoolの動画を提示することで物事を多角的にとらえることができ児童の考えを深めたり揺さぶったりするのに役立つということ。

三つ目のICTと新聞を活用した授業では、ニュースの動画を提示し、そこから起きた疑問について新聞記事を読むことで解決するものだった。

この発表を受け、複数のメディアを扱うことによって多角的な視点を持つことや、多くの情報から自分の考えを深めることができるという利点があると感じた反面、iPadを使った新聞の読み比べは同時に画面を並べることができないことを例に紙媒体の必要性を感じた。新聞を用いた授業を基本に、ICTを活用していきたい。

記事から始まる数学

宮城県名取高等学校 小島 輝彦

●実践発表「高校数学と社会を結び『新聞』」 栃木県立今市高等学校

文章を読む、という行為は相手の言いたいことを正確に理解することを第一の目的とする。しかし新聞を読む、という行為は単に記事の内容を正確に理解することにとどまらない。

新聞を読む場合、多くの人は目についた記事を適当に選んで読んでいる訳ではない。各自が自分の興味関心に従って記事を取捨選択して読んでいます。その究極の形がネット配信システムだ。興味あるジャンルを登録しておけば、そのジャンルのニュースだけを配信してもらい、読むことができる。

しかしジャンルを特定していても欲しい内容の記事が必ず送られてくるとは限らない。なぜなら、記事をジャンルに分けるのは相手先の人為的ルールに基づくものであり、無関係とされた記事でも読んでみると関心のあるジャンルが含まれている場合があるからだ。新聞を読むのにもアンテナを広く、高く張っておくことが必要なのだ。

臼井先生の実践発表はこのことを教えてくれる内容である。「数学は役に立たない」「数学は自分たちと関係がない」という生徒にそうではない、とさりげない記事から授業を展開していく。

たとえば、閣議の記事から座り方を円順列で説明する。セシウム137の半減期の記事から指数関数を説明し、決してゼロにならないことを説明する。東日本大震災のマグニチュードが8.8→9.0に訂正された記事を対数で計算し、0.2の違いがエネルギーにして2倍も違うことを説明する。

臼井先生の実践発表は、一つは慧眼の主は記事の中から思いもよらぬ内容を掘り出すこと、一つは特定のジャンルに片寄らない新聞の読み方が必要であることを教えてくれる。生徒に新聞の読み方の広がりを感じさせる実践として興味深く拝聴した。



複数紙の社説を読み比べた宇都宮大附属中の公開授業

社説で思考力深める

宮城県名取高等学校 岡田 響

●公開授業／「対話的な学習活動を通して学びを つなげる国語科授業の創造—『情報の扱い方』に着目 して—」宇都宮大学教育学部附属中学校第3学年・ 国語科

異なる新聞社の、同じ題材を取り上げた社説を選び、段落ごとのつながりを意識したチャート図を書きながら比較し、それぞれの新聞社の表現や構成の工夫等を探るといった授業であった。

中学生ながらも、見事な新聞の読解をし、かつ考察を深めていく過程を見ることができた。実際、主張や強調したい部分、具体例の内容などの違いが、各新聞社には見られる。それらの比較を行うことで、生徒たちの語彙力が向上する上に、部分と全体や具体と抽象などに着目するようになり、論理的な思考や批判的な思考が身に付いていくのだと感じた。

高等学校の国語では、「国語表現」の科目において新聞を活用する時間を設けることができるだろう。今回の授業を参考に、新聞を読み比べる、もしくは一つの記事を読み深めるといった学習活動を行わせてみたい。

数学的に考える教材

宮城県宮城第一高等学校 三嶋 廣人

●実践発表／「高校数学と社会を結び『新聞』」 栃木県立今市高等学校

栃木県立今市高校は、総合学科における数学活用での実践発表であった。身の回りの数学に関係することを新聞形式にまとめた「数学新聞」の作成や、新聞の中から数学に関連した記事を探す活動を行っている。

新聞の中の数学と聞いて、文中にある数字や記事の横にあるグラフや図表をイメージしていたが、写真の中の建物の形やスポーツの対戦表や星取表も数学の一部であるということに気付かされた。

また、新聞記事の中に出てくる、出生率や支持率、〇〇%上昇（減少）といった割合などでは、短期的に見ているのか長期的に見ているのか、計算前の数字を正確に把握しなければ、現象の見え方が変わってしまうということに、改めて気付かされた。

次期学習指導要領では、数学的な見方・考え方を働かせ、数学的活動を通して、数学的に考える資質・能力を育成することを目指している。その教材としての新聞は非常に有効であると感じた。

生徒だけで討論運営

宮城県宮城広瀬高等学校 矢部 鋼治

●公開授業／「新聞記事を活用したディベートの実践—大学入試改革に備え『情報を多面的にとらえる能力』を養う—」文星芸術大学附属高等学校 第2学年・総合的な学習の時間

授業者の竹内先生は、冒頭で参観者に対して、これまでのNIEの取り組み、生徒の実態等を説明し、本時のディベートのテーマおよび進め方について生徒と確認した。その後は司会の生徒に進行を委ねた。

本時のディベートのテーマは、生徒たちが設定した「出生前診断の是非」であった。このテーマについて、A・Bの2チームそれぞれ「メインディベーター」3名、「相談役」1名、「タブレット操作」1名の各5名で構成し、進行は、「メイン司会」1名、「司会補佐」1名、「タイムキーパー」1名の計3名が担当した。この他に作戦タイム中に会場の参観者に質問を行う「インタビュアー」に2名があたり、合計15名で展開された。また、参観者とディベート会場の間に1学年28名が参加し、判定員を担った。

両チームの生徒は事前に「賛成派」「反対派」両方の資料を準備し、開始時にじゃんけんを決まった立場で立論、尋問、自由討論、そして最終弁論と進めて戦った。核心に迫るところで、準備してきた新聞記事の数値データや論説などを提示して持論を展開するのだが、両チームとも「命」の尊さを重んじる姿勢は共通していた。

新聞を深く読み込むことで、「賛成派」「反対派」のいずれにも対応しうる資料を収集したことも感心したが、始まりから終わりまで先生が介入することなく結果発表まで終えたこと、そして、データの提示から作戦タイム中のインタビューまでICT機器を駆使して生徒たちだけではなく会場全体の一人一人が授業に参加できたことは、大いに参考とすべきものであった。



生徒がICT機器を使って根拠とするデータを示しながら、出生前診断の是非を討論した文星芸術大附属高の公開授業

Ⅷ 研究組織

1 宮城県NIE委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県NIE委員会と称する。

(目的)

第2条 本会はNIE (Newspaper in Education・教育に新聞を)の呼称にちなみ、新聞を生きた教材として活用し、文章作成をはじめ、社会問題への理解など教育内容を豊かにするとともに、情報化社会における情報の処理、活用能力を高めて、幅広い人間形成に役立てることを目的とする。

(事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次の事案について協議し、指導助言する。

①実施目的及び計画に関すること。

②研究推進組織に関すること。

(組織)

第4条 本会の委員構成は次に掲げるものとする。

宮城県教育委員会代表者
仙台市教育委員会代表者
宮城県小学校長会会長
仙台市小学校長会会長
宮城県中学校長会会長
仙台市中学校長会会長
宮城県高等学校長協会会長
宮城県連合小学校教育研究会会長
宮城県連合中学校教育研究会会長

宮城県連合小学校特別活動研究会会長
宮城県連合中学校特別活動研究会会長
宮城県連合小学校生活・総合研究会会長
仙台市中学校総合的な学習研究会会長
宮城県連合小学校国語研究会会長
宮城県連合中学校国語研究会会長
仙台市中学校国語研究会会長
宮城県内の大学の代表者
在仙の日本新聞協会加盟社の代表者

(任期)

第5条 委員の任期は2年とし、再任を妨げない。

(会長・副会長・監事)

第6条 1 本会に、会長1名、副会長5名、監事1名を置く。

2 会長は委員会を代表し、会務を統括する。

3 副会長は会長が指名する。

4 会長に事故ある時は、副会長がその会務を代理する。

5 監事は会計監査を行う。

(会議)

第7条 本会の会議は、会長が招集し、主宰する。

(顧問)

第8条 本会に次の顧問を置く。

宮城県教育長 仙台市教育長

(推進委員会)

第9条 本会の事業を達成するために、宮城県NIE推進委員会を置く。この会則は別に定める。

(庶務)

第10条 1 本会の庶務は、宮城県NIE委員会事務局が行う。

2 会計年度は4月1日から翌年3月31日とする。

(報酬)

第11条 本会の会長、副会長及び委員には報酬を支給しない。

(補則)

第12条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正 平成5年7月1日

改正 平成6年6月9日

改正 平成16年2月27日

改正 平成18年2月15日

改正 平成22年2月26日

改正 平成22年6月1日

改正 平成23年7月5日

改正 平成24年6月5日

改正 平成25年6月20日

2 宮城県N I E推進委員会会則

(名称)

第1条 本会は宮城県N I E推進委員会と称する。

(目的)

第2条 本会は、宮城県N I E委員会会則の第2条(目的)を達成するために、次のことを行う。

- ①教科及び領域等における、新聞を教材として活用する実践の研究
- ②児童・生徒の現代社会に対応する情報活用能力の育成

(研究)

第3条 本会は前条の目的を達成するために、次のことについて協議し、研究する。

- ①N I E研究活動の推進
- ②研修会の開催、研究成果の公開及びその表彰
- ③新聞についての諸調査
- ④研究会誌の編集と発行
- ⑤その他の会の目的を達成するために必要なこと

(組織)

第4条 1 本会は、N I Eに関心を持ち、加入を希望する教育関係者等で組織する。

2 本会の構成は次の通りとする。

委員長1名、副委員長、運営委員、専門委員、委員、事務局

3 委員長、副委員長を役員とする。

(任期)

第5条 役員、運営委員の任期は1年とする。ただし再任を妨げない。

(委員長)

第6条 1 委員長は別表に基づき、副委員長が輪番でその任にあたる。

2 委員長は委員会を代表し、会務を統括する。

(副委員長)

第7条 1 副委員長は、次に掲げるものとする。

宮城県連合小学校特別活動研究会長、同中学校特別活動研究会長、同小学校生活・総合研究会長、
仙台市中学校総合的な学習研究会長、宮城県連合小学校国語研究会長、同中学校国語研究会長、
仙台市中学校国語研究会長、本会小学校部会長、同中学校部会長、同高等学校部会長

2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその会務を代行する。

(運営委員)

第8条 1 運営委員は、会員の互選により定める。

2 運営委員は、研究活動の運営及び推進を主導する

(専門委員)

第9条 1 専門委員は、会員の互選により定める。

2 専門委員は、それぞれの所属する研究部門において実践にあたる。

(会議)

第10条 本会の会議は、委員長が招集し、主宰する

(提携する他の機関)

第11条 本会の目的を達成するために、宮城県N I E委員会と提携する。

(庶務)

第12条 本会の庶務は、宮城県N I E委員会事務局が行う。

(補則)

第13条 この会則に定めるもののほか、本会に必要な事項は別に定める。

付 則 この会則は、平成元年7月7日から施行する。

改正 平成5年6月25日

改正 平成16年2月27日

改正 平成20年1月16日

改正 平成23年2月25日

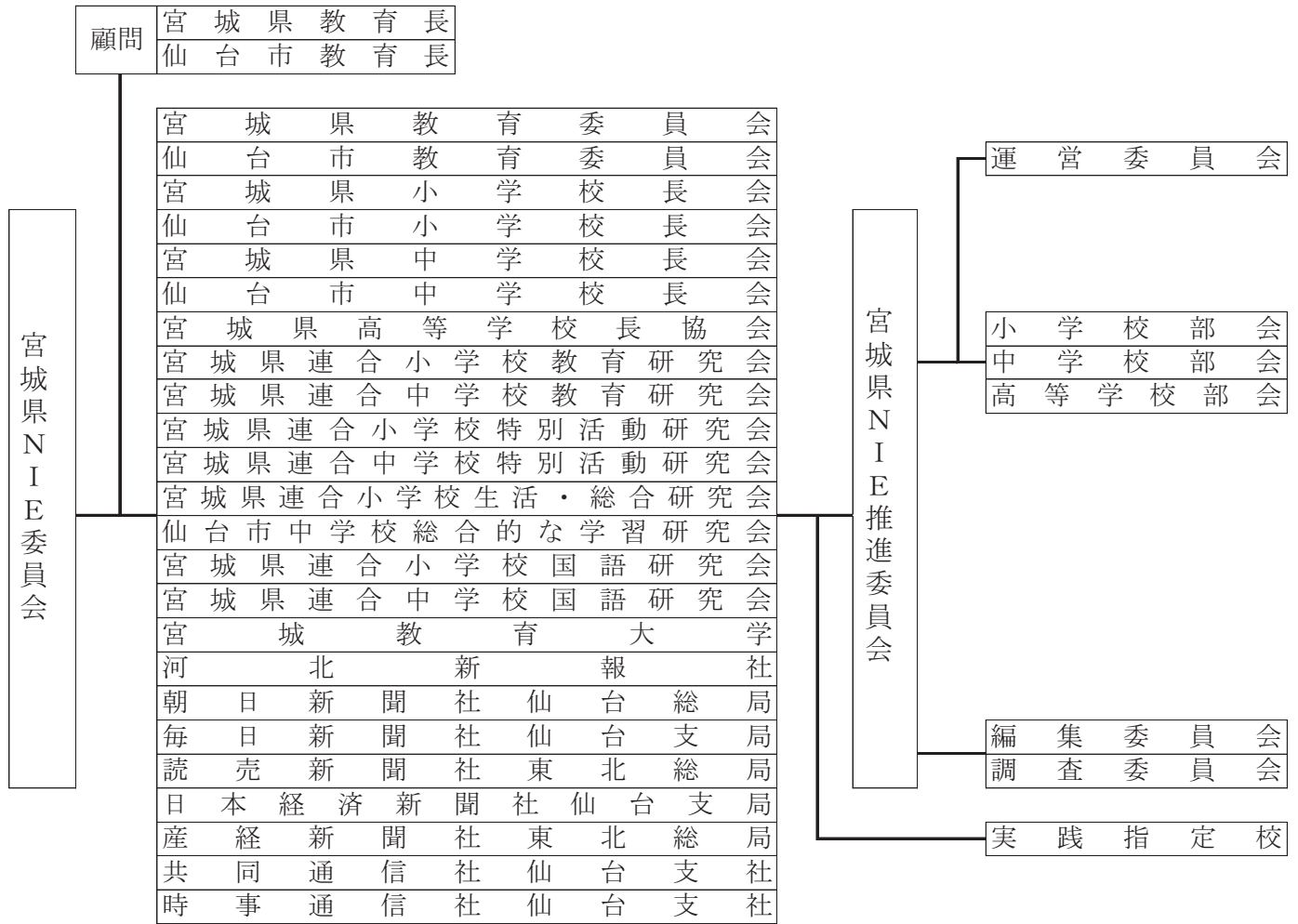
改正 平成24年6月5日

改正 平成31年2月13日

◆内規 *追加

1 宮城県N I E実践指定校は、教員1名以上が本会に加入し、運営委員を務める。

3 宮城県NIE委員会 及び 宮城県NIE推進委員会の構成



令和元年度宮城県NIE委員会役員

〈敬称略〉

役職	氏名	所属役職
顧問	伊東昭代	宮城県教育委員会教育長
顧問	佐々木洋	仙台市教育委員会教育長
会長	鈴木一史	宮城県中学校長会会長（増田中学校長）
副会長	小林裕介	宮城県高等学校長協会会長（仙台第一高校長）
副会長	鈴木芳夫	仙台市中学校長会会長（五城中校長）
副会長	千葉清人	宮城県小学校長会会長（気仙沼小校長）
副会長	今野孝一	仙台市小学校長会会長（上杉山通小校長）
副会長	鈴木淳	河北新報社 防災・教育室長
委員	伊藤俊	宮城県教育庁 参事兼高校教育課長
委員	奥山勉	宮城県教育庁 参事兼義務教育課長
委員	岩田光世	仙台市教育局 教育指導課長
委員	宇津江俊彦	宮城県連合小学校教育研究会会長（巨理小校長）
委員	身崎裕司	宮城県連合中学校教育研究会会長（塩釜第一中校長）
委員	門脇恒明	宮城県連合小学校特別活動研究会会長（連坊小路小校長）

役職	氏名	所属役職
委員	工藤哲	宮城県連合中学校特別活動研究会会長（七郷中校長）
委員	佐々木賢哉	宮城県連合小学校生活・総合研究会会長（四郎丸小校長）
委員	八島浩子	仙台市中学校総合的な学習研究会会長（生出中校長）
委員	小石俊聡	宮城県連合小学校国語研究会会長（八幡小校長）
委員	新沼健弘	宮城県連合中学校国語研究会会長（西山中校長）
委員	児玉忠	宮城教育大学（教授）
委員	矢部丈彦	朝日新聞社 仙台総局長
委員	大谷麻由美	毎日新聞社 仙台支局長
委員	池辺英俊	読売新聞社 東北総局長
委員	和佐徹哉	日本経済新聞社 仙台支局長
委員	廣瀬典孝	産経新聞社 東北総局長
委員・監事	長田良夫	共同通信社 仙台支社長
委員	渡辺知毅	時事通信社 仙台支社長

令和元年度教育委員会担当者 〈敬称略〉

宮城県	櫻井知大	宮城県教育庁高校教育課主幹
宮城県	稲辺正浩	宮城県教育庁義務教育課課長補佐
仙台市	野中映里	仙台市教育局教育指導課指導主事

令和元年度 宮城県NIE推進委員会 運営委員会

(敬称略)

役 職	氏 名	学校名(職名)・所属
委員長	門 脇 恒 明	仙台市立連坊小路小学校 (校長)
副委員長	佐々木 賢 哉	仙台市立四郎丸小学校 (校長)
副委員長	小 石 俊 聡	仙台市立八幡小学校 (校長)
副委員長・小部会長	中 辻 正 樹	仙台市立高砂小学校 (校長)
運委・小副部会長	阿 部 謙	仙台市立岡田小学校 (校長)
運委・小副部会長	伊 藤 公 一	仙台市立秋保小学校 (校長)
運委・元小副部会長	相 澤 経 利	仙台市立七北田小学校 (校長)
運委・実践指定校	佐 藤 由 依	仙台市立長命ヶ丘小学校
運委・実践指定校	山 内 崇 寛	仙台市立館小学校
運委・実践指定校	佐 藤 慶 一	仙台市立泉松陵小学校
運委・実践指定校	武 山 知 子	南三陸町立戸倉小学校
運委・実践指定校	大 澤 寛 子	聖ウルスラ学院英智小・中学校
運委・編集長	青 木 茂	仙台市立高砂小学校
運委・編集	秋 場 文 東	松島町立松島第一小学校
運委・会計	大 友 浩 美	仙台市立袋原小学校
運委	加 勢 徳 寿	登米市立西郷小学校 (教頭)
運委	大 場 陽 子	利府町立しらかし台小学校 (教頭)
運委	山 本 十和子	仙台市立片平丁小学校
運委	安 積 章 彦	仙台市立中田小学校
運委	石 井 真紀子	仙台市立八木山小学校
運委	行 本 忠 司	仙台市立大野田小学校
運委	千 葉 久美子	仙台市立七北田小学校
運委	今 藤 正 彦	仙台市立七北田小学校
運委	松 本 瑞 雅	仙台市立柳生小学校
運委	千 葉 修	大崎市立三本木小学校
運委	松 永 秀 子	角田市立角田小学校
運委	門 井 菜津子	柴田町立柴田小学校
運委	鈴 木 誠	多賀城市立山王小学校
運委	小 山 順 一	登米市立北方小学校
運委	三 塚 理 恵	美里町立青生小学校
副委員長・中部会長	工 藤 哲	仙台市立七郷中学校 (校長)
副委員長・中副部会長	八 島 浩 子	仙台市立生出中学校 (校長)
副委員長・中副部会長	新 沼 健 弘	仙台市立西山中学校 (校長)
運委・実践指定校	齋 藤 美 佳	大崎市立岩出山中学校
運委・編集	進 藤 千 枝	仙台市立長町中学校
運委・編集	丸 山 仁	宮城学院中学校
運委・会計	菅 原 久 美	仙台市立折立中学校
運委	須 藤 浩 司	仙台市立八木山中学校
運委	木 下 晴 子	仙台市立高森中学校
運委	清 野 和 俊	仙台市立住吉台中学校
運委	相 澤 和 男	仙台市立松陵中学校
運委	八 木 節 子	大崎市立岩出山中学校
運委	庄 司 涉	大崎市立松山中学校
運委	山 家 優 子	登米市立豊里中学校
副委員長・高部会長・実践指定校	鈴 木 理 恵	仙台城南高等学校
運委・高副部会長	高 瀬 琢 弥	宮城県仙台三桜高等学校
運委・実践指定校	阿 部 正 義	宮城県仙台三桜高等学校
運委・実践指定校	内 田 元	宮城県多賀城高等学校
運委・実践指定校	小 林 治	宮城県名取高等学校
運委・実践指定校	穀 田 長 彦	宮城県宮城広瀬高等学校
運委・編集	幸 野 久 嗣	宮城県多賀城高等学校
運委・会計	大 槻 欣 史	宮城県名取北高等学校
運委	浅 水 啓一郎	宮城県涌谷高等学校 (教頭)
運委	柴 田 隆 一	東北学院高等学校 教育研究部 (部長)
運委	平 居 高 志	宮城県塩釜高等学校
運委	萱 沼 俊 一	宮城県白石工業高等学校
運委	木 村 誠	宮城県仙台南高等学校
運委	三 嶋 廣 人	宮城県宮城第一高等学校
運委	加 藤 寿	東北学院高等学校
運委	坂 本 謙	宮城県図書館 資料奉仕部 (主幹)
運委	斎 田 淳 一	青葉区中央市民センター (主査兼社会教育主事)

NIEアドバイザー

(敬称略)

氏 名	学校名(職名)・所属
中 辻 正 樹	仙台市立高砂小学校 (校長)
阿 部 謙	仙台市立岡田小学校 (校長)
菅 原 久 美	仙台市立折立中学校
木 下 晴 子	仙台市立高森中学校
齋 藤 美 佳	大崎市立岩出山中学校
大 槻 欣 史	宮城県名取北高等学校
坂 本 謙	宮城県図書館 資料奉仕部 (主幹)
齋 藤 昭 雄	日本新聞協会NIEアドバイザー

宮城県NIE事務局

氏 名	所 属 役 職
鈴 木 淳	河北新報社防災・教育室長
与 野 珠 美	河北新報社防災・教育室部長
須 藤 宣 毅	河北新報社防災・教育室部次長
渡 辺 ゆ き	河北新報社防災・教育室
丹 野 綾 子	河北新報社防災・教育室
畠 山 厚 子	宮城県NIE委員会コーディネーター
伊 藤 純 子	河北新報社防災・教育室
武 藤 浩 子	河北新報社防災・教育室

Ⅹ 宮城県NIEの歩み

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成元年度	県NIE 委員会・ 推進委員 会設立事 務局河北	小 9 中 17 計 26	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録1号
平成2年度		小 22 中 17 計 39	○芦口小 ○中野中	○芦口小 ○中・研究グループ ○小・研究グループ	○芦口小 H2・10 ○八幡小 H2・10 ○中野中 H3・1		○県研究集録2号 ○紀要 芦口小 八幡小
平成3年度	高校部会 発足	小 24 中 26 高 9 計 59	○長町中	○中・研究グループ ○小・研究グループ			○県研究集録3号 ○実践事例集 小グループ1号
平成4年度		小 27 中 22 高 10 計 59	○長町中 ○旭丘小	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○長町中 H5・1 ○旭丘小 H5・1	○小学校NIE研修会	○県研究集録4号 ○実践事例集 小グループ2号
平成5年度	朝日・読売 毎日・共同 時事の各社 加盟	小 56 中 30 高 16 計 102	○長町中 ○旭丘小 ○折立小 ○八軒中	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H5・10 ○長町中 H6・1 ○旭丘小 H6・2	○小・中学校NIE研修会	○県研究集録5号 ○実践事例集 小グループ3号
平成6年度	日経・産経 の各社加盟	小 68 中 49 高 18 他 1 計 136	○折立小 ○上杉山通小 (バ イ ョ ッ 校) ○八軒中 ○向陽台中 (バ イ ョ ッ 校) ○泉高 (バ イ ョ ッ 校)	○中・研究グループ ○小・研究グループ	○八軒中 H6・10 ○泉高 H6・11 ○折立小 H7・2	○小・中・高校NIE研修会	○県研究集録6号 ○紀要 折立小 ○実践事例集 小グループ4号 中NIE部1号 ○みやぎNIEだより1. 2. 3号
平成7年度		小 105 中 47 高 19 他 5 計 176	○上杉山通小 (バ イ ョ ッ 校) ○向陽台中 (バ イ ョ ッ 校) ○袋原小 ○茂庭台中 ○泉高 (バ イ ョ ッ 校)	○小・中・高部会の 研究活動	○向陽台中 H7・12 ○上杉山通小 H8・1	○宮城県NIE研修会 ○地区研修会 (古川) ○地区研修会 (七ヶ浜)	○県研究集録7号 ○紀要 上杉山通小 ○実践事例集 小学校部会5号 中学校部会12号 ○みやぎNIEだより4. 5号
平成8年度		小 113 中 54 高 22 他 7 計 196	○袋原小 ○上杉山通小 ○将監小 ○古川一小 ○茂庭台中 ○生出中 ○宮中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動 (授業研究)	○茂庭台中 H8・10 ○上杉山通小 H8・10 ○桜丘中 H8・11 ○将監小 H9・1 ○袋原小 H9・2	○宮城県NIE研修会 (仙台市) ○地区研修会 (白石二小) ○地区研修会 (石巻・住吉小)	○県研究集録8号 ○紀要 袋原小 ○実践事例集 小学校部会6号 ○みやぎNIEだより 6. 7. 8. 9号
平成9年度		小 122 中 60 高 28 他 7 計 217	○将監小 ○古川一小 ○桂小 ○大鷹沢小 ○生出中 ○宮中 ○蒲町中 ○仙台二高 ○東北学院高	○小・中・高部会の 研究活動	○将監小 H9・11 ○桂小 H10・2	○宮城県NIE研修会 (常盤木学園高) ○地区研修会 (大鷹沢小) ○地区研修会 (石巻中) ○中・高部会研修会 (田子中)	○県研究集録9号 ○紀要 将監小 ○みやぎNIEだより 10. 11. 12. 13号
平成10年度		小 132 中 61 高 27 他 7 計 227	○桂小 ○大鷹沢小 ○女川四小 ○蒲町中 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動	○女川四小 H10・5 (授業公開) ○桂小 H10・11 (授業公開) ○常盤木学園高 H10・11 ○大鷹沢小 H11・1 (授業公開)	○第3回NIE全国大会 (メルパルクSENDAI) ○地区研修会 (稲井小) ○中・高部会研修会 (七郷中) ○小部会研修会 (桂小)	○県研究集録10号 ○NIE実践事例集 「やってみよう!NIE」 小学校部会 ○みやぎNIEだより 14. 15. 16. 17号

	組 織	推進委員 (人)	協 力 校 実 践 校	研究グループ 部 会 研 究	授 業 公 開 実 践 発 表 会	研 修 会	集 録 ・ 紀 要 ・ 他
平成11年度		小 132 中 60 高 28 他 10 計 230	○女川四小 ○東長町小 ○しらかし台小 ○七郷中 ○金ヶ瀬中 ○塩竈二中 ○山田中 ○仙台南高 ○常盤木学園高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの 研究)	○常盤木学園高H11・11 (授業公開) ○しらかし台小H11・11 (授業公開) ○女川四小H11・11 (授業公開) ○七郷中 H11・12・1 (授業公開)	○宮城県NIE研修会 ○小部会プロジェクト提案 ○地区研修会(蛇田小) ○地区研修会(金ヶ瀬中) ○中部会授業研究会(七郷中) ○小部会実践発表会(東長町小)	○県研究集録11号 ○みやぎNIEだより 18・19・20・21号
平成12年度		小 128 中 60 高 31 他 13 計 232	○東長町小 ○大沢小 ○しらかし台小 ○蛇田小 ○山田中 ○秋保中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高	○小・中・高部会の 研究活動 (実践発表・授業 研究・プロジェ クトチームの 研究)	○しらかし台小 H12・11 (授業公開) ○秋保中 H12・11 (授業公開) ○東長町小 H13・11 (授業公開)	○小部会研修会(大沢小) (デモケース活用) ○宮城県NIE研修会 (八木山小) ○地区研修会(しらかし台小) ○地区研修会(蛇田小)	○県研究集録12号 ○みやぎNIEだより 22・23・24・25号
平成13年度		小 128 中 61 高 34 他 16 計 239	○大沢小 ○蛇田小 ○月見ヶ丘小 ○秋保中 ○塩竈一中 ○明成高 ○仙台向山高 ○蔵王高 ○仙台国南萩陵高	○小・中・高部会の 研究活動	○仙台向山高 H13・10 (授業公開) ○明成高 H13・12 (授業公開)	○宮城県NIE研修会 (明成高) ○地区研修会(蛇田小) ○地区研修会(塩竈一中)	○県研究集録13号 ○みやぎNIEだより 26・27・28・29号
平成14年度		小 129 中 62 高 34 他 14 計 239	○月見ヶ丘小 ○逢隈小 ○小野小 ○塩竈一中 ○将監中 ○筆甫中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台国南萩陵高	○小・中・高部会の 研究活動 「NIEおしゃべり広場」 「インターネット活用」 中・高部会「公開講演会」 (H14・12・3)		○宮城県NIE研修会 (河北新報社) H14・11・7 ○地区研修会(大河原) ○地区研修会(石巻古川)	○県研究集録14号 ○みやぎNIEだより 30・31・32・33号
平成15年度		小 129 中 53 高 34 他 14 計 230	○小野小 ○逢隈小 ○嵯峨立小 ○将監中 ○筆甫中 ○五橋中 ○東北朝鮮学校 ○女川高 ○仙台北百合学 園中・高	○小・中・高部会の 研究活動		○宮城県NIE研究大会 (青葉体育館) H15・8・20 ○地区研修会(逢隈小) ○地区研修会 (鳴瀬町中央公民館)	○県研究集録15号 ○みやぎNIEだより 34・35・36・37号
平成16年度		小 124 中 57 高 31 他 11 計 223	○嵯峨立小 ○五橋中 ○仙台北百合学 ○越河小 園中・高 ○広瀬小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○五橋中 (授業公開) H16・11・2	○宮城県NIE研究大会 H16・11・2(五橋中) ○地区研修会(白石市中央公 民館) ○地区研修会(田尻中)	○県研究集録16号 ○みやぎNIEだより 38・39・40・41号
平成17年度		小 123 中 54 高 28 他 12 計 217	○越河小 ○広瀬小 ○幸町中 ○田尻中 ○仙台商高 ○米山高 ○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○東北朝鮮学校	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動 ○小学校部会授業 研究 H18・2・10 (鹿野小)	○仙台北百合学 園中・高 (授業公開) H17・11・9	○宮城県NIE研究大会 H17・11・9 (仙台北百合学園) ○地区研修会(田尻中) ○地区研修会(大河原中)	○県研究集録17号 ○みやぎNIEだより 42・43・44・45号
平成18年度		小 125 中 53 高 28 他 11 計 217	○栗生小 ○金ヶ瀬小 ○西山中 ○大河原中 ○泉館山高 ○本吉・大谷小 ○東北朝鮮学校 ○南中山中 ○仙台・中田中 ○大沢中 ○白石南中 ○唐桑中	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動 ○小学校部会授業 研究 H18・12・6 (原町小)	○南中山中 (授業公開) H18・11・9	○宮城県NIE研究大会 H18・11・9 (仙台市立南中山中) ○地区研修会(大谷中) ○地区研修会(大河原中)	○県研究集録18号 ○みやぎNIEだより 46・47・48・49号

	組織	推進委員 (人)	協力校 実践校	研究グループ 部会研究	授業公開 実践発表会	研修会	集録・紀要・他
平成19年度		小 124 中 52 高 27 他 10 計 213	○本吉・大谷小 ○南中山中 ○仙台・中田中 ○白石南中 ○大沢中 ○唐桑中 ○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院 女子中・高	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○黒松小 (授業公開) H19・10・3	○宮城県NIE研究大会 H19・10・3 (仙台市立黒松小) ○地区研修会(大谷中) ○地区研修会(涌谷第一小)	○県研究集録19号 ○みやぎNIEだより 50・51・52・53号
平成20年度		小 126 中 53 高 28 他 8 計 215	○鹿野小 ○涌谷一小 ○鶴谷中 ○五城中 ○尚綱学院中・高 ○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○大沢中 (奨励校)	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○大沢中学校 (授業公開) H20・11・17 ○涌谷第一小 (授業公開) H21・1・22	○宮城県NIE研究大会 H20・11・17 (仙台市立大沢中) ○地区研修会(富谷成田中) ○地区研修会(亘理図書館)	○県研究集録20号 ○みやぎNIEだより 54・55・56・57号
平成21年度		小 140 中 54 高 23 他 10 計 227	○横山小 ○亘理小 ○成田中 ○生出中 ○向陽台中 ○常盤木学園高 ○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○涌谷一小 (奨励校)	○小・中・高部会特 別研究部会の研究 活動	○榴岡小 (授業公開) H21.11.25 ○旭丘小 (授業公開) H21.12.10	○宮城県NIE研究大会 H21.11.25 (仙台市立榴岡小) ○地区研修会(石巻河南東中) ○小部会研究交流会(旭丘小)	○県研究集録21号 ○みやぎNIEだより 58・59・60・61号
平成22年度	官教大加盟 高校長協会 加盟	小 121 中 50 高 18 大 4 他 12 計 205	○榴岡小 ○館小 ○吉田小 ○河南東中 ○川崎中 ○古川第三小 ○塩竈第三小 ○大河原小 ○高森中 ○横山小 ○仙台第一高 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	南小泉中 (授業公開) H22.11.11 蒲町小 (授業公開) H22.11.26	○宮城県NIE研究大会 H22.11.11 (仙台市若林区文化センター) ○地区研修会(塩竈第三小) ○小部会研究交流会(蒲町小)	○県研究集録22号 ○みやぎNIEだより 62・63・64・65・66号
平成23年度	小学校国語 研究会加盟	小 120 中 50 高 17 大 4 他 14 計 205	○古川第三小 ○大河原小 ○塩竈第三小 ○高森中 ○仙台第一高 ○小牛田小 ○東宮城野小 ○台原中 ○八乙女中 ○石巻北高 ○東北学院 ○榴岡小 榴ヶ岡高 (奨励校) ○泉高	○小・中・高部会 研究活動	○榴岡小 (授業公開) H23.10.18 ○東宮城野小 (授業公開) H23.12.7 ○大河原小 (授業公開) H24.1.24 ○古川第三小 (授業公開) H24.2.23	○宮城県NIE研究大会 H23.12.7 (仙台市立東宮城野小) ○宮城県NIE地区研修会 H23.8.17 (河北新報社)	○県研究集録23号 ○みやぎNIEだより 67・68・69・70号
平成24年度	宮城県中 校国語研 会加盟	小 114 中 51 高 16 大 4 他 15 計 200	○東宮城野小 ○小牛田小 ○台原中 ○八乙女中 ○東北学院 ○石巻北高 榴ヶ岡高 ○泉高 ○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○水産高 ○大河原小 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○八乙女中 (授業公開) H24.11.9 ○小牛田小 (授業公開) H24.11.28 ○北六番丁小 (授業公開) H25.1.16	○宮城県NIE研究大会 H24.11.9 (仙台市立八乙女中) ○地区研修会(大和吉岡小) ○小部会研究交流会(北六小) ○公開実践発表会(協力校) (河北新報社)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H24.9.22 (河北新報社) ○県研究集録24号 ○みやぎNIEだより 71・72・73・74号
平成25年度		小 111 中 46 高 17 大 5 他 12 計 191	○北中山小 ○吉岡小 ○東郷小 ○古川東中 ○宮城水産高 ○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○聖ウルスラ ○富沢中 学院英智小中 ○東北学院高 ○八乙女中(奨励校) ○小牛田小(奨励校)	○小・中・高部会 研究活動	○八乙女中(自主公開) H25.11.8 ○小牛田小(自主公開) H25.11.14 ○東郷小(自主公開) 2014/2/13	○宮城県NIE研究大会 H25.11.22 (仙台市立北中山小) ○地区研修会(吉野作造記念館) ○小部会研究交流会(郡山小) ○公開実践発表会 H26.2.20 (河北新報社)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H25.9.21 (岩手県一関市) ○県研究集録25号 ○みやぎNIEだより 75・76・77・78号

	組織	推進委員 (人)	協力校 実践校	研究グループ 部会研究	授業公開 実践発表会	研修会	集録・紀要・他
平成26年度		小 115 中 49 高 19 大 5 他 14 計 202	○荒町小 ○古川二小 ○岩沼小 ○富沢中 ○聖ウルスラ ○東北学院高 学院英智小中 ○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○仙台青陵中 ○多賀城高 ○吉岡小（奨励校） ○東郷小（奨励校）	○小・中・高部会 研究活動 ※小学校部会： 5年国語科の 提案授業実践	○富沢中（授業公開） H26.11.18	○宮城県NIE研究大会 H26.11.18 (仙台市立富沢中) ○地区研修会（七ヶ浜国際村） H26.8.18 ○小部会提案授業①(泉松陵小) ○小部会提案授業②(七北田小)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H26.9.20 ○実践報告集26号 ○みやぎNIEだより 79・80・81・82号 ○日本NIE学会（東北福祉大）
平成27年度		小 106 中 46 高 18 大 5 他 11 計 186	○松ヶ浜小 ○田子小 ○蔵王：宮中 ○多賀城高 ○仙台青陵中 ○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○東北学院高 ○宮城学院中 (奨励校)	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 5年国語科の提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学 英語科授業実践 講演会の実施	○田子小（授業公開） ○5年国語科提案授業の 公開（運営委員在籍校） ○仙台青陵中等教育学校の 実践発表会	○宮城県NIE研究大会 H27.12.2 (仙台市立田子小) ○地区研修会（塩釜第一小） ○小部会提案授業公開 ※14校で実施 ○高部会実践発表会	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H27.10.3 (北海道新聞社) ○実践報告集27号 ○みやぎNIEだより 83・84・85・86号
平成28年度		小 98 中 41 高 20 大 5 他 6 計 170	○塩竈一小 ○上沼小 ○中野栄小 ○七北田小 ○利府西中 ○宮城学院中 ○船岡小 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台城南高	○小・中・高部会 研究活動 ・小学校部会 5年国語科の提案授業実践 ・高校部会 新聞社見学（河北新報社）	○宮城学院中の実践報告 ○登米市立上沼小学校の 授業公開（5年） ○仙台城南高のICT公開 (NIEとの関連)	○宮城県NIE研究大会 H28.11.9 (宮城学院中) ○地区研修会（柴田小） ○七北田小提案授業 ○上沼小提案授業	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 (福島民報社) 2016/9/24 ○実践報告集28号 ○みやぎNIEだより 87・88・89・90号
平成29年度		小 87 中 39 高 19 大 5 他 11 計 161	○七北田小 ○船岡小 ○宮城学院中 ○柴田小 ○気仙沼高 ○聖和学園高 ○仙台城南高 ○八木山小 ○豊里小・中 ○仙台三桜高	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 (提供3658部) ・高校部会 講演会（河北新報社）	○仙台城南 高等学校 (授業公開) ○仙台城南高の ICT公開 (NIEとの関連)	○宮城県NIE研究大会 H29.11.8 (仙台城南高等学校) ○地区研修会(豊里小・中)	○東北・北海道地区 NIEアドバイザー会議 H29.9.30 (山形新聞社) ○実践報告集29号 ○みやぎNIEだより 91・92・93・94号
平成30年度		小 87 中 39 高 20 大 5 他 11 計 162	○柴田小 ○豊里小 ○気仙沼高 ○八木山小 ○仙台城南高 ○館小 ○豊里中 ○戸倉小 ○仙台三桜高 ○宮城広瀬高 ○聖ウルスラ 学院英智小中	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 (提供3684部) ・高校部会 実践報告講演会（河北新報社）	○宮城県仙台 三桜高等学校 (授業公開)	○宮城県NIE研究大会 H30.11.7 (宮城県仙台三桜高等学校) ○地区研修会（戸倉小）	○実践報告集30号 ○みやぎNIEだより 95・96・97号
令和元年度		小 76 中 36 高 25 大 5 他 13 計 162	○泉松陵小 ○戸倉小 ○長命ヶ丘小 ○館小 ○聖ウルスラ ○岩出山中 学院英智小中 ○宮城広瀬高 ○仙台三桜高 ○多賀城高 ○仙台城南高 ○名取高	○小・中・高部会研究活動 ・小学校部会 「新聞読み比べ」の単元で 1人1紙を持たせ授業実践 ・中学校部会 研修会（七郷中） ・高校部会 講演会・研修会	○県大会における実践発表 館小・岩出山中・広瀬高 ○パネルディスカッション ○講演会（東北大加齢医 学研究所） 瀧崎之教授 ○30周年記念座談会	○宮城県NIE研究大会(河北新報社) R1.12.20 ○地区研修会（岩出山中）	実践報告書31号 ○みやぎNIEだより 98・99・100号

VIII 編集後記

「宮城県N I E委員会実践報告書第31号」をお届けいたします。ご多用の中、原稿執筆をお引き受けいただきました各学校の先生方、関係の皆様にご心から感謝申し上げます。

本報告書は、あいさつ・寄稿、実践指定校報告、部会・研修会報告等から構成されており、大変充実した内容となっております。さらに今回は、「発行31回目の記念号」ということで、興味深い内容満載でお手元にお届けできるのを嬉しく思います。

玉稿の一つ「宮城県N I E委員会30周年記念座談会」に目を通してみると、平成元（1989）年に日本発初のN I E推進団体として設立され、平成10（1998）年には第3回N I E全国大会を仙台で開催。その後新学習指導要領の改訂を経ながら新聞を活用した活動を推進してきた事が分かります。私自身、ほぼ同時期にN I Eと出会い、学習活動に新聞を取り入れることができないかと切り抜きや読み取り、新聞づくりに取り組んでいた頃を懐かしく思い出しました。

黎明期には、N I Eを「ニー」とか「ニエ」と読まれてしまったとか、特別活動なのか教科なのかといった議論もありましたし、新聞を購読する環境が少ない児童・家庭が増える一方で、ICT活動とも連携した実践などいろいろな工夫や取組が行われてきたことがわかります。

学力についても、「読解力」の定義を指導者側がしっかりと押さえておくこと、デジタル機器を使った解答になれる環境整備、読み取った文章をもとに自分の考えを持つ過程をしっかりと指導する事が求められていることを実感しました。

令和2（2020）年から小学校、その後も中学校、高等学校と順次新学習指導要領が施行され私たちもしっかりと学習活動を深めていく必要があります。その時、永くN I Eに携わり経験豊かな皆様の提案や、研究実践校からの日々の実践に基づく報告は、きっと私たちが実践する上での力強い道しるべとなると確信しております。今後さらにN I Eが深められ発展していくことを祈念し、編集後記といたします。

（仙台市立高砂小学校 青木 茂）

<編集委員>

委員長 青木 茂（仙台市立高砂小学校）
委員 秋場 文東（松島町立松島第一小学校）
進藤 千枝（仙台市立長町中学校）
丸山 仁（宮城学院中学校）
幸野 久嗣（宮城県多賀城高等学校）

<事務局>

防災・ 鈴木 淳
教育室長（河北新報社防災・教育室長）
事務局長 与野 珠美
（河北新報社防災・教育室部長）
事務局 須藤 宜毅
（河北新報社防災・教育室次長）
渡辺 ゆき
（河北新報社防災・教育室）
丹野 綾子
（河北新報社防災・教育室）
畠山 厚子
（宮城県N I E委員会コーディネーター）
伊藤 純子
（河北新報社防災・教育室）
武藤 浩子
（河北新報社防災・教育室）

N I E実践報告書<第31号>

30周年記念特集号

令和2年3月発行

編集 宮城県N I E推進委員会
発行 宮城県N I E委員会
事務局 宮城県N I E委員会事務局
仙台市青葉区五橋一丁目2-28

（河北新報社内）

TEL. 022-211-1331

FAX. 022-211-1339

印刷 東北紙工株式会社
仙台市若林区中倉1-13-1

TEL. 022-231-2141